「好き」を深める。「好き」が広がる。

CROSS OVER

地歴甲子園

第17回

全国高校生歴史フォーラム

発表集

奈良大学
NARA UNIVERSITY

NARA PREFECTURE
奈良県

歴史追体験
なら記紀・万葉
NaraKiKiManyo Project Since 2012

目　　次

ご あ い さ つ　審査委員長・奈良大学学長　今津　節生 …… ii

審査結果の講評　第17回全国高校生歴史フォーラム実行委員長　木下　光生 …… iii

審査結果　優秀賞 …… iv

審査結果　佳作 …… v

優秀賞受賞レポート（高等学校等コード順に掲載、敬称略）

埼玉県立川口北高等学校 …… 1
研　究　者　名：大津 正彦
研究タイトル：川口市の縄文人は泥炭から土器を作ったのか

埼玉県・昌平中学・高等学校 …… 17
研究グループ名：社会歴史研究部
研　究　者　名：馬塚敦也
研究タイトル：「高野の施餓鬼」信仰の広がりとその起源
～近隣都県の市区町村史から探る～

神奈川県立足柄高等学校 …… 33
研究グループ名：歴史研究部
研　究　者　名：米澤檜
研究タイトル：関東大震災下の箱根地域の被害と復旧
―残された史料・石碑から読み解く―

神奈川県立足柄高等学校 …… 49
研究グループ名：歴史研究部
研　究　者　名：秋山七海
研究タイトル：現代に伝わった人形芝居
―班目人形芝居の歴史―

岐阜県立関高等学校 …… 65
研究グループ名：地域研究部
研　究　者　名：杉浦良太朗・鈴木遥斗・梅村颯太朗・酒向達也
研究タイトル：地下軍需工場建設と本土決戦準備
～東海軍管区の本土決戦構想を探る～

佳作ポスター（高等学校等コード順に掲載、敬称略） …… 77

第17回全国高校生歴史フォーラム　研究タイトル一覧 …… 82

ごあいさつ

審査委員長・奈良大学学長　今　津　節　生

奈良は、我が国の建国の地です。古墳時代・飛鳥時代・奈良時代には日本の中心として都が置かれ、中国や朝鮮からさまざまな文物や文化を取り入れて発展を遂げ、日本の礎を作り上げました。奈良には海外から様々な文化を取り入れながらも、あるものは切り捨て、あるものはより大きくするなど取捨選択しながら、日本を建国し発展してきた歴史や文化や文化財が多く残っています。

私は、奈良は日本の青春時代を象徴する場所だと思っています。３世紀には大和盆地に巨大な前方後円墳が作られはじめ全国に広がりました。飛鳥時代には飛鳥地域を中心に都が置かれ、８世紀の奈良時代には平城京を中心に発展すると共に仏教が全国に広がりました。このように、奈良に住むと日本という国が若々しく元気で力に溢れた時代を体感することができます。我が国の建国に携わった当時の人々の行動や知恵は、現在を生きるための参考にもなるはずです。私達は、奈良の歴史や文化の蓄積の中から、今の時代にあった知恵を見つけ出すことができると思います。

1300年以上の歴史をもつこの地に奈良大学が誕生したのは1969年のことです。本学には、文学部に国文学科・史学科・地理学科・文化財学科の４学科と社会学部に心理学科・総合社会学科の２学科の合計６学科を置いています。さらに大学院に文学研究科・社会学研究科があり、世代を超えてさまざまな方が学ぶ通信教育部を置いています。一つのキャンパスの中で約3,900名の学生が学んでいます。奈良で学びたい学生が全国から集まり、自宅外から通う学生は半数を超えます。全国から奈良に集まった仲間と歴史・地理・文化財・文学など、貴方が好きな学問を学びながら一緒に青春を過ごせる場所が奈良大学です。さらに、大学図書館には57万冊以上の蔵書があります。特に15万冊を超える文化財専門書を擁しており、大学図書館ランキングで１位になったこともあります。奈良大学図書館は、日本屈指の歴史・文化財情報に関する「知の拠点」として注目されています。

全国高校生歴史フォーラムは、高校生自らが、自分たちで調べ、考え、真実を発見するなど、課題の発見・解決に向けた主体的・協働的な学びを導入することで、歴史や地理、文化・文化財を探究する醍醐味を実感してほしいという願いから2007年に始まりました。第１回目は全国の22校から72編の応募が集まりました。第17回目となる今年度は、参加校が全国24都道府県から67校、応募点数が89編を数えました。今回も審査委員会による厳正な審査の結果、優秀賞に５編、佳作として５編が選ばれました。いずれも、時間をかけ工夫を重ね、知恵を絞った力作です。受賞された皆さまには、心からおめでとう、と申し上げたいと思います。フォーラム当日は優秀賞受賞者の研究発表及び佳作校のポスター発表を実施します。フォーラムの様子をライブ配信し、YouTube でも公開する予定です。

最後になりましたが、第17回 全国高校生歴史フォーラムの開催にあたり、ご尽力を賜りました皆さまに心から感謝申し上げます。特に、ご指導にあたられた先生と熱心に研究して応募された全国の高校生の皆さまに厚くお礼を申し上げます。

審査結果の講評

第17回全国高校生歴史フォーラム実行委員長　木　下　光　生

第17回全国高校生歴史フォーラムでは、北は北海道から、南は鹿児島まで、24都道府県にわたる67の学校から、89編もの研究レポートをご応募いただきました。まずは、果敢に挑戦していただいた応募者の皆さん、およびその生徒さんたちを下支えしていただいた先生方と保護者の皆さんに、厚くお礼申し上げます。

どの応募作品もレベルが高く、僅差のなかにある一つ一つの研究レポートについて、どこが面白くて重要なのか、頭をカキカキしながら、楽しく審査させていただきました。

審査でもっとも重視しているのは、「着眼点が独創的か」という点と、「限られた時間と労力のなかで、どれほど調査に汗を流しているか」の２点です。89編すべてのレポートが、この基準を高レベルなところでクリアしていましたが、優秀賞に選ばれた５作品は、とりわけその「独創性」と「汗かきぶり」が抜きん出たものでした。

優秀賞の研究レポートは、自分のたてた課題と仮説を明らかにするために、参考文献をヤマのように読み、足繁く現場に通い、検証を幾度も繰り返すという、「学問の基本」に忠実なものばかりで、その愚直さには感心させられました。また、審査員が知らないこともたくさん解明されていて、頭が下がります。加えて、戦争の直視や、文化の継承、災害の記憶など、「過去」のことを扱いつつも、それを通して「いま」を考えるという、歴史学の真骨頂に連なる研究になっているところも重要です。

たった一人で悪戦苦闘するのか、あるいはグループで、ああでもない、こうでもないと議論しながら進めるのかも、研究を進めるうえで大切なところです。本番の発表会では、それぞれの良さがどこにあるのかも意識して、是非お互いに刺激しあってください。

優秀賞の皆さんだけでなく、それに半歩だけ及ばなかった佳作の皆さん、そして一歩だけ及ばなかった残り79作品の皆さんも、今回の応募を通して、たった一つのことを明らかにすることが、いかに大変なことなのか、よく実感できたかと思います。その大変さは、社会がそれだけ複雑に出来ていることの証し、でもあります。したがって、地道に研究を進めることは、社会の複雑さを直視できる力を養うことにもなるわけです。

いまの日本や世界には、そうした「地道な作業」と「社会の複雑さの直視」を軽んじる「反知性的」な動きが、残念ながら存在しています。それをふまえると、皆さんの知性的な姿勢は、頼もしい限りです。自分たちの研究活動は、「人類の発展」を支えているのだと、是非胸を張ってほしいと思います。

審査結果

優　秀　賞

（高等学校等コード順に掲載、敬称略）

埼玉県立川口北高等学校
研　究　者　名：大津正彦
研究タイトル：川口市の縄文人は泥炭から土器を作ったのか

埼玉県・昌平中学・高等学校
研究グループ名：社会歴史研究部
研　究　者　名：馬塚敦也
研究タイトル：「高野の施餓鬼」信仰の広がりとその起源
～近隣都県の市区町村史から探る～

神奈川県立足柄高等学校
研究グループ名：歴史研究部
研　究　者　名：米澤檜
研究タイトル：関東大震災下の箱根地域の被害と復旧
―残された史料・石碑から読み解く―

神奈川県立足柄高等学校
研究グループ名：歴史研究部
研　究　者　名：秋山七海
研究タイトル：現代に伝わった人形芝居
―班目人形芝居の歴史―

岐阜県立関高等学校
研究グループ名：地域研究部
研　究　者　名：杉浦良太朗・鈴木遥斗・梅村颯太朗・酒向達也
研究タイトル：地下軍需工場建設と本土決戦準備
～東海軍管区の本土決戦構想を探る～

審査結果

佳　　作

（高等学校等コード順に掲載、敬称略）

神奈川県・逗子開成高等学校
研　究　者　名：高階賢司
研究タイトル：新資料から読み解く鎌倉食用蛙養殖場

奈良女子大学附属中等教育学校
研　究　者　名：横内清嵩
研究タイトル：なぜ巨大古墳の造営地は大阪に移るのか？
―墳丘築造企画論から考える―

鳥取県立青谷高等学校
研究グループ名：青谷学Ⅱ（文学歴史コース）
研　究　者　名：東地美咲・桐本愛夏・山田唯加
濵本叶愛・林原叶将・伊井大希
研究タイトル：青谷上寺地遺跡水田復元の試み（I）
―弥生時代の水田から学ぶ持続可能な水田へのアプローチ―

長崎県立壱岐高等学校
研　究　者　名：武井慎之介
研究タイトル：壱岐勝本城跡の本丸虎口に関する研究

長崎県立壱岐高等学校
研　究　者　名：加藤紅葉
研究タイトル：壱岐における神棚文化について

優秀賞研究レポート

（高等学校等コード順に掲載）

優秀賞

川口市の縄文人は泥炭から土器を作ったのか

埼玉県立川口北高等学校　2年　大津　正彦

はじめに

（1）研究に至る経緯

川口市は江戸時代から植木が盛んな地域である。こんな話がある。川口の苗木は低地で豊富に産出する泥炭を団子状にし、そこに挿木をすることで育てられた。保水力に優れた泥炭により簡単に根が出るのである。これにより川口の植木は高い生産性を持つに至った、と。事の真偽はともかく、それほど市内では身近に泥炭が手に入るのである。私もこの土壌に興味を持った。土地の方が泥炭では無く“粘土”と呼んでいたからである。

川口市内には安行式土器の標式遺跡である猿貝貝塚遺跡をはじめ、新郷貝塚遺跡、石神貝塚遺跡、宮合貝塚遺跡、前野宿貝塚遺跡等のほぼ同時期（縄文時代後期～晩期）に貝層が形成された貝塚遺跡群が存在する。縄文時代に興味を持った小学生の私はこれら遺跡の踏査を行い、土地主の方々のご協力があって、今に至るまでに多くの土器片を観察できた。その中で、縄文人はどこでこれだけ大量の土器を作る原料を確保したのか疑問に思った。しかし、当該期の土器の原料に関する研究は市内では皆無と言え、しばらく私はこの問題から離れていた。

２年前、私は土地の方にお願いをし、粘土と呼ばれている土壌を分けて頂いた。それは低地の畑の耕土の下に存在し、泥炭と考えられるもの（注1）であった。粘性に富み、成形は容易に思われた。これを機に、再び土器片の詳細な観察を行うと、堀之内 2 式土器、加曽利 b 式土器、後期安行式土器において、泥炭とよく似た黒色の胎土を見出すことができた。

私は縄文人がこの泥炭を土器の原料とした可能性が高いと考え、研究を始めた。

（2）前提として

１）縄文土器は一般的には粘土で作られたものとされる（小林達雄編「総覧縄文土器」及川良彦他２００８）。泥炭やその他低地に産する黒色土壌を土器の原料として想定している研究は管見の限り見当たらなかった。

２）黒色の胎土を持つ土器は、市内の石神貝塚遺跡、猿貝貝塚遺跡、宮合貝塚遺跡で発見した。各遺跡に於いても縄文時代後期の堀之内２式土器では多く、加曽利 b 式土器～安行式土器では全体の 1 割くらいの存在比である。残りの９割は赤色～暗褐色等様々であるが、層状の構造を持つことが多い。機種別には精製土器に多く、深鉢や注口土器がある。また、土器の表面の色調は一般的な土器と大差なく、土器の断面を観察することで区別する。

３）本論中の用語の定義をする。

泥炭…植物が堆積したり、それが分解されたものを多く含み、有機質に富む。

粘土…岩石などが風化し、それが堆積したもので無機物である。

１．検証点、並びに方法

大きく 2 つの検証点がある。それぞれを a、b とし方法を具体的に述べる。

a. 泥炭で土器が作れるのか検証する。

川口市の縄文土器のうち、黒色の胎土を持つ土器片は先述したように表面の色調については一般的に言われる縄文土器のそれと変わらない。では、市内採取の泥炭は焼成によって色調に変化があるのか、またそもそも焼成に耐え得るのか調べる。

方法

川口北高校の美術室にある電気炉（図版 1-1）を用いて焼成を行う。焼成温度や、時間を細かく調節できる反面、焼成する空間が小さい。そのため土器を一個体復元して焼成することは出来ず、泥炭を土器片を模した板状に加工し、焼成する。（以下これを泥炭板と呼ぶ。）

b.泥炭と縄文土器の胎土を比較分析し、一致、不一致を調べる。

方法

泥炭には多量の粒子が混入しており、川口北高校の生物室にある双眼実体顕微鏡を用いてその分析を行う。分析対象は、①泥炭、②黒い胎土を持つ土器、③黒い胎土を持たない同地域の土器、④黒い胎土を持たない他地域の土器、を想定している。比較の組み合わせは①と②、②と③、③と④、の予定だが分析結果から柔軟に対応したい。

２．結果

（１）　a. 泥炭で土器が作れるのか検証する

２０２３年6月２日　第１回焼成実験

実験に際し、泥炭はよく練った後加工したが、成形は容易で、強度も十分あった。泥炭板には輪積みを用い、少し乾燥させたのち石で研磨した（注 2）。観察しやすい泥炭塊も焼成した（図版 1－2）。焼成温度、焼成時間は「縄文土器の技法」（可児 2005）を参考にし、試験的に電源を入れて 500℃に達してから 30 分間そのままの温度で焼成することとした。

グラフ 1 は第 1 回焼成時の温度変化を示す。電源を入れてから 30 分後に 500℃に達したが、温度を保つ操作が分からず、500℃に達してから 16 分後には 640℃に達した。以降は電源を切り焼成予定時間まで 640℃に保った。30 分間 500℃で焼成することはできず、600℃程度の焼成となった。

・焼成した泥炭板の色調

泥炭板は焼成により、赤系の明るい色になった（図版 1-3）。焼成には耐え、堅く焼き締まり、割ると断面は中心部が黒いままであった（図版 1-4）。幅の小さい泥炭板では黒色は消えかかっており、赤系の外側と白色系の内側に分かれている（図版 1-5）。また、焼成泥炭塊を水に 2 分ほど浸けてみたが、内側の黒色の部分が溶けることはなかった。

しかし、実際の土器と比べて色が明るすぎ、また軽いように感じた。むしろ近世にかけてのかわらけに近い。

7 月 23 日　第 2 回焼成実験

前回は焼きすぎた可能性があり、また温度の操作も適切ではなかったため、電源を入れて 300℃に達してから 30 分間焼成を行った。前回量らなかった重さも焼成前後で記録した。また、高校のボーリング調査の標本を見て、付近に粘土層が存在することを知り、近くの畑より粘土を採取した。泥炭板と同様の手順で粘土板を作成し、一緒に焼成した（図版 2-1）。泥炭板、粘土板は観察しやすいよう、大きめに作り、前回厚さにより泥炭板の色調に変化があったため、場所にもよるが、0. 6cm～1. 0cm 程度の厚さに統一した。試験的に粘土塊も焼成する。

グラフ 2 は第 2 回焼成時の温度変化を示す。表 1 は焼成前後の重さの変化を表す。（図版 2-1 に振った番号と表 1 は対応している。この対応は以降も同じである。）

・焼成した泥炭板、粘土板の色調

焼成前後でどちらの板も色調は変化しなかった（図版 2-1→図版 2-2）。試みに 2 の泥炭板を焼成後水につけて 2 分ほど置くと柔らかくなり崩れた（図版 2-3）。

7 月 28 日　第 3 回焼成実験

第 2 回では温度が低すぎたため、450℃で 30 分間の焼成を行った。また、第 2 回では焼けていなかったと考えられる 1 と 3 の泥炭板、粘土板も焼成した（図版 2－4）。

グラフ 3 は第 3 回焼成時の温度変化を示す。表 2 は焼成前後の重さの変化を表す。

・焼成した泥炭板の色調の変化

やや暗い赤褐色を呈するようになった（図版 2－5）。断面の構造は第 1 回とは異なり、表面から黒色部分へ推移するときの白い層がほとんど目立たない（図版 2－6）。

・焼成した粘土板の色調の変化

やや明るく赤みがかった灰白色となった（図版 2-5）。断面構造は一様に表面と同じ色調を示し、層状の構造は見られない（図版 2-72）。また、泥炭板は力を加えるとかたまりで割れるのに対して、粘土板は鋭い破片が砕けるようにしてできることが言える（図版 3-1）。

7 月 28 日　第 4 回焼成実験

第 3 回後、すぐに行った。第 1 回での 600℃程度の焼成では泥炭板がかわらけのようになったが、焼成温度は 600℃のまま、泥炭板の焼成時間を半分の 15 分にすると色調はどうなるのか気になり、行った。また、粘土塊と比較の必要を考え、泥炭塊（両方とも未加工）も焼成した（図版 3-2）。

グラフ 4 は第 4 回焼成時の温度変化を示す。表 3 は焼成前後の重さの変化を表す。

・泥炭板、粘土塊、泥炭塊の色調の変化

泥炭板はやや明るい赤色系となり、第 1 回より少し色が薄い（図版 3-3）。粘土塊、泥炭塊共に明るい赤色を呈するが粘土塊は表面と内部の色調が同じであるのに対し（図版 3-4 左）、

泥炭塊は黒色は抜けたが、内部には白色層がある（図版 3-4 右）。

第 1 回から第 4 回までの焼成実験を通して泥炭板を焼成すると黒い胎土を持つ土器と同じ構造ができると分かった。

（2）b. 泥炭と縄文土器の胎土を比較分析し、一致、不一致を調べる。

使用する双眼実体顕微鏡は倍率 40 倍で観察した。また、専用の光源装置も用いた。

分析の結果を順に述べる。

①泥炭　第 3、第 4 回焼成の泥炭板の断面を分析した。（図版 4）1 は第 3 回焼成の泥炭板の表面と内部との境である。比較的大きい白色や黒色の粒子が散在し、茶色の粒子も見える。その隙間を埋め尽くすように微細な白色粒子が存在する。2 は同一の泥炭板の内部の黒色部である。粒の大きい石英等が見える。茶色の粒はロームのように思われる。3 は第 4 回焼成時の泥炭板で軟らかい断面構造である。

②黒い胎土を持つ土器　（図版 5）1 は堀之内式土器である。石英や長石の比較的大きい粒や、その間に無数の小さな白色粒子が見える。左側の割れ面はボソッとした軟らかさが見受けられる。2 は堀之内 2 式土器で

ある。大きい石英や長石の粒子が見える。全体に微小な白色粒子が見える。3 は加曽利 b 式土器である。表面と内部の黒色部分との境で、大きい粒の石英、長石は 1、2 と比して多い。微小な白色粒子の数は同じ位に見える。4 は安行 1 式土器である。大きな白い粒子と、微小な白い粒子が見える。左下の茶色いものは土である。5 は安行 2 式土器である。右上に大粒の石英が見える。白い微小な粒子は 1、2、3、4 と比して少ない。
③黒い胎土を持たない同地域の土器（図版 6）1 は晩期安行式土器である。深成岩片や石英、赤、灰色等の粒子が見える。微小な白い粒子は②に比して少ない（薄く剥がれた表面が粉末状に白く見える）。胎土は鉱物質で薄く剥がれている。2 は安行式土器である。角の取れた様々な鉱物が見える。白い微小な粒子は多く、胎土はボソッとしている。3 は加曽利 E 式土器である。右上に白い大きな粒子が見えるが、微小な白い粒子は判断がつかない。鉱物質で中央に薄く剥がれている胎土が確認できる。
④黒い胎土を持たない他地域の土器　（図版 6－4～）4 は大洞 b1 式土器である。緻密な胎土で微小な白い粒子は殆どない。5 は後期の土器である。パリッとした胎土で層状になり、最も粘土らしい胎土である。

分析の結果、①と②には土の質、色調、白い微小な粒子の混入等一致点が多かった。②と③では胎土の質が明らかに異なっていたが、図版 6-2 は赤色系でいくつか一致点があった。③と④では鉱物質の薄く剥がれ易い胎土であることは共通していたが、色調や混合鉱物等違いも見られた。

３．考察

縄文土器の制作工程を復元する上で、原料の同定は重要な要素である。さらには、型式を考えた時、その器形や文様のみならず原料の調達から焼成までがその型式の中に包含されていると言える。今回の研究では、堀之内 2 式土器から後期安行式土器までの型式上は区分される土器において同じ原料から作られていた可能性が見えてきた。一般に在地の粘土が使われているとされる縄文土器だが、市内で採れた粘土を焼成すると、層状の構造は見られないという重要な事実から、市内の土器において多くの割合を占める「黒い胎土は持たないが、層状の構造を持つ土器」は粘土ではない別のものが原料であった可能性が高い。とにかくも、黒い胎土を持つ土器は、その構造を再現できた低地に産出する黒色で粘性に富む土壌から作られたことは間違いないようだ。図版 4 を見ると分かるように、泥炭そのものにすでに非常に多くの粒子が入っている。混和剤を用意する必要が無い点で、縄文人にとっては便利だったと思う。その一方で、同地域で粘土で作られたと考えられる土器が存在することは、泥炭では不都合なこと、例えば表 2、3 から分かるように粘土に比して泥炭は焼成するごとに軽くなり胎土の緻密さが失われるから水持ちが悪い等、実際使用に即した問題を想定しておかなければならないだろう。

野焼きで土器を焼いた場合には 700℃から 900℃程度になる（久保田 1989）が、第 3 回の焼成実験からずっと低い 450℃焼成が実際の縄文土器に近いことがわかった。これは、原料が推定されるから色調という極めて簡単な方法で焼成温度が推測できるのであって、従来的な野焼きの方法ではない、温度が上がりにくい工夫を川口の縄文人は行っていたと考えられる。ひとつは、小規模な焼成であったのでは無いだろうか。「縄文カレンダー」（小林　1996）に表されるように縄文土器を作る時期が決まっていたと考えると、当然一度に多くの土器を焼成するのであるから、多くの燃料を使い高い温度での焼成になる。その時期から外れた時分に破損等から急に土器が必要になることもあっただろう。そういった時に 1 個体や 2 個体の土器だけを小規模に焼成したのでは無いだろうか。そうすると、黒い胎土を持つ土器が少ないことも説明できる。

少なくとも、川口市に住んだ縄文人が当時の環境の中で工夫して土器作りを行い、原料の採取から焼成までが伝統として引き継がれていったと考えられる。

4. 今後の展望

（注 1）でも述べるが、泥炭と呼称した今回の土壌が地質学的に言う純粋な泥炭ではないことは焼成できたことから分かった。この土壌が何か、地質学的に明らかにすることが喫緊の課題である。また、土器の胎土と泥炭との成分の一致を調べる必要がある。

余談だが、黒い胎土を持つ土器は、山形県内の縄文中期の遺跡や、青森県三内丸山遺跡でも川口市と同じように低い割合ではあるが存在することがわかった。想定していたよりも遥かに広い分布があるのだろうか。市内を含め型式ごとの存在割合をより多くの資料をもって示したいと思っている。

謝辞

今回の研究にあたっては、遺跡の土地主の方々や本校社会科の新井先生、化学の池滝先生、松倉先生、また焼成実験を快く引き受けて下さった美術の山浦先生には多大なるご協力とご教導を頂きました。また、川口市立文化財センターの小林竜太様には参照資料や細かい用語に至るまで、大変にお世話になりました。本当にありがとうございました。

脚注
（注 1）見た目が似ている黒ボク土である可能性も考えられるが、乾燥時に非常に硬く工具を使わないと砕けない点や目にみえる形で木本由来と思われる植物の依存体が確認できることから泥炭とした。しかし、厳密な地質学的分類に基づいているわけではない。
（注 2）縄文土器は器面を石で磨くことはよく知られている。保水性を保つためとも言われる。今回の制作から、安行式期の磨きは土器が乾燥してから行ったことが推測された。

参考文献

新屋　雅明　　1992 「大宮台地出土土器を中心とした安行式土器の編年」シンポジウム後・晩期安行文化発表要旨

新屋　雅明　　1996 「埼葛地域の安行 3c 式」埼葛地域文化の研究　下津弘・塚越哲也君追悼論文集
新屋　雅明　　2000 「石神貝塚」埼玉県埋蔵文化財調査事業団　第 254 集

加藤　稔編　　1973 「玉川遺跡」羽黒町教育委員会

可児　通宏　　2005 「縄文土器の技法」同成社

川口市遺跡調査会　1984 「宮合貝塚」川口市遺跡調査会報告 4

川口市遺跡調査会　2015 「木曽呂遺跡」川口市遺跡調査会第 47 集

川口市遺跡調査会　2023 「宮合貝塚遺跡」川口市遺跡調査会第 50 集

川口市史編さん室　1986 「川口市史　考古編」

児玉　幸男編　1965 「図説　日本文化史大系 1」小学館

小林　達雄編　2015 「総覧縄文土器」　アム・プロモーション

埼玉県遺跡調査会　1979 「吉岡・東本郷台・上一斗蒔遺跡」　埼玉県遺跡調査会　第 37 集

吉田　格　　1940 「埼玉県石神貝塚調査」「人類学雑誌」55-11 東京人類学会

吉田　邦夫編　2012 「Archaeometria 」　東京大学総合研究博物館

硬砂団体研究グループ　1984 「大宮台地に分布する硬砂層の性質と堆積環境」　「地球科学」38 巻 1 号

埼玉県　1973 「土地分類基本調査　大宮」埼玉県林業試験場　埼玉県農業試験場

山野井　徹　執筆年不明　「黒ボク土とその堆積環境」山形大学

1. 焼成実験に用いた電気炉

2. 第１回焼成の前の様子

3. 第１回焼成後の様子

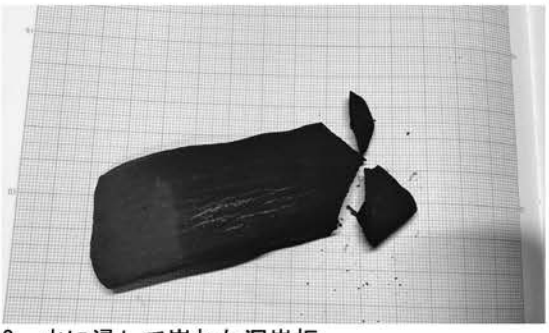
4. 断面の様子

5. 幅の小さい断面

（図版１）

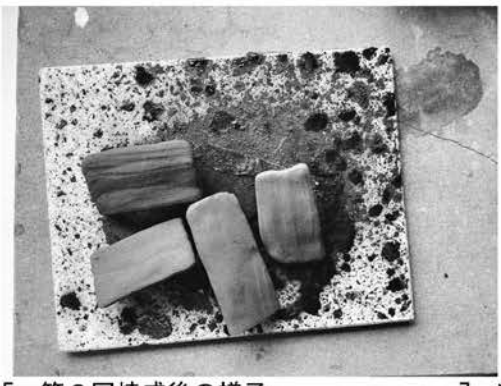
1. 第２回焼成前の様子
（左上が１、右上が２、左下が３とする）

2. 第２回焼成後の様子



3. 水に浸して崩れた泥炭板

4. 第３回焼成前の様子
（上から順に、１，３，４，５とする）



5. 第３回焼成後の様子

7. 粘土板の断面

6. 第３回焼成泥炭板の断面

（図版２）

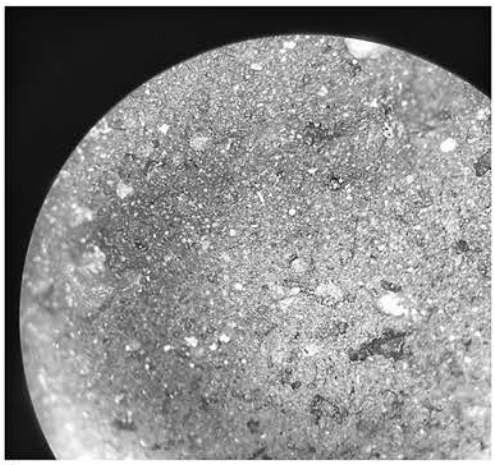
1. 粘土板が砕ける様子

2. 第４回焼成前の様子
（左下が６、左上が７、右上が粘土塊、右下が泥炭塊）

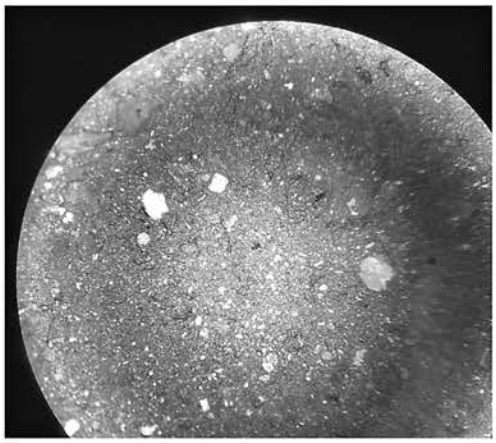
3. 第４回焼成後の様子

4. （左）焼成粘土塊　（右）焼成泥炭塊

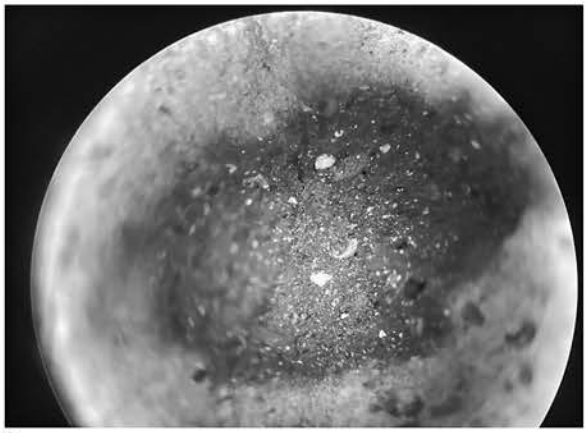
（図版３）



1.

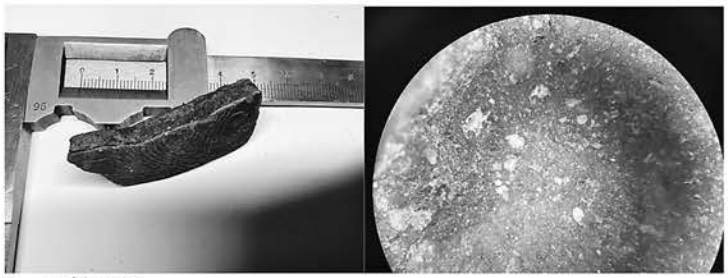


2.



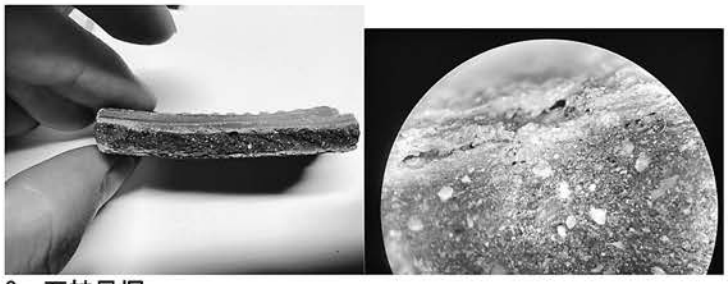
3.

（図版４）

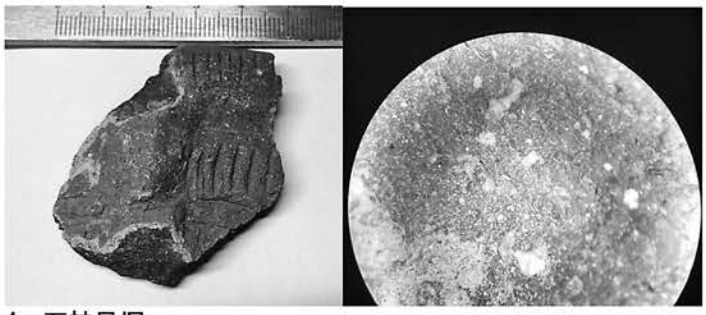


1. 石神貝塚

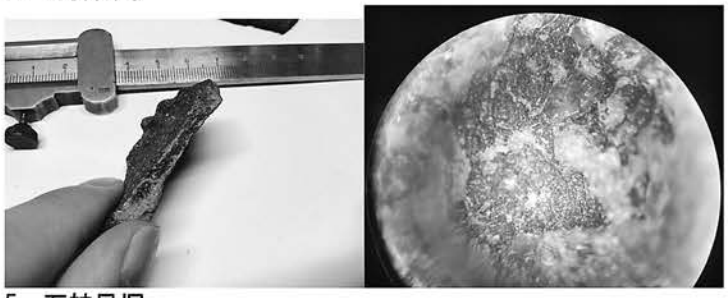
2. 石神貝塚



3. 石神貝塚

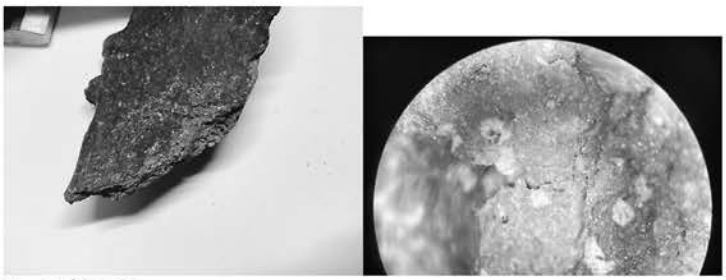


4. 石神貝塚



5. 石神貝塚

（図版５）



1. 石神貝塚

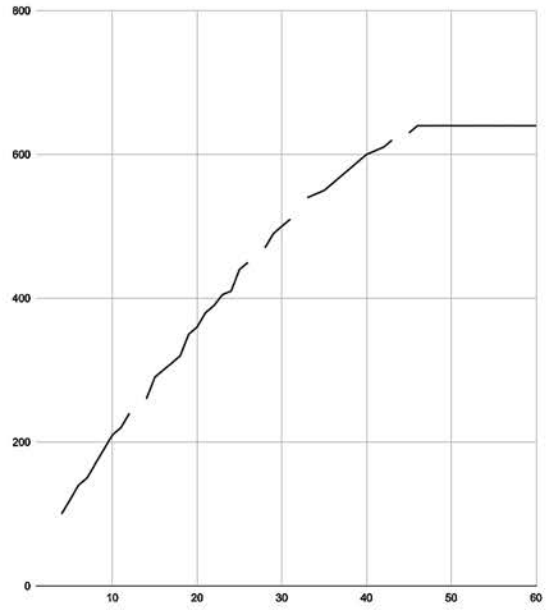
2. 石神貝塚

3. 上一斗蒔遺跡

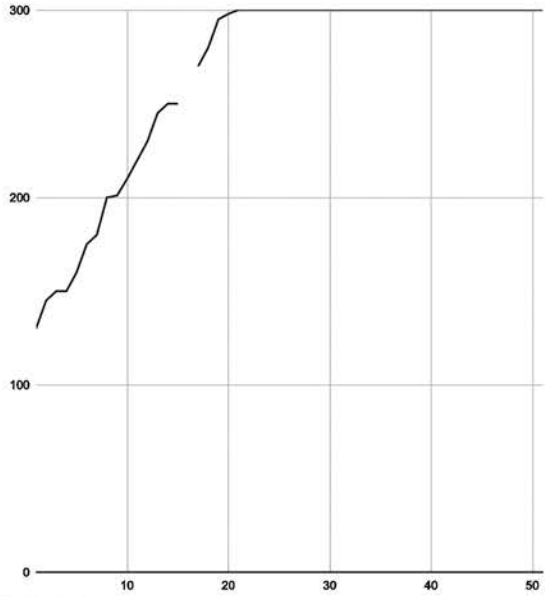
4. 山形県鶴岡市出土

5. 山形県鶴岡市出土

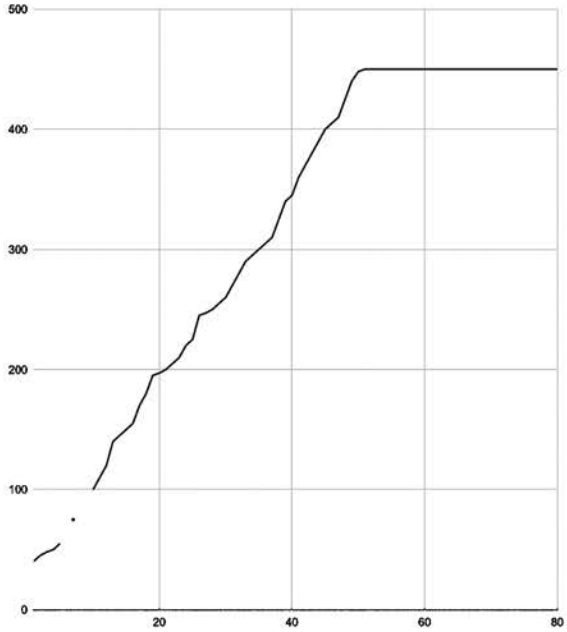
（図版６）



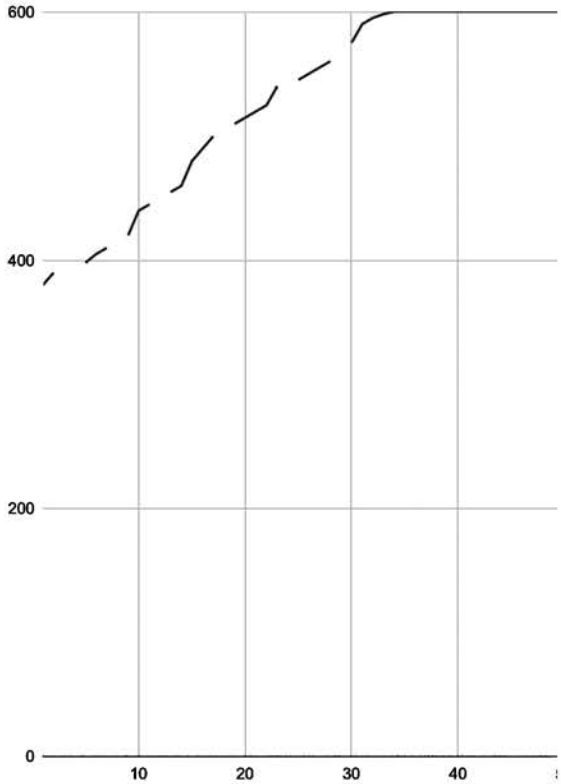
グラフ１



グラフ２



グラフ３



グラフ４

＊グラフの縦軸は温度℃、横軸が時間（分）を示す

	焼成前（g）	焼成後（g）	減少割合（%）
泥炭板１	26．01	23．20	10．8
泥炭板２	35．58	31．77	10．7
粘土板3	20．59	19．06	7．4

表１

	焼成前（g）	焼成後（g）	減少割合（%）
泥炭板１	23．20	21．28	8．2
粘土板3	19．06	18．62	2．3
泥炭板4	32．65	28．36	13．1
泥炭板5	21．68	18．64	14．0

表２

	焼成前（g）	焼成後（g）	減少割合（%）
泥炭板6	32．98	27．33	17．1
泥炭板7	27．19	22．43	17．5
粘土塊	9．00	8．45	6．1
泥炭塊	2．85	2．22	22．1

表３

優秀賞

「高野の施餓鬼」信仰の広がりとその起源
～近隣都県の市区町村史から探る～

昌平中学・高等学校　社会歴史研究部　馬塚敦也

＜本文目次＞
1．はじめに
2．施餓鬼、高野の施餓鬼
3．市区町村史による調査
4．埼玉県内における参詣実績と市区町村史調査結果の比較
5．東武鉄道による信仰の広がり
6．千葉県、東京都、茨城県
7．終わりに
＜添付資料＞
・参考文献
・表１
・図１～図６
・市区町村史　抜粋

＜写真説明＞
左上：永福寺　（2023年8月23日）
　　ほうずきや梨を売る出店はない
右上：どじょうを放す因幡池（いなばいけ）の前
左下：どじょう（龍にたとえられている）
右下：僧侶30名が因幡池を囲んで読経
　　（8月23日11時）

１．はじめに

昌平高等学校は埼玉県北東部、北葛飾郡杉戸町にある。1889（明治22）年に実施された市制・町村制で旧日光街道杉戸宿周辺が北葛飾郡杉戸町となった。当校は旧杉戸町の北側、その当時、北葛飾郡高野村となった地に建っている。【１】

現在の杉戸町下高野かつての北葛飾郡高野村に永福寺がある。普段は田園風景に馴染んでひっそりとたたずんでいるが、毎年８月22日、23日、「高野の施餓鬼（せがき）」「どじょう施餓鬼」と呼ばれる施餓鬼会（せがきえ）でにぎわう。高校から直線距離で約1.4Km と近く、社会歴史研究部では私が高校２年生だった2022年、『龍燈山伝燈記』という縁起の読み込みを行った。その縁起には行基や空海などが登場する。部の顧問から、「箔付け」として著名な人物が盛り込まれることがあるので、何が史実で何が物語か注意して読み進める必要があるとの指導を受けた。

永福寺を題材とした部の活動が終わったある日、インターネットで「高野の施餓鬼」と検索したところ、自宅のある東京都足立区のホームページの面白い記事がヒットした。足立区周辺には８月のお盆の14日か15日に「仏様が高野の施餓鬼に行く」といい、家に戻って来ている先祖の霊（仏様）がこの日一日、留守にするという伝承があるという。杉戸町から遠く離れた東京都内でなぜ「高野の施餓鬼」の言い伝えがあるのか。足立区から杉戸町まで歩いたら片道で１日がかりのはずだ。「年に２日だけ賑わう、高校近くのひなびたお寺」との認識だった永福寺が急に大きな存在に思え、「高野の施餓鬼」は近隣のどの市区町村にまで知れわたっているのかという疑問が湧き、調べることとした。

２．施餓鬼、高野の施餓鬼

研究の具体的内容に入る前に、「施餓鬼」について簡潔に説明するとともに、「高野の施餓鬼」とはどのようなものなのか紹介する。

餓鬼（がき）とは、生前に悪行を行い地獄に落ちた魂や俗世で供養してもらえなかったりして無縁仏となってしまった霊が地獄に落ちて鬼となってしまったもの。餓鬼は地獄で飢えと渇きにもがき苦しんでいるため、食べ物や飲み物をお供え物として捧げ法要を執り行う。地獄にいる餓鬼に対して施しを行い、この世にいる自分たちの極楽往生を願うのが施餓鬼である。施餓鬼を行う時期は地域や宗派によって異なるがお盆の時期に行われることが多い。寺院で盛大に行われたり、僧侶が檀家の家を訪れて執り行われたりする。施餓鬼は自身の先祖や故人のために開かれるものではないので、新盆（初盆）のみ行うのではなく毎年行われる。【２】

山号（さんごう）を龍燈山と号する真言宗豊山派（ぶざんは）の永福寺のホームページによれば、「毎年８月22日・23日の２日間、宗教・宗派を問わずご先祖様のご供養」をする大施餓鬼（おおせがき）が行われ、「故人なきあと３年間お参りすることにより、現当二世安楽と幸福が得られ」るとのことである。

僧侶による法会（ほうえ）の説明は割愛するが、参詣者が一般的にかかわりを持つ行事として、「塔婆（とうば）」と「どじょう」がある。塔婆は、受付で住所・氏名・供養する者の戒名（かいみょう）などを記入して申し込み、本堂内で長さ三尺（約90㎝）ほどの塔婆に戒名を書いてもらう。納められた塔婆は、１年間保管して、翌年の８月になるとお焚きあげしている。参詣者のもう一つのイベントは、境内の因幡（いなば）沼（因幡池）

で、どじょうを放って供養を行うことである。【３】　どじょうが龍に似ているところから龍にたとえられ、どじょうの背中に乗ってご先祖様が極楽浄土へ旅立つために、どじょうを池に放すとされている。【４】　山号「龍燈山」とのかかわりが感じられる。

「高野の施餓鬼」の日、昭和30年代までは、東武伊勢崎線和戸（わど）駅から永福寺まで至る道沿いに露店やサーカス・見世物小屋などが連なり、参詣者が行列を作って大変な賑わいをみせた。お土産として、ほおずきや梨が名物で、境内にはそれらを売る露店がところ狭しとばかりに軒をつらねた。【５】　また、竹かごに入れられたクツワムシを売る人、バイオリンを弾きながら歌の本を売る人もいた。【６】

永福寺の檀家は、杉戸町内の旧高野村の地区と幸手市戸島（としま）が中心であり、杉戸町杉戸、南埼玉郡宮代町和戸・切戸、幸手市吉野などにも多い。【７】　一方、「高野の施餓鬼」の参詣者ははるかに広範囲である。2003（平成15年）の塔婆奉納者の住所の分布図【図１】は、埼玉県東部の他、東京都東部・千葉県北西部・茨城県南部からも参詣していることが分かる。参詣者のメインイベントは塔婆奉納であり、塔婆奉納者の住所は参詣者の住所とほぼ同等と考えて差し支えないと思われる。ちなみにその年、塔婆が5000本用意され、２日間でどじょうを放つのは約2500人と見込まれていた。【８】

３．市区町村史による調査

上述の通り、2003（平成15年）の塔婆奉納者調査で、現代の「高野の施餓鬼」参詣者の住所分布は判明しているが、自家用車や鉄道を利用して日帰りで参詣できる範囲内との考察が得られるにすぎず、各市区町村に「高野の施餓鬼」の信仰がどのように根付いているかは分からない。

「高野の施餓鬼」に関する長年語り継がれてきた土着的な信仰はどの市区町村にまで及ぶのか、またその信仰にはどのような違いがあるのか。それを探るため私は各市区町村の教育委員会等が発行する市区町村史に着目した。多くの市区町村史は『通史編』の他に『民俗編』が発行されている。ある程度調査方法が確立されているようで、『民俗編』の多くには「年中行事」の章があり、「夏の行事」の項にお盆や施餓鬼に関する記載がある。

しかしながら、市区町村史による調査には、いくつかの限界、問題点があることが調査を進める途中で分かってきたので、そのことについてあらかじめ触れておきたい。

一つ目は市区町村単位での発行なので、市区町村内の特定の地域に特異な風習があったとしても、編集作業の途中で割愛されることがありうるだろうということである。このため、市区町村史に「高野の施餓鬼」に関する記述がなかったとしても、直ちに「○市には、高野の施餓鬼に関する信仰は見られない」などと断言はできない。近隣複数の市区町村をまとまりでとらえる必要がある。

二つ目は、必ずしも全ての市区町村が『民俗編』を編さんしているわけではないことである。自治体内の民俗的な調査をしたものの『民俗編』としては発行に至っていないという自治体も多いように思う。なお、ごく一部であるが『通史編』の末尾に民俗に関する記載がある自治体もあったので、『通史編』の目次も念のため目を通すことにした。

三つ目は、各自治体の市区町村史の編さん時期がまちまちであり、それらの記載内容を同じ土俵で扱っていいのかということである。昭和44年発行の大宮市は注意を要するものの、昭和55年（与野市・浦和市・川口市）から最新の平成22年（栗橋町・吉川市）まで、

既に都市化、核家族化や行事の簡素化が進んでいる時期として、宗教的な伝承に限っては同等に扱って差し支えないだろうと考えた。

四つ目は、足立区などの一部の自治体を除いて、市区町村史の内容は一般的にホームページ掲載されていないので、図書館に出向いて閲覧しなければならないということである。私は杉戸町立図書館をはじめ、埼玉県立熊谷図書館、市川市立中央図書館、葛飾区立中央図書館、古河市三和資料館などに出向いた。これらは「開架式図書館」のため、棚にある各市区町村史を手にとって順番に確認することができた。「高野の施餓鬼」に関する記載があるかないかを確認し、あれば該当箇所をコピーし、持ち帰って内容を精読することとした。

４．埼玉県内における参詣実績と市区町村史調査結果の比較

埼玉県内については、先ほどの【図１】で参詣実績があった自治体は漏れなく市区町村史にあたるようにした。「資料編」末尾添付「市区町村史　抜粋」の通り、埼玉県内で「高野の施餓鬼」（「タカノの施餓鬼」を含む）の記載があったのは、地元杉戸町の他には、北本市、伊奈町、大利根町（現加須市の一部）、栗橋町（現久喜市の一部）、幸手市、宮代町、春日部市、岩槻市（現さいたま市岩槻区）、浦和市（現さいたま市、特に緑区美園・大門・北原）、松伏町、草加市、吉川市、三郷市、八潮市である。【表１】【図２】

塔婆奉納者の住所を示した【図１】と、市区町村史調査結果【図２】を比較すると面白いことに気づく。【図１】が杉戸町の四方を取り囲むように分布している一方で、この市区町村史調査結果【図２】は、北本市、伊奈町を除いて、杉戸町をはじめ、旧利根川、現在の大落古利根川（おおおとしふるとねがわ）とその下流に続く中川の近くかその東側に位置する自治体ばかりである。『民俗編』が確認できた市町村のうち、旧利根川に比較的近いが西側に位置する騎西町（きさいまち、現加須市の一部）、久喜市、菖蒲町（現久喜市の一部）、白岡町（現白岡市）などには「高野の施餓鬼」の記載がない。古利根川の西側に何か大きな越えられない壁が南北に連なっているように感じられた。

古利根川を境界とする傾向は埼玉県内の香取神社の分布【図３】からも読み取れる。香取神社の本社は利根川下流の千葉県香取市にある。杉戸町をはじめ埼玉県内の古利根川東側は中世には下総国（しもうさのくに）に属しており、そのため下総の香取神宮を祭る村が多い。香取神社分布エリアの西端は、かつての利根川、現在の古利根川の流路にほぼ相当する。【９】

江戸時代初頭、利根川改修の一環として関宿（せきやど、現在の野田市の一部）から現在の松伏町までの約18㎞を掘って当時の太日川（ふといがわ）の途中につなぐ「江戸川開削」と同じ頃、古利根川と太日川（当時の流路）の間の地域は下総国から武蔵国（むさしのくに）に編入された。【１０】

「高野の施餓鬼に関する史料は少なく、いつごろから現在のように広範囲から参詣者があるようになったかは不明」【１１】とされるが、「高野の施餓鬼」はかつて下総国であった土地に広く伝播したのではないか。後に説明する千葉県・東京都・茨城県においてもその一端がうかがえる。

５．東武鉄道による信仰の広がり

それでは、現在の参詣者が【図１】のように、古利根川の東西を問わず分布しているのはなぜだろうか。これには、明治30年代以降の東武鉄道の影響が極めて大きいと考えられる。上述の通り、永福寺の最寄駅は、杉戸町の隣町、南埼玉郡宮代町にある東武伊勢崎線和戸駅である。1925（大正14）年の『東武鉄道線路案内』（吉田初三郎式鳥瞰図）には、和戸駅前に「永福寺」が大きなテーマパークのように描かれている。【図４】　実際には和戸駅から徒歩で15分程度かかる。

1899（明治32）年８月27日、北千住・久喜間で東武伊勢崎線が暫定開業。その翌年の1900（明治33）年８月19日づけの『読売新聞』には「高野の施餓鬼」の日に臨時列車と割引切符を販売する旨が報道されており、同新聞には以後の年も東武鉄道が運賃割引する報道が確認できる。【１２】　1908（明治41）年８月21日づけの『関東新報』によると、当時簡易停車場であった和戸駅に仮設ホームを設置し、乗車する場所と下車する場所を分けて大量の乗降客をさばく対応をしている。また、越谷・加須間に22回の臨時列車を運行している。1934（昭和９）年８月23日づけの『読売新聞埼玉版』によると、急行を全て和戸駅に停車させるほか、臨時電車を20往復増発している。こういった和戸駅臨時停車や臨時電車の増発は昭和30年代まで続いたようである。また鉄道に限らずバスも臨時運転が行われた時期があり、和戸もしくは高野と岩槻、幸手、茨城県境、千葉県関宿とを結ぶ臨時バスがあった。【１３】

最近の研究で、“昔から変わらぬ伝統”のように捉えられている「初詣」が実は明治以降の鉄道会社の戦略により誕生したものであったことが明らかになっている。【１４】
これと同様、「高野の施餓鬼」についても、東武鉄道の積極的な営業活動により、それまで知られていなかった羽生、加須、久喜といった東武伊勢崎線沿線や、北本・伊奈など久喜駅経由でアクセスできるＪＲ（かつての官鉄）高崎線沿線・宇都宮線沿線にも参詣の風習が広がっていったのではないだろうか。

６．千葉県、東京都、茨城県

千葉県は北西部の市区町史に絞って閲覧調査を進めた。『民俗編』が確認できない市町村が多かったが、鎌ヶ谷市史に千葉県内全般の「タカノの施餓鬼」に関する考察を見つけることができた。

鎌ヶ谷市、市川市や沼南町（しょうなんまち、現柏市の一部）では、盆の最中（８月23日ではない）、「仏様がタカノの施餓鬼に行く」という伝承があり、弁当としてあるいは腹ごしらえしてもらうために握り飯を用意し、仏様が乗る馬を形どったナスとともに盆棚に供えた。そしてほとんどの人が「タカノ」とは実際どこなのか知らない。
より杉戸町に近い流山市・野田市は、お盆中に「仏様がタカノの施餓鬼に行く」とする地域と、新盆を迎えた家の者が（お盆ではなく）８月23日に杉戸町の永福寺に出向く習わしがある地域が併存する。杉戸町と江戸川をはさんで向かい合う関宿町（現野田市の一部）にはお盆中に仏様が出かける伝承はなく、「高野の施餓鬼」といえば新盆の家族が宗派を問わず、８月23日に永福寺へ参詣することと認識されている。

一方、鎌ヶ谷市より南に位置する船橋市では「天竺の施餓鬼に行く」、さらに南の浦安市では「天竺の市に買い物に行く」が主流となり、「タカノ」は出てこなくなる。【図５】

鎌ヶ谷市史では、これら千葉県東葛飾地方の「仏の中座習俗」（仏様がお盆中に出かけ

て不在になるという伝承）は、「本来的には天竺や市に行くとするような、漠然とした抽象的かつ非現実的な表現に則った理解」があり、そこに永福寺の信仰がかぶさった結果、「仏様がタカノの施餓鬼に行く」という言い伝えになったと推察できるとしている。また、盆期間中と永福寺の「高野の施餓鬼」は時期が違い内容も別の習俗であるにもかかわらずこのような混同が生じているのは、新盆の者は積極的に参るべしとした永福寺側の教化・布教によるものではないかと締めくくっている。【１５】

埼玉県吉川市・三郷市・草加市・八潮市も、千葉県東葛飾地方と同様、お盆の最中に「仏様がタカノの施餓鬼に行く」という伝承が見られる一方、実際に永福寺に行くというケースは限られる。東京都葛飾区・足立区の区史も、お盆中に「仏様がタカノの施餓鬼に行く」という伝承の記載があり、実際に「高野の施餓鬼」に行くとする記載はない。葛飾区も埼玉県吉川市・三郷市もかつての下総国葛飾郡であり、江戸初期に武蔵国葛飾郡になった。足立区と草加市の大半は武蔵国足立郡、草加市の一部と八潮市は武蔵国埼玉郡であったが、足立区・草加市・八潮市ともに武蔵国葛飾郡に近接している。足立区では昭和63年に花畑（はなはた）・淵江（ふちえ）・伊興（いこう）・舎人（とねり）の4か所の年中行事調査を行っており、その報告書で「タカノの施餓鬼」の記載があったのは葛飾区に比較的近い花畑地区・淵江地区であった。

茨城県は、総和町（現古河市の一部）の利根川に面した水海（みずうみ）地区、猿島町（さしままち、現坂東市の一部）に永福寺の「高野の施餓鬼」に参詣するという記載があった。千葉県東葛飾地域で見られたような、お盆の時期に「仏様がタカノの施餓鬼に行く」との記載は茨城県内では確認できなかった。総和町も猿島町もかつては下総国である。

以上のことから、江戸初期に武蔵国葛飾郡と下総国葛飾郡に分割される前の旧下総国【図６の左側】に「高野の施餓鬼」の信仰圏が広がっているのは明白である。縁起（龍燈山伝燈記）によれば、住職の日尊上人が1392年（明徳3年）に自身の父である因幡のために施餓鬼を行ったのが「高野の施餓鬼」の始まりである。したがって、「高野の施餓鬼」信仰は、室町時代から江戸時代初期の200年余りの間で旧下総国に広がっていったものと推察される。

７．終わりに

「高野の施餓鬼」の信仰は、室町時代から江戸時代初期にかけて、古利根川以東、すなわち（一部が武蔵国に編入される前の）かつての下総国のうち、徒歩で参詣できるエリアを中心に信仰が広がったのではないか。そして明治30年代以降、東武鉄道により古利根川以西にも信仰が広がったのではないか。そのような仮説のようなものを考えてみたものの、今回の調査だけで仮説を立てるのは早すぎると思うし、歴史はもとより宗教・民俗・地理などの知識も不十分で的が外れている可能性もあると思う。いつかしっかり検証し謎を解き明かしたい。

一方、各自治体の市区町村史を調べて比較したことを通じて学んだことがある。一つは、書籍かホームページかの別を問わず、各自治体がその区域の歴史を記録にとどめ広く公開することの大切さである。もう一つは、鎌ヶ谷市史のように、区域の中に特異な事象があるときに、その事実の記録にとどまらず、周辺の他の自治体も含めてその事象が生じた背景を考察する試みの大切さである。

添付資料

＜参考文献＞

【１】杉戸町役場（町史編さん室）（平成 17 年）『杉戸町史　通史編』P539、P700
【２】株式会社よりそう　ホームページ
よりそうお葬式＞法事・法要＞施餓鬼（施食会）とは？お盆に施餓鬼会を行う意味
【３】杉戸町役場（町史編さん室）（平成 17 年）『杉戸町史　民俗編』P151～152
【４】板垣時夫著、さいたま民俗文化研究所発行（令和元年）
『埼玉県東部の民俗　上巻　祭り行事と民俗芸能』P65～66
【５】杉戸町役場（町史編さん室）（平成 17 年）『杉戸町史　民俗編』P157
【６】宮代町教育委員会（平成 15 年）『宮代町史　民俗編』P235～236
【７】杉戸町役場（町史編さん室）（平成 17 年）『杉戸町史　民俗編』P149
【８】杉戸町役場（町史編さん室）（平成 17 年）『杉戸町史　民俗編』P152
【９】埼玉県（昭和 63 年）『新編埼玉県史　通史編２　中世』P995～998
【１０】杉戸町史編さん室（平成元年）『杉戸町の歴史』P79～81
【１１】杉戸町役場（町史編さん室）（平成 17 年）『杉戸町史　民俗編』P149
【１２】武井謙悟　2018.6「近代日本における「施餓鬼」の諸相」『宗教と社会』Vol.24
P17～31
【１３】杉戸町役場（町史編さん室）（平成 17 年）『杉戸町史　民俗編』P156～157
【１４】平山昇　2012『鉄道が変えた社寺参詣　初詣は鉄道とともに生まれ育った』
交通新聞社
【１５】鎌ヶ谷市教育委員会（平成 15 年）『鎌ヶ谷市史　別巻』P442～448

＜表１、図１～６＞

古利根川から遠い			古利根川に近いが西側			古利根川の東側		
吉見町	（比企郡）		羽生市	（埼玉郡）		北川辺町	（埼玉郡）	
川島町	（比企郡）	×	加須市	（埼玉郡）	×	大利根町	（埼玉郡）	○
吹上町	（足立郡）		騎西町	（埼玉郡）	×	栗橋町	（葛飾郡）	○
川里町	（埼玉郡）		久喜市	（埼玉郡）	×	鷲宮町	（埼玉郡・葛飾郡）	
鴻巣市	（足立郡）	×	菖蒲町	（埼玉郡）	×	幸手市	（葛飾郡）	○
北本市	（足立郡）	○	宮代町	（埼玉郡）	○	杉戸町	（葛飾郡）	○
桶川市	（足立郡）	×	白岡町	（埼玉郡）	×	春日部市	（埼玉郡・葛飾郡）	○
伊奈町	（足立郡）	○	蓮田市	（埼玉郡）		庄和町	（葛飾郡）	
上尾市	（足立郡）		岩槻市	（埼玉郡）	○	松伏町	（葛飾郡）	○
大宮市	（足立郡）	×	浦和市	（足立郡）	○	吉川市	（葛飾郡）	○
与野市	（足立郡）	×	越谷市	（埼玉郡）		三郷市	（葛飾郡）	○
蕨市	（足立郡）	×	草加市	（足立郡・埼玉郡）	○			
戸田市	（足立郡）	×	八潮市	（埼玉郡）	○			
川口市	（足立郡）	×						
鳩ケ谷市	（足立郡）	×						

表１　市町村史民俗編に「高野（タカノ）の施餓鬼」の記載があった埼玉県内自治体
○：記載あり　×：記載なし　□：民俗編の確認できず
※市町村名は、閲覧した市町村史のタイトル通り。現在の市町村名とは異なる場合あり。
※（　）内の郡は江戸時代

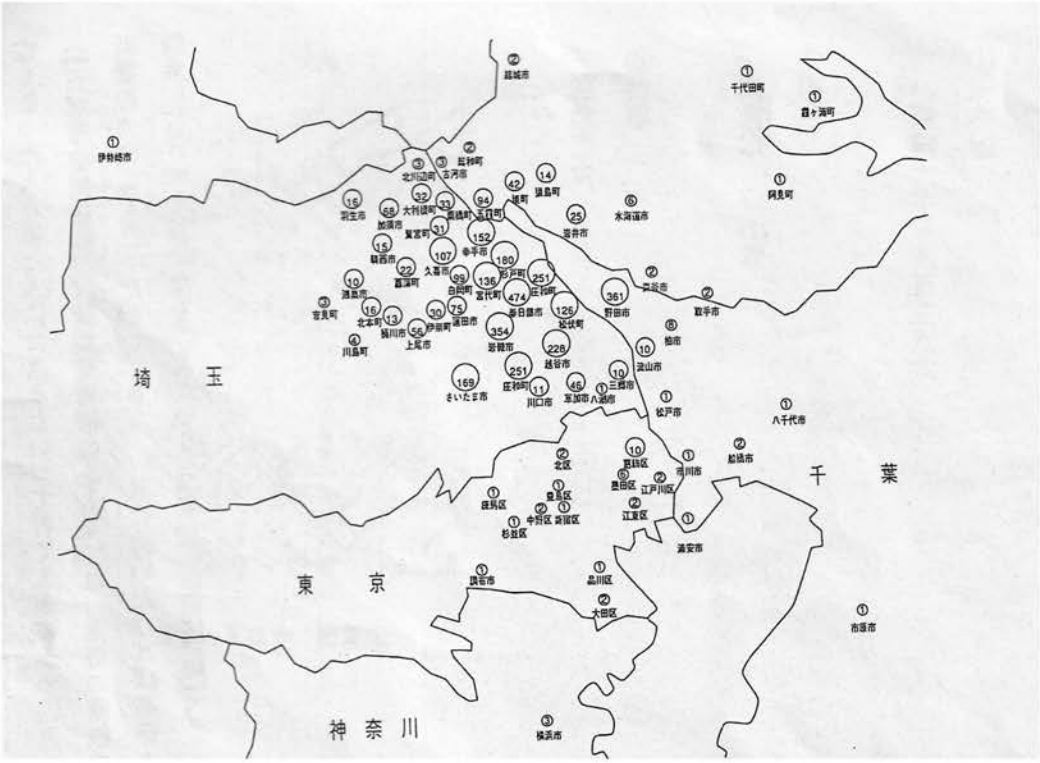
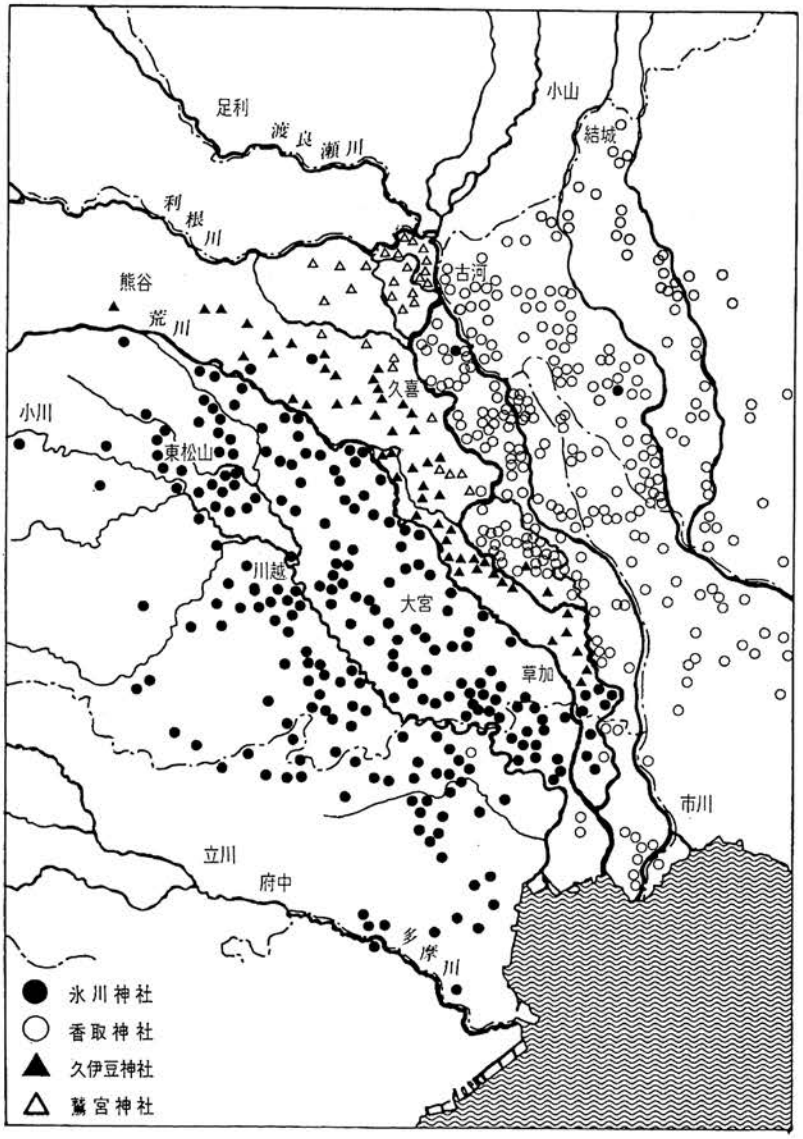


図１　高野の施餓鬼での塔婆奉納者の分布（平成 15 年）

※　杉戸町役場（町史編さん室）『杉戸町史　民族編』（平成 17 年）P. 156 より抜粋

図２　（埼玉県内）市町村史に「高野の施餓鬼」「タカノの施餓鬼」の記載があったところ（■）



（注）1　西角井正慶『古代祭祀と文学』により，『鷲宮町史』から鷲宮神社の分布を加えた。

2　河川の流路は一部修正した。

図３　氷川神社・久伊豆神社・香取神社・鷲宮神社の分布図

※　埼玉県編『新編埼玉県史　通史編２』（昭和 63 年）P. 997 より抜粋

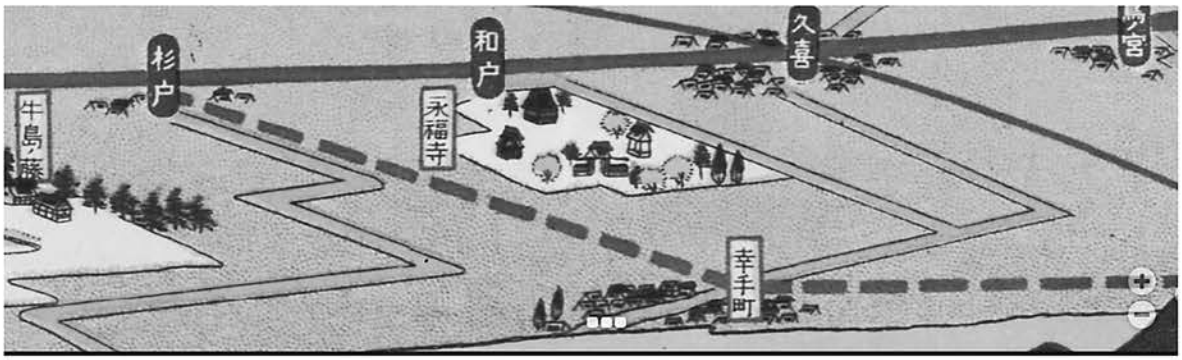


図４　吉田初三郎『東武鉄道線路案内』（1925 年）大正名所図絵社

※　昭文社出版編集部『吉田初三郎鳥瞰図集』（2021 年）昭文社　より和戸駅周辺部分を抜粋

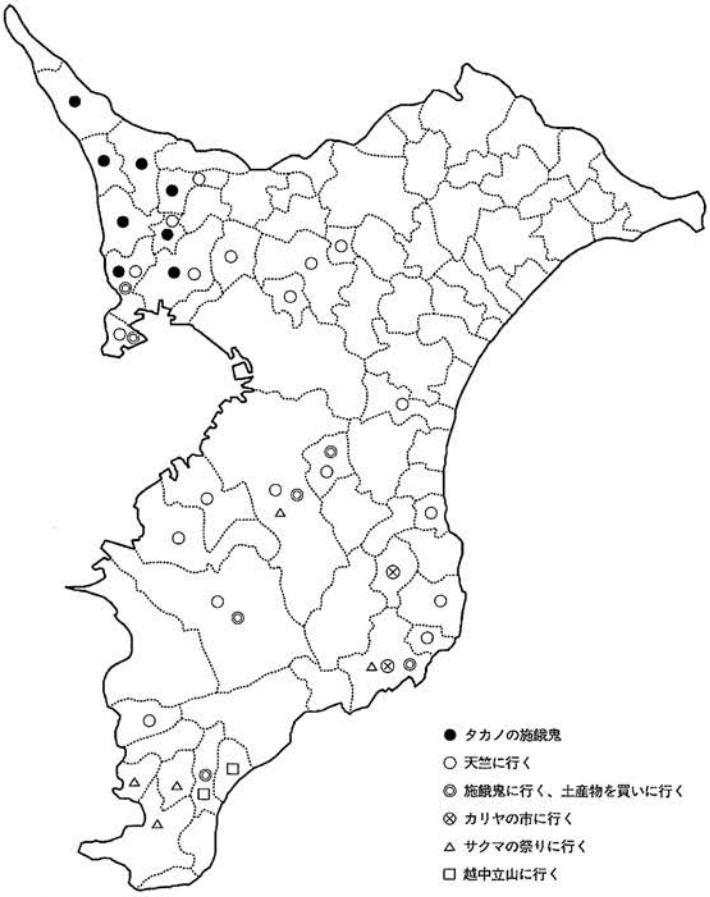


図５　仏の中座

※　鎌ヶ谷市教育委員会編『鎌ヶ谷市史　別巻』（平成 15 年）より抜粋

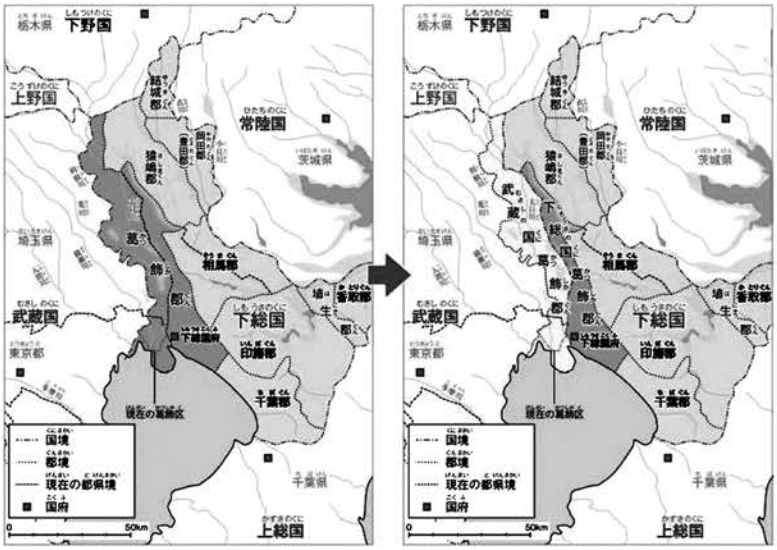


図６　江戸初期、下総国葛飾郡は武蔵国葛飾郡と下総国葛飾郡に二分される

※　葛飾区ホームページ『子ども葛飾区史電子版』（２章　前半）P42 より抜粋

＜市区町村史　抜粋＞

埼玉県

①　杉戸町

新盆の家では 8 月 23 日に町内下高野永福寺の施餓鬼法要（「**高野の施餓鬼**」「どじょう施餓鬼」ともいう）に行き、塔婆を上げて因幡池にどじょうを放す。これは三〇人余りの衆僧が本堂から因幡池まで練り供養して、信者がどじょうを放すことによって、故人の冥福を祈ることになるということによる。また、**高野の施餓鬼**にお参りすると、「死んだ仏に会うことができる」という言い伝えがある。

この**高野の施餓鬼**は有名で、近在はもとより県内各地、茨城県、千葉県、東京都方面からも大勢の人が訪れる。**高野の施餓鬼**に行くと「高野のほおずき」といって大きなほおずきを土産として買ってくる。また、このころには早稲梨が出回り、道端で梨店を開く者も多く、梨とホオズキを**高野の施餓鬼**の土産として買って帰り、仏壇に供えたり近所に配る家もある。

この施餓鬼では、農具や日用品、食べ物屋などの多くの出店が立ち並んだ。昭和 30 年代には見世物小屋なども立って大変賑わった。昭和 20 年代が参詣者の最盛期であり、現在では県内外から多数の信者が訪れる。今日では新盆の人が中心になっている。

本島のある家では、必ず**高野の施餓鬼**に行く。新盆のときには亡くなった人の兄弟や子供など数人で一緒に行った。この施餓鬼にと行かないと仏様が苦労するという。昔は大変賑わい千葉県方面からも六万橋を渡ってぞろぞろ列をなして来た。**高野の施餓鬼**に行くと供養にと因幡池にどじょうを買って放してやった。施餓鬼には数多くの露天商が店を出し、サーカス・活動写真などの見せ物の小屋も出て賑わった。施餓鬼の土産として、梨・しょうが・ほおずきなどが売られていた。

深輪のある家では、新盆には必ず**高野の施餓鬼**に行く。新盆以外のときにもこの施餓鬼には出掛けることが多い。**高野の施餓鬼**に行くと「高野のほおずき」や梨を土産として買って来る。

鷲巣のある家では、8 月 23 日にミボンのときには必ず高野施餓鬼に行った。昔は大勢の参詣者で境内が人でいっぱいになった。見せ物、（飴屋や菓子などの）露店商、川の縁にはほおずきを売る店などが出た。以前は地元の青年団が近所の大尽の家の庭を借りて、自転車預かりを行って活動資金を稼いだ。以前は区長から**高野の施餓鬼**の触れが出て休みが出たこともあった。

（平成 17 年）『杉戸町史　民俗編』P234～235

②　北本市

北葛飾郡杉戸町**高野の永福寺の施餓鬼**は 8 月 23 日に行われ、ドジョウの放生が行われるところからドジョウ施餓鬼とよばれている。新盆の 3 年間やお産で亡くなった家では行くものとされている。

（平成元年）『北本市史　第六巻　民俗編』P704

③　伊奈町

8 月 23 日には、杉戸町下高野の永福寺で施餓鬼が行われる。「**高野の施餓鬼**」といわれるこの施餓鬼には、特に新盆の家では、3 年間は参詣するものだといわれる。

小針内宿のある家では、新盆の家は**高野の施餓鬼**にお参りするものという。お参りすると、ほおずきを寺の縁日で買ってきて、クミアイに配った。このときにはせんべいくらいつけて配るものであった。**高野の施餓鬼**には、新盆から 3 年は参詣するものといった。

　柴のある家でも、**高野の施餓鬼**には、新盆の家がお参りするものという。行くと、ほおずきや梨などを買ってきて、近所やムラ親類に配ったものである。

（平成 14 年）『伊奈町史　民俗編』P363

④　大利根町（現・加須市の一部）

新盆の家では 8 月 23 日杉戸町高野永福寺の施餓鬼法要に行き、塔婆を上げ、因幡池にどじょうを放してくる。**高野の施餓鬼**に行くと「高野のほうずき」といって大きなほうずきを土産として買ってくる。**高野の施餓鬼**法要に行くのは、亡くなった先祖様が「**高野の施餓鬼**に会ったか、加須の龍蔵寺の施餓鬼に会ったか」と聞かれるというからであるという。また、北下新井では「親が死んだら**高野の施餓鬼**、子供が死んだら岩舟さん」といい、新盆の家では**高野の施餓鬼**に行くものであった。

（平成 11 年）『大利根町史　民俗編』P411

⑤　栗橋町（現・久喜市の一部）

8 月 23 日には、杉戸町下高野の永福寺で施餓鬼が行われる。「**高野の施餓鬼**」といわれるこの施餓鬼には、特に新盆の家では、3 年間は参詣するものだといわれる。

（平成 22 年）『栗橋町史　民俗Ⅱ』P121

⑥　幸手市

23 日は**高野の施餓鬼**である。新盆の家では、「せがきでら」の名で有名な高野（現杉戸町下高野）の永福寺で行わ

れる「ドジョウ施餓鬼」で供養をし、土産に梨を買ってきて親類縁者に配る風習があった。
（平成 9 年）『幸手市史　民俗編』P546

⑦　宮代町
新盆の家では 8 月 23 日に杉戸町下高野永福寺の施餓鬼法要（**高野の施餓鬼**・どじょう施餓鬼ともいう）に行き、塔婆を上げ、因幡池にどじょうを放す。**高野の施餓鬼**にいくと高野のほおずきといって大きなほおずきや白岡から梨屋が梨を売りに来たので土産として買って来る。境内にはさまざまな店が立ち並び、昭和 30 年代にはガシャと呼ばれるクツワムシが竹籠に入れられ売られていたり、見世物小屋やサーカスが出たり、バイオリンを弾きながら歌の本を売る人などがいて大変賑わった。
東の新盆の家では、必ず**高野の施餓鬼**にはお参りに行った。新盆で家族の者が施餓鬼に行かないと、「うちは新盆でも来なかったのか」と仏様が寂しがるという。**高野の施餓鬼**に行くと境内の出店で土産に梨やほおずき、瀬戸物なども買ってきて配る。
逆井のある家では、23 日の永福寺の施餓鬼は近隣でも有名で大変にぎやかである。**高野の施餓鬼**は次のような歌にもなっている。　　盆と正月は　来なくてもよいが　来ればよい　**高野の施餓鬼**は
（平成 15 年）『宮代町史　民俗編』P235～236

⑧　春日部市
新盆の家では、その家族又は親戚が杉戸町**高野の永福寺の施餓鬼**に行く。その帰りに縁日で買った梨とほおずきを親戚や近所に配る。
（平成 5 年）『春日部市史　第 5 巻　民俗編』P357

⑨　岩槻市（現・さいたま市岩槻区）
盆の間や数日後に寺々では、セガキ（大施餓鬼法会）を行う。この法会に檀徒は出席するが、特にニイボンの供養も行うのでニイボンの家では必ず出席する。セガキでは、住職の読経の後焼香し、あらかじめ申し込んでおいた塔婆を受け墓地に立てる。また、ニイボンの家などでは 23 日に、**高野の龍頭山永福寺（杉戸町）のドジョウセガキ**にいく。
（昭和 59 年）『岩槻市史　民俗史料編』P867

⑩　浦和市（現・さいたま市の一部）
8 月 23・24 日はウラボン（盂蘭盆）である。普通ウラボンというと旧暦七月の盆の異称であるが、埼玉でウラボンというと、24 日の地蔵盆のことである。各家ではウラボンには、団子やウドン、ボタモチなどを作って仏様にあげ、墓参りをする。またこの日、盆の期間に都合で来られなかった身内の人などがきて、墓に線香をあげる。
ウラボンの大施餓鬼は、浦和では玉蔵院が有名である。23 日のヨイミヤ（宵宮）には多数の人々が集まる。また、24 日は北葛飾の**高野村（杉戸町高野永福寺）で大施餓鬼**があって、美園、大門地区の新盆の家では、大施餓鬼をやってもらいに行った。高野村に行ったのは、北原では五、六十年ぐらい前までである。それからは、浦和の玉蔵院に行く人もいた。
盂蘭盆は、仏典の説くところでは、子孫が絶えて供養を受けられない無縁仏の供養であるが、一般にはやはり先祖の供養が第一義なのである。
（昭和 55 年）『浦和市史　民俗編』P697

⑪　松伏町
松伏外河原地区のある家では、仏壇がある部屋とは別の部屋に盆棚を作る。昔は天井に届くほど大きなものだったが、使用する竹が大きなものは手に入らなくなってきて、小さくなってしまった。屋敷の裏に生えている竹を伐ってきて、棚の四隅に立て、畑に生えているホオズキを飾る。ホオズキは提灯（ちょうちん）の代わりといわれている。刈って干しておいたマコモを編んでござを作り、それを棚に敷く。棚の正面には、杉戸の永福寺で行われる**高野の施餓鬼**のときに購入した弘法大師の掛け軸をかけ、仏壇にある位牌をすべて並べる。
（平成 18 年）『松伏町史　民俗編』P273

各地区の寺院では、16・17 日に施餓鬼を行うところがある。大字松伏地区にある静栖寺では、16 日に施餓鬼があり、その際に獅子舞いが奉納される。この獅子舞いは、松伏神社で 7 月 15 日にも奉納されている。
また、23 日の**高野の施餓鬼**（杉戸町）には、新盆となった家が出掛けている。この日、「ウラ盆だから」といって仕事を休む農家も多い。
文化庁文化財保護部編（平成 12 年）『民俗資料選集　２８　盆行事Ⅳ』財団法人国土地理協会　P215

⑫　草加市
施餓鬼には二通りある。盆棚に迎えた仏さまが 15 日なり 16 日なりに帰られる前に行かれるものと、仏さまが帰られた後、家人が檀那寺の施餓鬼に行くものとある。
前者は 14 日とか 15 日に出かけるのだという。天竺の施餓鬼に行くのだとか（吉町・青柳・花栗）、「**高野の施餓**

鬼」（杉戸町下高野、永福寺の施餓鬼）に行くのだとか（瀬崎・中根・柿木・稲荷）いい、その日は朝早く供え物をする。15 日がその日だとする家が多く、この朝、小豆粥や小豆飯（赤まんま）を炊いたりする。15 日の場合はその日のうちに戻って、夜にはあの世に帰らなければいけないので（盆送り）、そのための乗り物として白瓜や茄子の牛・馬を供えるのだという。また、「施餓鬼に行く」といわずに「お土産を買いに行く」のだというところ（瀬崎）もある。
人が施餓鬼に行くのは、早いところで 16 日、あとは 17 日・19 日・20 日・22 日・24 日とまちまちである。各家の菩提寺の施餓鬼に行くことが多いが、中には「**高野の施餓鬼**」に行く人もあった。**高野の施餓鬼**は 24 日に行われ、新盆の人はよく行った。「親に逢いたければ**高野の施餓鬼**に行け」といわれた（青柳）。それは、人がいっぱい集まるので、その中に死んだ人によく似た人が必ずいるからでもあった。
菩提寺の施餓鬼では、塔婆を上げて供養してもらい、その後墓に持って行って立てた。
15 日の朝早く 6 時ころ、朝飯をすませて「**高野の施餓鬼**」に行って、帰って来てから盆棚を片付け、位牌などを仏壇に戻したところで「送り団子」を供え、それから仏さまを送ったという家もある（稲荷）。
（昭和 62 年）『草加市史　民俗編』P492～493

⑬　吉川市
ある家では 14 日の夜遅くホトケが天竺の施餓鬼に行くと伝えている。14 日、あるいは 15 日タカノに行くと伝えている家もある。その家では、ホトケがタカノに出かけるときの弁当だといい、小豆飯を握り飯にして供える。タカノに行くと伝えている家では、ホトケ送りは、16 日にするという。
「**高野の施餓鬼**」とは、埼玉県北葛飾郡杉戸町下高野の永福寺の施餓鬼会で、現在、8 月 22 日・23 日に行なわれている。北葛飾郡内では、新盆の家で**高野の施餓鬼**に行く人が多い。大きな角塔婆が立ち、大勢の人で賑わう。放生会で「ドジョウ施餓鬼」と言ってどじょうを買い、境内の池に放す人々が多い。一方、吉川市域では**高野の施餓鬼**は知らないという人が多い。ただ、盆中にホトケがタカノに行くと伝えている家が何軒かある。
（平成 22 年）『吉川市史　民俗編』P386

⑭　三郷市
14 日の朝はご飯で、味噌汁やトウナス（かぼちゃ）の煮物などを供えている。昼はうどんで、そうめんかひやむぎでもよいという。晩は家によって午後 3 時頃供えたり、深夜に供えたり、また何も供えない家もみられる。これは後に取り上げるホトケが**タカノノセガキ**に行くという伝承と関連している。小豆飯は、ホトケが出かけるときの弁当、あるいはそれを食べて出かけるといわれる。弁当として作る場合は、握り飯にして供える家が多い。また、出かける前の夕食として握り飯とは別に、盛った小豆飯も供える家もある（高須）。これを早朝に供える家では「早ければ早いほどよい」といい、夜に供える家では「遅いほどよい」といわれる。夜に供える場合は翌 15 日の朝は何も供えない。ホトケが出かけて留守のためである。ホトケが帰って来るのは家によって異なるが、だいたい昼過ぎになり、お茶やうどんあるいはとうもろこしや枝豆をゆでたものを供えたりする。
（中略）
8 月 14 日の晩、あるいは 15 日の朝早くホトケサマが「**高野の施餓鬼**」に出かけるといわれている。ホトケが出かけるときは、なすとうり（しろうりやきゅうりの家もある）にオガラを四本ずつさして足にした馬や牛を作り、ホトケはこれに乗って行くという。うりが馬で、なすが牛だというが、両方を馬だという家もみられる。なすとうりの牛馬は 13 日のお迎え前に作ってしまう家もある。近年では「ホトケサマも車で行く時代だ」といってなすとうりの牛馬は供えず、おもちゃの自動車や飛行機を棚に供える家が多くなった（高須）。
（中略）
ホトケサマが**高野の施餓鬼**から戻るのは 15 日の昼から夕方にかけてで、家によって異なる。16 日に送る地域では、やや遅くなる傾向がみられる。帰って来る時刻になるとお茶やとうもろこし・煮物などの供え物をする。
こうした伝承が三郷市域全体にみられるなかにあって、14 日の晩にホトケを遊ばせる地区（采女新田・花和田）では伝承が希薄で、ホトケが出かけることも、**高野の施餓鬼**も知らないという人が多い。また、戸ヶ崎のある旧家（Ｆ家）では 14 日の夜遅くにテンジクノセガキ（天竺の施餓鬼）にホトケが行くと伝えている。
ホトケが出かけるといわれる「**高野の施餓鬼**」とは、杉戸町下高野（埼玉県北葛飾郡）の龍頭山永福寺の施餓鬼会のことである。しかし、永福寺の所在を把握している人は意外に少なく、「昔からそういわれている」という。永福寺の施餓鬼会自体は古くから著名で、『新編武蔵風土記稿』の下高野村永福寺の項には「明徳三年七月廿三日　第三世日尊　己ガ父因幡カ罪業消滅ノ為ニ施餓鬼供養ノ法ヲ修セシヨリ以来　今モ其法修セリ　ソノ日参詣ノ人群集スルヲモテ　土俗施餓鬼寺トモ称セリ」と記されている。ただし、現在、永福寺の施餓鬼会は 8 月 22 日・23 日に行われている。高須では 23 日に高野の永福寺に行く人がいた。「ドジョウ施餓鬼」といってどじょうを買い、境内の池に放すのである。境内にはおおきな角塔婆が立ち、大勢の人でにぎやかであったという。特に新盆の家では、**高野の施餓鬼**に行くと亡くなった人と似た人に会えるといって行く人が多かった。
（平成 3 年）『三郷市史　第九巻　別編　民俗編』P445～450

⑮　八潮市
15 日の早朝に仏が**高野の施餓鬼**に出かけるといわれる。そこで主婦は、午前二時ごろに早起きして小豆飯を炊き、里芋汁と茄子の鳴焼きを供える。これは土産に持たせてやるためとされる。このおり餓鬼の分も一人前用意する

が餓鬼はお伴の意味で供える。この日高木では、乗物として白馬（白瓜）と黒馬（茄子）を作る。
（昭和 60 年）『八潮市史　民俗編』P868～869

※　埼玉県の以下の市町村史『民俗編』には、「年中行事」の項に「**高野の施餓鬼**」「**タカノの施餓鬼**」の記載なし。
・（平成 4 年）『川島町の文化財１０　川島の民俗・年中行事』
・（平成 7 年）『鴻巣市史　民俗編』
・（昭和 63 年）『桶川市史　第六巻　民俗編』
・（昭和 44 年）『大宮市史　第五巻　民俗・文化財編』
・（昭和 55 年）『与野市史　民俗編』
・（平成 5 年）『蕨市史　民俗編』
・（昭和 58 年）『戸田市史　民俗編』
・（昭和 55 年）『川口市史　民俗編』
・（昭和 63 年）『鳩ケ谷市史　民俗編』
・（昭和 56 年）『加須市史　通史編』（第 5 章　祭礼・法会）
・（昭和 60 年）『騎西町史　民俗編』
・（平成 3 年）『久喜市史　民俗編』
・（平成 15 年）『菖蒲町史調査報告書第一集　昔の生活と年中行事』
・（平成 18 年）『菖蒲町の歴史と文化財　通史編』
・（平成 2 年）『白岡町史　民俗編』
※　埼玉県の以下の市町村史は『民俗編』が確認できず、また『通史編』に年中行事や施餓鬼の記載確認できず。
（北川辺町は町史が確認できなかった。）
吉見町　吹上町　川里町　上尾市　羽生市　鷲宮町　蓮田市　庄和町（春日部市史庄和地域編）　越谷市

千葉県

千葉県は、北東部の自治体の市町村史を確認した。

①　鎌ヶ谷市

8 月 14 日を**タカノのセガキ（施餓鬼）**という。この日の午後三時ごろ、小豆（あるいはササゲ）の握り飯を作り、里芋の葉に載せてお棚に供えた。これは、この日の晩、仏様が**タカノ（高野）の施餓鬼**に出掛けるので、「弁当に持たせてやる」「腹ごしらえしてもらう」からだといっている。人によっては、天竺の施餓鬼に行くともいう。また、馬に乗って出掛けるため、13 日ではなく、このときにナスの馬を供えるという家もある。いずれにしても、14 日の晩は、仏様がいないので、お棚には何も供えない。ただし、家例として、盆の期間を 13 日から 16 日までとする家があり、その場合に限っては、15 日の晩に行くとしていることから、例外となる。この高野に関しては、高野山（こうやさん、和歌山県）ではないかという者もあるが、あくまでも憶測の域を出ず、伝承として実際どこなのかは、ほとんど認識されていない。（詳細は「民族研究の課題」第三章第四節「タカノの施餓鬼に行く仏」を参照）。
（平成 15 年）『鎌ヶ谷市史　別巻』P208

②　市川市

市川市では、8 月 14 日の夕方には、赤飯の握り飯にオガラの箸を突き立てて供えたが、これを仏様が「**タカノの施餓鬼**に行く」ための弁当とか「カヤノの市にカタビラを買いに行く」ための弁当などといっていた。そしてやはり、仏様がナスの馬に乗って出掛けるということは同様であった。また、所によっては、「天竺の施餓鬼に行く」といって、小豆飯の握り飯を弁当として供えたり、単に「施餓鬼に行く」からと 3 時ころに弁当として二つの握り飯を重ね、上からオガラの箸を突き刺したものを四組ほど供えたという例もある。
（平成 15 年）『鎌ヶ谷市史　別巻』P443

③　沼南町（現・柏市の一部）

隣接する沼南町では、8 月 14 日の晩ないしは 15 日の昼に、仏様が「**タカノの施餓鬼**に行く」ので、うどんと握り飯を供えたといい、このうち、握り飯のことは仏様の弁当だとよんでいた。また、家によってはこれを「天竺の施餓鬼に行く」とする場合もあったという。
（平成 15 年）『鎌ヶ谷市史　別巻』P444

④　柏市

柏市では、8 月 14 日の夕方ないしは 15 日の早朝に、仏様が「**タカノの施餓鬼**に行く」ので、新しく獲れたササゲの小豆飯、所によってはミズラという豆を入れて炊いた飯を握って丸め、これにオガラの箸を刺して供えたという。そして、地域によっては、タカノというのは埼玉県北葛飾郡杉戸町下高野のことであるとの言い伝えをもつ事例が点在する。
（平成 15 年）『鎌ヶ谷市史　別巻』P444

⑤　松戸市
松戸市でも 14 日のことを**タカノの施餓鬼**の日とよんでいた。
（平成 15 年）『鎌ヶ谷市史　別巻』P444

⑥　流山市
旧八木地区の南部では、新盆の家から埼玉県杉戸町**下高野の永福寺での施餓鬼**に出掛け、塔婆をあげたり、供養の掛軸を購入し、来年の盆棚に軸を吊るす。
（平成 2 年）『流山市史　民俗編』P158

流山市では、14 日を**タカノの施餓鬼**といって、仏様が「タカノで出掛ける」日としていた。14 日は朝参りといって早朝に墓参りをすませてから、盆棚に白飯などの供え物をした。仏はそれを食べてからタカノに出掛け、夕方に帰ってくるといっていた。したがって、昼には何も供えない。夕方になってそうめんなどの供え物をした。ここでは、タカノとは高野山のことだという例もあるが、所によっては、杉戸町下高野の永福寺で行われる施餓鬼会のことを「**高野の施餓鬼**」だとする事例もある。
（平成 15 年）『鎌ヶ谷市史　別巻』P444

⑦　野田市
野田市では、14 日の昼ないし 15 日の早朝に、やはり仏が「**タカノの施餓鬼**に行く」ので、小豆飯に里芋の味噌汁などを供え、さらにナスの馬に乗って出掛けるからといって、必ず雌雄ひとつがいの馬も盆棚に供えたという。加えて先述と同様、ムラによっては、タカノといえば杉戸町下高野のことで、しかも当町に所在する永福寺を指すとの明確な認識もある。そして、特に新盆を迎えた家の者は、同所同寺で行われる施餓鬼会に行って供養してくる習わしになっていたとの報告もある。
（平成 15 年）『鎌ヶ谷市史　別巻』P445

⑧　関宿町（現・野田市の一部、利根川をはさんで杉戸町に隣接）
盆は 8 月 13 日が迎えで、15 日が送りであるが、家によっては 16 日の所もある。ただし、盆の最中に仏様が出掛けるなどという伝承はない。「**高野の施餓鬼**」といえば、新盆の家族が宗派を問わず、毎年 8 月 23 日に行われる杉戸町下高野の永福寺（通称ドジョウ寺）へ参詣しに行くことをいうのであって、行けば小振りの塔婆に亡くなった者の戒名を書いて供養してもらい、ドジョウを池に放すということをする。そして、帰りにはナシやホオズキなどを買ってきて親戚・近隣に配ったものだという。
これと同様の事例は、流山市や野田市などにも点在している。この地域では、さながら新盆儀礼のように、当家の者が参詣することが多かった。そして、この下高野の永福寺の施餓鬼会を指して「**高野の施餓鬼**」とよんでいたのである。
（平成 15 年）『鎌ヶ谷市史　別巻』P445～446

※　千葉県の以下の市町村史には、「年中行事」の項に「**高野の施餓鬼**」「**タカノの施餓鬼**」の記載なし。
・（昭和 60 年）『浦安市史』（第四節　年中行事）
・（平成 13 年）『船橋市史　民俗・文化財編』
・（平成 8 年）『印西町史　民俗編』
※　柏市・松戸市・市川市・習志野市は『民俗編』確認できず、『通史編』に年中行事や施餓鬼の記載確認できず。
（我孫子市は『民俗・文化財篇』あったが夏の年中行事の記載なし。野田市は市史が確認できなかった。）

東京都

東京２３区東部は『民俗編』が少ない一方、民俗関係も含めホームページに区史がアーカイブとして公開されているケースが多い。「○○区　施餓鬼」でネット検索したところ、足立区と葛飾区のホームページに「高野（タカノ）の施餓鬼」に関する記載が確認できた。
①　葛飾区
14 日の夕方、仏様が**高野の施餓鬼**に出掛けるといい、弁当としておにぎりやナスの味噌焼きを盆棚に供え、オガラの箸をそえる。おにぎりの数は家や集落によって多少数が違うが 12 のおにぎりを作ってオガラの箸をさしておくという家がある。15 日に**高野の施餓鬼**から仏が帰ってくるまで、盆棚の灯明は消しておく。「**高野の施餓鬼**」とは埼玉県北葛飾郡杉戸町下高野の永福寺の施餓鬼である。この**高野の施餓鬼**は 8 月 24 日に行われるが、この日にお参りすると亡くなった家族にそっくりな人に会えるといわれている。
（葛飾区ホームページ　葛飾区史＞葛飾区史目次＞葛飾区の年中行事　4　盆を巡る行事（７）高野の施餓鬼）

②　足立区
足立区周辺には、8 月のお盆の間、14 日もしくは 15 日に、「仏様が**高野（たかの）の施餓鬼**に行く。」といい、家に戻って来ている先祖の霊（仏様）が、この日一日、留守にするという伝承があります。高野とは埼玉県北葛飾郡杉戸町下高野の永福寺のことを指し、施餓鬼供養は現在毎年 8 月 22 日、23 日に行われ賑わっています。先祖の

霊（仏様）が**高野の施餓鬼**に行くとされている日は、盆棚にも供え物や灯明はあげないなど、先祖の霊が出かけていないという対応をします。また、出かけるための弁当として、前日の夕、もしくはその日の朝、おにぎりや味噌汁、ナス焼きなど特別に供え物を用意する家もあります。高野の施餓鬼ではありませんが、ただ「買い物に出かける」という家もあります。このときも、弁当としておにぎりなどを供えます。
「**高野の施餓鬼**に行く」という地域は、埼玉県、足立区、葛飾区と、千葉県でも埼玉よりの地域に分布し、永福寺との距離と関係しています。また、新盆の家は**高野の施餓鬼**にお参りに行くと、亡くなった方に似た人に逢うことができるともいい、実際に**高野の施餓鬼**を知っていて、お参りもできる範囲が該当していると考えられます。
盆の最中に、家に戻って来ている先祖の霊がどこかに出かけるという伝承は、東京、埼玉、千葉、神奈川県でみられるもので、静岡県の中部でも確認されています。買い物先は、不明なことが多く、天竺（てんじく：インドのこと）であったり、近隣の町場であったりします。神奈川県中部の平塚市、綾瀬市などでは、町田市という近隣では最も栄えていた町場に行くといわれています。
買い物に行くために、盆棚の供え物であるナスやキュウリの馬や牛に茹でたソウメンで、手綱をつけたり、買い物代金として、お札を乗せたりする地域も見られます。
足立区では、お盆を 7 月に行う家と 8 月に行う家があります。近接する埼玉県域では、おおむね 8 月に行われています。
（足立区立郷土博物館トップページ＞足立を学ぶ｜足立区立郷土博物館＞高野（たかの）の施餓鬼）

＜花畑地区＞
15 日の朝、仏様が馬に乗って**タカノの施餓鬼**へ行くといった。家によっては、タカナワの施餓鬼とよんでいる家もある。松田三吉家では、仏様が**タカノの施餓鬼**に行く時は、小使いとして、あるだけのお金を置いておく。伊藤伊三郎家では、この日にはソウメンをあげる。15 日には、仏様が**タカノの施餓鬼**に行っているため、お線香をあげに行っても、「仏様は居ないよ」などと言われた。
＜淵江地区＞
盆の間に施餓鬼というものがある。15 日の午前中に、仏達はなすやきゅうりの牛馬に乗って、**高野の施餓鬼**に行くといわれていた。高野（タカノ）には、埼玉説と、高野山説があるようだが、15 日に線香をあげても、「今日は仏様は留守だ」などといわれた。
足立風土記編さん委員会・足立区郷土博物館編（平成 2 年）『年中行事　1』P14、P24

茨城県

茨城県は、杉戸町に近い自治体の市町村史を確認した。
①　総和町（現・古河市の一部）
寺により日にちは異なるがオテラサンにお経を上げてもらった施餓鬼の塔婆（前面は施餓鬼の文句が書かれており、裏面には生年月日と施主の名前が書かれている）を墓に立てる。一番最初の先祖から全部の先祖を供養する。16 日に行なう大字では送り盆と日が重なるので、一緒に塔婆を持って行くが、月末などにあたる大字では送り盆とは別に墓に持って行っている。水海では新盆の家は**高野の施餓鬼**に行っていた。
（平成 17 年）『総和町史　民俗編』P394

②　猿島町（現・坂東市の一部）
盆になると各寺院では施餓鬼会を営む。この行事は文字どおり餓鬼のため飲食を施し死者の滅罪追福をするために行われるのであるが、当町では、新しく亡くなった精霊への供養と理解されている。逆井の常繁寺は 22 日、生子の万蔵院は 16 日、沓掛の竜泉寺は 15 日に施餓鬼会を行う。この日、新盆の家では、施餓鬼に出席する親族や近所の人たちへの接待で、朝からその準備に忙しい。施餓鬼は午後 1 時ごろからはじまり 3 時ごろは終わりとなる。法要の仕方は宗派によって多少異なる。
「親が死んだら**高野の施餓鬼**」「紀州の高野（こうや）へ行きたいが、せめて**高野の施餓鬼**まで」など言われ、埼玉県杉戸町にある高野の永福寺の施餓鬼会へ親族を伴って行く。この法会には近郷の人がたくさん集まるので、亡くなった人と似た姿に会うことができる。また、境内で売っているドジョウを井戸に放すと亡くなった人の顔が水面に浮かぶなどの話も付加されている。
（平成 10 年）『猿島町史　民俗編』P366

※　茨城県の以下の市町村史には、「年中行事」の項に「**高野の施餓鬼**」「**タカノの施餓鬼**」の記載なし。
・（昭和 58 年）『古河市史　民俗編』
・（平成 13 年）『三和町史　民俗編』
・（昭和 51 年）『五霞村の民俗　―五霞村の歴史民俗研究第三集』
・（平成 17 年）『下総　境の生活史　図説・境の歴史』
※　結城市・八千代町・岩井市は『民俗編』確認できず。

以　上

優秀賞

関東大震災下の箱根地域の被害と復旧

―残された史料・石碑から読み解く―

（富士屋ホテルでの聞き取り調査の様子、2023年7月28日撮影）

研究対象地域→神奈川県足柄下郡箱根町

神奈川県立足柄高等学校　歴史研究部

3年　米澤　檜

はじめに

東日本大震災以降、熊本地震などの震度５以上の地震が多発しており、地震に関する報道をよく耳にするようになった。最近起こった石川県能登半島地震では、津波による被害はなかったものの、家屋の倒壊や地すべりや崖崩れなどが起こった。近年では、首都直下型地震が３０年以内に６０～７０％の確率で起こると言われており、真剣に地震に対して考えるようになった。そこで私は過去の地震について調べ、どのような被害があり、また当時の人びとが地震にどう向き合い、復興していったのか研究しようと思った。

過去に起こった地震を調べていると、関東大震災が今年で１００年になることを知り、この地震について興味を持った。私たちにとって「関東大震災」は経験したことはないが、知識として知っている地震の一つである。しかし、それがどれほどの被害をもたらし、震災後どのようにして社会が復興していったのかなど自分が知らないことが多々あることに気づき、今回の研究を機に深く知りたいと思った。

私は、神奈川県の中でも箱根に焦点をおき、調査を行った。なぜ箱根地域を研究対象としたかというと、過去に曽祖父が箱根で関東大震災を経験したという話を私の祖母から聞いていたからだった。そのことから箱根地域の被害に興味を持ち、研究を行った。調査を進めていくうちに当時の被害が細かく記された日誌や数々の碑や遺構があることを知った。

このレポートでは、第１章で先行研究を参考にして関東大震災の被害や箱根地域の被害についてまとめ、第２章では日誌から読み取れる内容や、現地調査で見つかった新たな史料や碑から復興状況などをまとめる。

第１章　関東大震災による被害

１　関東大震災の概要

１９２３（大正１２）年９月１日、午前１１時５８分に、神奈川県西部を震源とするマグニチュード７．９の巨大地震が発生した。この地震は震源域が広く、神奈川を中心に隣接する東京都、千葉県、茨城県、静岡県東部までの広い範囲に甚大な被害をもたらした。死者は１０万５３８５人に達し、建物の被害も大きく、電気、水道、道路、鉄道などに大きな影響をもたらした。

この地震での主な死因は焼死が多く、発生した時間がお昼時ということもあり、火を扱っていた住宅が多かった。それに加え、この頃の日本は木造住宅が多く、あっという間に火災による被害が広い範囲に及んだ。山間部では崖崩れ、沿岸部では津波よる被害が起き、根府川駅（現神奈川県小田原市）では、土石流によって、列車や駅舎、ホームもろとも土石流に巻き込まれ、海中に投げ出されるという事故も発生した。東京に集中していた政府機関も地震で被害を受け、国家機能が麻痺した。

震災後、被害による通信の途絶によって震災の被害の全貌を把握できず、それによる救護の不手際に加え、朝鮮人による凶悪犯罪や暴動といった流言が行政機関や新聞、民衆を通して広まり、朝鮮人が虐殺、またそれと間違われた中国人、日本人も虐殺されるといった被害が起こった。こうした事態に対し、山本権兵衛内閣は９月２日に戒厳令を出した。７日には、「治安維持ノ為ニスル罰則ニ関スル件」（治安維持令）を出した。この朝鮮人虐殺は事件当時の資料や公文書がほとんど公開されていないこともあり、犠牲者の数が把握できない状況が続いていた。しかし近年の研究では、犠牲者は数千人を超えることが明

らかになっている。

地震の一報を受け、多くの国から救援や義捐金、医療物資の提供の申し出が相次いだ。特にアメリカからの支援が圧倒的で、アメリカやイギリスの軍艦が救援物資を運んだことも記録に残っている。

２　大正時代の箱根

震災当時の箱根町は１町６村〔箱根町、湯本村、温泉村、宮城野（みやぎの）村、元箱根村、芦之湯村、仙石原（せんごくはら）村〕で構成され足柄下郡に属していた（現在の箱根の詳細な地域名については、【図１】を参照）。箱根には、箱根八里と呼ばれる道と、七湯道と呼ばれる道があった。七湯道は、現在の国道１号線である。七湯道は最初から国道１号線にするために整備されたわけではなく、富士屋ホテルの創業者山口仙之助〔１８８６（明治１９）年に塔ノ沢―宮ノ下間に新道開通〕や芦之湯にある松坂屋の７代目松坂萬右衛門〔１９０４（明治３７）年に宮ノ下―箱根間に新道開通〕など地元の旅館の主人が自前で道路の整備を行って、馬車や自動車が通れる道路が作られた。

箱根に鉄道が開通したのは１８８８（明治２１）年で、国府津から小田原を通り、箱根湯本へとつながる小田原馬車鉄道が開通した。この１２年後の１９００（明治３３）年には電気軌道化が実現し、小田原電気鉄道となった。現在は箱根登山鉄道となっている。

箱根は昔から温泉町として知られており各地に宿泊施設が設けられていた。大正時代には湯本から箱根町までに多くの旅館があった。

３　箱根地域での被害

まず、全体的な被害の状況を関東大震災での被害を国土地理院に所蔵されている箱根地域の被害をまとめた地図（【図２】）や、箱根登山鉄道株式会社での調査の際に見つかった写真などを用いながら読み解いていく。

箱根地域での主な被害は山崩れ、崖崩れによるものだった。湯本から塔ノ沢、大平台、宮ノ下までの地域や、畑宿の周りの山々でもがけ崩れが発生した。湯本では湯本駅裏の白石山（しらいしやま）の山崩れが起き、周辺の停留所や家屋が埋没した。塔ノ沢、湯本茶屋では、全倒壊１０戸、半倒壊６０戸、死者３０名の被害を出している。

宮ノ下では地図をみると３８０戸の内、全焼したのは２４２戸、あとの家は半倒壊、死者は６４名とあり、箱根地域の中では最も被害が多く、火災も発生していた地域だということがわかる。更に宮ノ下付近に書かれた記述には、「徒歩ノ者困難ノ処諸所アリ、此ノ間電車路ノ被害最モ甚ダシク復旧ノ見込ミ断タザル由、電線ノ被害甚シカラズ」とある。「電車路」とは、箱根登山鉄道の線路のことであり、宮ノ下付近を走る鉄道の被害が箱根地域の中でも酷く、復旧の見込みが立たないこと、電線の被害はそこまででもなかった、ということがわかる（【図３】）。箱根登山鉄道株式会社にお話を伺ったが、一度本社が炎上してしまったこともあり、当時の史料は残っていないとのことだった（【図４】）。この他に宮ノ下では、奈良屋（旅館）の西洋館が倒壊、富士屋ホテルでは建物の屋根瓦が崩れるといった被害を受けた（【図５】）。宮城野、仙石原でも山崩れが発生し、人夫７名が生き埋めになり、一家が埋死するといったことが起こった。仙石原にある旅館の仙郷楼、俵石閣も半壊した。元箱根では、「全倒壊四戸　残被害少　死者一名」とあり、比較的被

害は少なかったことがわかる。箱根神社も半壊の被害を受けた。交通機関では、箱根山を巡る道路では山崩れ（【図６】）、湯本から畑宿を経て、箱根町につながる旧東海道では大石の落石の被害を受け、宮ノ下―仙石原間道路は各地で崖崩れが発生し、交通が途絶えた。

４　震災後の復旧活動

震災後に最も早く復旧工事が行われたのが交通網だった。【図２】を見るに湯本―宮ノ下間では隙間なく山崩れが発生しており、交通網の被害はここが一番受けている。この問題を解決するため、湯本村、温泉村、宮城野村、仙石原村、箱根町二か村組合（二か村は元箱根村、芦ノ湯村）の村長などは、１９２３（大正１２）年９月２０日に神奈川県庁に出頭し、当時の神奈川県知事安河内麻吉に面会し、箱根山の状況を訴え、道路の一日も早い復旧工事を実施するよう懇願した。しかし、県からの返事は「温泉さえあればいずれの日か復興できる」という冷たい返事であった。

こうした経緯で、県からの援助が望めなくなった箱根では、有志が一丸となって自力更生を決意し、箱根復興会が結成された。箱根復興会は各町村から復興資金を募集して、湯本―宮ノ下間の道路工事を行った。１９２４（大正１３）年６月１日には小型自動車が宮ノ下まで通れる道路が完成した。しかし、この工事は仮の道路を作った工事だったため、雨が続くと道路が崩壊し交通が途絶する状態を繰り返し、復興は難航した。道路とは裏腹に鉄道での被害は少なかったこともあり、道路の工事よりも早く終わり、湯本―宮ノ下間の交通は登山電車によってまかなわれた。１９２５（大正１４）年７月に湯本―宮ノ下間の復旧工事は終わり、道路が完成した。その祝いとして箱根復興会は同年７月、内務省の土木局長や、当時の神奈川県知事清野長太郎らを富士屋ホテルに招待し、開通式を行った。

第２章　日誌や石碑、新出史料からわかった箱根の被害と復興状況

１　ただ一つの日誌

調査の過程で、当時の箱根の被害状況が記された日誌の存在を知った。この日誌の原本を閲覧させていただきたいと、箱根町立郷土資料館にお話を伺った。館長である鈴木康弘氏に、日誌の存在を聞いたところ、それは、「宿直日誌」と呼ばれているものだということがわかった。しかし、鈴木氏のお話では、「現在も保存されてはいるはずだが、日誌がどこにあるかは現状わからない。箱根町で確認されている関東大震災のことを記録した日誌で、当時のことを記した日誌はこの１つしかない。」とのことだった。幸いにも『箱根温泉史』に一部が掲載されていたため、内容を知ることができた（【図７】）。以下、日誌の記述に基づき、当時の被災状況を探りたい（【史料１】）。

第一震で山崩れと地割れが発生し、役場前の家屋は全部倒壊した。第二震で住宅より火災が発生、断水のために消火活動が行えず、役場一帯が火の海になってしまった。温泉村の役場が全焼したことにより、富士屋ホテル前に仮の事務所が置かれた。２日時点での死亡者は６３名（内外国人１人）であった。富士屋ホテルには久邇若宮朝融（あさあきら）王殿下が避暑のため訪れていたという。記述中には、「村内ハ全ク暗黒同様トナリ」とあり、地震によって電気が使用できず、さらに断水によって水の確保が行えないため当時の人びとが不安な状況であったことがわかる。

これは日誌の一部をまとめたに過ぎないが、この記述は、震災直後の箱根とくに宮ノ下

の惨状を細かく記していた。以下、この日誌に記された内容に照らし、聞き取り調査などから新たにわかったことを記していきたい。

２　曽祖父の経験

日誌には、震災直後に山崩れが発生し、死者が出たという記述がある。私は昔からよく祖母から曽祖父の話を聞いており、その中で「曽祖父は幼少期に震災で兄健次を亡くしている」という話を思い出した。改めてその話を聞くと、「曽祖父は当時３歳で底倉（宮ノ下の隣の地区で、当時の温泉村内）に住んでいた。仙石屋という旅館の子どもと遊んでおり、丁度お昼時で自宅に帰った時に地震が起きた。その時一緒にいた兄が家と共に山崩れで落ち、亡くなった。曽祖父も崖から落ちそうになり、崖を何度も何度も這い上がろうとしたが上がれずにいたところに、小田原から来ていた姉に手を取ってもらい、崖から這い上がることができた。」と曽祖父の経験を詳細に語ってくれた。底倉でも山崩れが起き、この時日誌に書上げられている死者の中に曽祖父の兄が含まれていたと考えられる。曽祖父の兄は当時小学生で、山崩れの影響で家が滑り落ち、その下敷きになって亡くなってしまったと聞く。この他にも関連する資料がないか、調べていたところ、菩提寺である　常泉寺（箱根町宮ノ下）に関東大震災に関する石碑があるということがわかった。

常泉寺の境内の中にある「大正十二年九月一日震火災横死者供養塔」（【図８】）には、裏に７９名の犠牲者の名前が刻まれていた。その名前の中に、「原田健次」（【図９】）とあり、曽祖父の兄の名前が見つかった。健次は、震災で亡くなった後、菩提寺の常泉寺において、他の犠牲者とともに供養されていたことがわかった。

ところが、先日原田家の墓の調査に向かい、曽祖父の兄の没年月日を確認したところ、「大正十二年六月一日」と記されており、没した月が一致しなかった（【図１０】）。祖母にこのことについて聞いたが、「日付は墓が間違っている」とのことだった。私がお墓参りした際には、全く気付くことのできなかった視点であった。

３　富士屋ホテルの守り神

他にも日誌の記述の中には、「富士屋ホテル前二炊出所ヲ設ケテ避難者ヲ救護ス」という記述がある。富士屋ホテルが被災者救援のため炊き出しを行っており、この時すでに水の確保ができていることがわかる。日誌にもある通り、断水状態の中で、この水はどこから得たものだったのだろうか。

この謎を解決するため、富士屋ホテルにお話を伺った（【図１１】）。富士屋ホテルは１８７８年（明治１１）に山口仙之助が創業したホテルである。震災当時には本館（【図１２】）と西洋館が建っていた。ホテルの被害は、料理場が大破し、遊泳場や庭園内設備が全壊した。本館と西洋館は、倒壊こそしなかったものの、煉瓦積の煙突が崩壊し、屋根瓦が大破、雨漏りもするといった被害も受けた。ホテルは、断水状態と道路の陥没に加え、多くの観光客が滞在しており、食事などの点で困難な状況に陥った。その時にホテルの施設内にある井戸が、食事や洗面などの場で役に立ち、この井戸はのちに富士屋ホテルの守り神となったという（【図１３】）。おそらく、この炊き出しで使われた水は、この聞き取り調査でわかった井戸からのものではないかと推測できる。

この推測が正しいか、富士屋ホテルの方に聞き取りを行ったが、炊き出しについては記

録や写真が残されておらず、案内人の方も事実かどうか断定できないとのことだった。しかし、聞き取りの中で、興味深いお話を伺えた。それは、案内人の方が１５年ほど前までは、厨房で働く人が毎日この井戸に拝んでいたそうだ。これは、「震災の時にこの井戸でホテルが救われたため、厨房で働く人たちが拝んでいるのではないか。」との話だった。この取り組みはホテル全体での取り組みではなく、厨房で働く人たち独自の取り組みだったようだ。こうした話が富士屋ホテルには残っていた。

４　復興の裏で行われていた不正

宮ノ下一帯では、日誌内にも「水道破壊シテ一滴ノ水ナシ」という記述があるように、断水被害があった。水道の復旧活動を示す史料を探す過程で、先述の常泉寺に水道の復興過程を示す史料が存在することが新たにわかった（【図１４】）。「雑書綴」という当時の温泉村村長であった常泉寺の住職がまとめた史料の一部に震災後の水道関係の記述があった（【図１５】）。【史料２】は、１９３０（昭和５）年７月に猪野裕という底倉に住んでいた人物が、当時の県知事や内務省の局長宛に送った上申書である。内容は「震災を利用して水道敷設を画策し、事実を偽って復興低利資金三万円をもらっている。そのため当村を革正し、発達をさせるため監督及び調査をしてほしい」といったものだった。温泉村（宮ノ下）では水道敷設を理由に、復興低利資金を騙し取っていると告発していることがわかった。この不正に対し猪野氏は、記述に「黙過シ難キ不純ナル行為」と強い言葉で批判している。１９３０年当時の１円は、今では６３６円程なので３万円は１９００万円ほどでかなりの金額であった。猪野氏がどのような人物かは謎である。ただ、温泉村内で行われた不正を知る人物ならば、村内の行政に携わっていた人物ではないかと推測できる。事件の顛末はわからないが、復興の裏では、こうした不正も横行していたのである。

おわりに

震災が発生した９月１日は、防災の日とされている。今回関東大震災を調査し、その意味を再認識することが出来た。今回の研究では、この震災の主な死因とされる火災よりも、箱根地域では山崩れでの死者が多いことがわかった。山崩れ、断水、火災と復旧の目処が立たないと言われた程の被害があったが１年程で大体の復旧が行えており、当時の人々の行動の早さにとても驚いた。その復興の裏では、一つの村の中で不正が行われていた事も発見することができた。墓の調査では、結果的に小さな発見ではあったが、この調査をしていなければ、没年月日の誤りに気付けなかった。このような小さな発見が、新しい事実の発見に繋がる事もあるため、地道な現地調査を引き続き行い、今後の研究に役立てたい。震災は、私の曽祖父も当時３歳ながら、鮮明に記憶していたことからも、当時の人びとへ強い衝撃を残した出来事だと改めて実感した。現在は当時のことを伝える人がほとんどおらず、映像や写真などでしか語られないこの震災を、今回の調査で見つかった発見と共に後世に伝えていきたい。今年で１００年という節目を迎える関東大震災は、テレビや新聞などを通して、沢山の人が再び耳や目にするだろう。この節目だからこそ、この震災に学び、一家庭事に防災対策を見直してもらいたい。それが近年起こると言われる大地震への、少しもの対策へとなるものだからだ。私は関東大震災が人びとの防災意識を高める糧となり、今後も語り継がれていくべき出来事だと思っている。

参考文献他

参考文献

・神奈川縣警察部『大震火災誌』（神奈川縣警察部、１９２６年）
・桝井照蔵『大震災記念寫眞帖』（神奈川縣震災寫眞帖頒布事務所、１９９８年）
・箱根登山鉄道社史編纂委員会『箱根登山鉄道　グラフ９０』（箱根登山鉄道株式会社、１９７８年）
・『神奈川縣震災誌』（神奈川縣、１９２７年）
・児島豊『箱根宿』(箱根長寿会、１９９６年)
・青田孝『箱根の山に挑んだ鉄路』（交通新聞社、２０１１年）
・箱根登山鉄道株式会社『箱根登山鉄道のあゆみ』(箱根登山鉄道株式会社、１９７８年)
・松坂進『箱根温泉史』(箱根温泉旅館協同組合、１９８６年)
・内務省社会局『関東大震災誌・神奈川編』(千秋社、１９８８年)
・内務省社会局『写真集・関東大震災誌』(千秋社、１９８８年)

調査年月日

１回目　２０２３年３月２１日　箱根町立郷土資料館
２回目　２０２３年７月１０日　箱根登山鉄道株式会社
３回目　２０２３年７月１２日　箱根町立郷土資料館
４回目　２０２３年７月２８日　富士屋ホテル、常泉寺

調査協力

国土地理院
箱根町立郷土資料館館長
　鈴木康弘氏
箱根登山鉄道株式会社
　伴野太一氏
常泉寺
　折橋尚道氏
富士屋ホテル株式会社
　鈴木香氏
　趙昶賢氏
米澤陽子氏
米澤政道氏

顧問

桐生海正先生
太宰雅翔先生

史料

【史料１】大正１２年～大正１４年「日誌　宿直日誌」（箱根町郷土資料館所蔵、『箱根温泉史』より引用）

（表紙）
「自大正十二年
　至大正十四年
　日誌　　宿直日誌兼用
　温泉村役場」

大正十二年九月一日　　晴
午前九時頃雨全ク霽レテ快晴トナリ暑気高シ。加川土木技手来場小涌谷方面別荘中最モ大ニシテ設備ノ整ヘルモノヲ調査セラレ三好助役之レニ応接、切図名寄帳等ヲ取調中突如トシテ、上下及水平ノ激震起ル。三好助役

ハ初震ノ瞬間を知ランガ為メ、懐中時計ヲ見ツヽ庭ニ降リ出口ニ立チタルト同時ニ戸外ニ抛ケ出サレタリ。此時折橋書記、加川技手相以テ戸外ニ避難シタリ。
第一震未ダ止マザルニ、更に猛烈ナル第二震起リ、第一震ニ倒レ残リタル家屋ヲ倒潰シ山腹崩レ地割レ光景凄惨ヲ極ム。
役場前通リノ家屋ハ第一震ニ因リテ殆ト全部倒潰シタリ、第二震ノ止ミタル頃役場前安藤京太郎住宅ノ最下部ヨリ発火シタルモ水道破壊シテ一滴ノ水ナシ。又防火用器具モナク消防ノ途絶テ依テ三好助役ハ庁内ニ入り倉庫ノ窓及入口ヲ鎖シタリ、此時入口ノ扉ニ狂ヒ在リ完全ニ鎖スコトヲ得ズ。焦慮シタリトモ終ニ錠ヲ卸スコトヲ得ザル折柄黒煙襲セ来リ、止ムナク其場ヲ去レリ。折橋書記又倉庫ヲ鎖スベク屋内ニ入リタルモ完全ニ鎖スコトヲ得ザリシト謂ヘリ。
不幸震火ハ忽チ隣家豊住為吉及自動車仮車庫ニ延焼シ以テ新築日尚ホ浅キ村役場災厄ニ罹リ其ノ付
近一帯火ノ海ト化ス。呼々無惨地震ノ震動峻烈ニシテ地表ノ何物モ全キモノナキニ因リ、村内ハ鼎ノ
沸クガ如ク辛クモ避難シタル者ハ互ニ安全地帯ヲ撰ビ其所此所ニ呆然トシ、今後ノ成行ヲ気遣フノミ。
村役場全焼シタルニヨリ富士屋ホテル前ニ仮事務所ヲ開キ応急処置ヲ取ル。交通杜絶大平台及小涌谷ノ消息ヲ知ル由ナシ。

大正十二年九月二日　　晴
本郡役所へ急使ヲ派シテ震災ノ惨状ヲ報告シ、救済方ヲ訴フ。
三島町及沼津市へ決死的特使ヲ派遣シ、食料品ヲ調達輸送センコトヲ依頼ス
富士屋ホテル前ニ炊出所ヲ設ケテ避難者ヲ救護ス。調査結果ハ、死亡者六十三人（内外人一人）余震頻々トシテ起リ、人心恟々タリ。
前日来宮之下御用邸内ニ避難スル者多ク、邸内ニ明地ナク畏レ多クモ遂ニ御建物内ニテ避難民充満シタリ。
富士屋ホテル御避暑中ノ久邇若宮朝融王殿下ハ幸ヒニ恙アラセラレス大型自動車内ニ御避難起（臣に犬）在セラル。
村内ハ全ク暗黒同様トナリ、住民ノ全部ハ戸外生活ヲ覚タリ。
水絶へ物資ハ豊富ナラズ不安甚シ。状況前述ノ如シト（口の下に虫）モ秩序ハ乱レズ有志者ハ結束シテ極力善後策ヲ講ジ些ノ不平ナシ。
各団体及自動車従業員ノ活動目覚シキモノアリ。

【史料２】昭和５年７月「上申書」（「雑書綴」のうち、箱根町常泉寺所蔵）
※解読できなかった文字は〇で示してある

(表紙)
「雑書綴」No2

上申書
先般来本縣町村會二於テ経済界不況ノ為メ其筋ヨリ借リ入タル復興低利資金ハ現今ノ状態ヨリシテ到底返済ノ見込立タザレバ相當延期又ハ棒引相成肯嘆願中ノ如ク新聞紙上二見受ケラレ候處他町村ハ或ハ陳情ノ如キ事實ナルベキモ若シ當温泉村二於テモ同様ノ陳情嘆願二出デタリトセバ是レ甚シキ偽リ二候當地ハ温泉場二加フル二天下ノ勝地トシテ冠絶セル特権的天恵ヲ有セルハ爰二呶々ヲ要セザル所従テ四時京浜ノ佳客ノ来遊ヲ恣ニシ目下ノ大不況ニモ左程ノ影響ヲ及ボサズ少商人勞働者モ比較的物資二恵マレ生活上甚タシキ脅威ヲ感ヅルモノ鮮シ是レ懸値ナキ偽ラザル當村ノ實情二有之候而シテ震災直後水道敷設ノ為メ四萬圓也ノ復興

低利資金ヲ仰キ既二昨年度頃ヨリ若若干宛ノ償還期二相成居ル筈ト察セラレ候モ未タ一回ノ償還二及バザル由シ二候然ル二役場二於テハ一方給水者二對シ最下層ノ細民婦女子繊腕ニテ危ク其業ヲ營ムモノ又ハ失業ニアルモノヲ先頭二槍玉的二水道使用條例二明記セル條文無視シ村條例ヲ楯二滞納使用料一ヶ月分毎二金貳拾銭也ノ督促手数料附加シ三、四年度ヲ取リ纏メ一時二強制手段二依リ高利貸シ以上ノ苛酷ナル徴収ヲ続々敢行シ居ルコトナレバ其他ノ者ノ滞納ノ回収ハ極メテ易々タルヤ論ナキ處ナリ而ルニ斯クノ如ク三年乃至四年以上モ滞納

ヲ整理セザルハ村當局ノ怠慢二歸スル責任ナルベリ或ハ又這般嘆願ノ口實ヲ依ルニアリタルヤモ測ルベカラズ然レバ當村長ノ無期延期又ハ棒引嘆願ノ

申立テニ依ル事實ハ全然虚偽ナルコト明白二候ヘハ村役場ガ村民二臨ムト同一ノ態度ニテ最重二御處理相成度此段上申仕リ候
尚併セテ副申仕リ候、事ハ震災直後當村二於テ震災ヲ奇貨二好機逸スベカラズトナシ水道敷設ヲ畫策シ事實ヲ偽リ其筋ヨリ三萬圓也ノ補助金ヲ貰ヒ受ケ之レニ本件四萬圓ノ低利資金ヲ借リ入レ始メテ宮ノ下水道ナルモノヲ創設シタルモノニ有之聞ク所二因レバ該補助金ハ震災以前既二存在シ震災二因テ破壊セル物件ノ復舊ヲ目的トスル特権ノ意味ノモノナル由シ果シテ然リトセバ當村ノ行為ハ如何二一村一部落ノ利益ノ為メトハ謂ヒ黙過シ難キ不純ナル行為ニシテ是レヲ我ガ刑法二見レハ涜職、詐欺、横領等ノ罪ヲ構成セ

ザルナキヤト疑ワレ候希クハ當村自治ノ革正ト発達ヲ期スル為最重ナル御監督ト精細ナル御調査ヲ仰キ度滋二謹テ副申仕リ候

敬具

昭和五年七月二十九日
神奈川縣足柄下郡温泉村
底倉三一二番地
猪野　裕　印

神奈川縣知事 山縣治郎殿

上申書
一、事稍舊二属シ候得共震災直後當村二於テ村當局ハ同額ノ腹黒有志ト共謀シ震災ヲ奇貨二悪測ニモ火事場泥棒的二水道敷設ヲ畫策シ全然事實ヲ偽ハリ関係官庁ノ官吏ヲ底倉某旅館二於テ奸策ヲ用井強テ酒色ヲ勧メ阿護〇待ノ限リヲ畫シ遂二美事籠絡手段二成功シ其筋ヨリまんまと三萬圓也ノ補助金ヲセシメ之レニ復興資金ノ四萬圓也ヲ借リ入レ爰二宮ノ下水道ナルモノヲ創設致シタル次矛ニテ断ジテ震災前二水道無之ハ明白ナル事実二有無候而シテ聞ク所二依レハ當時該補助金ハ新起ノ事業二對シ補助セラレタルモノ二無之由シ果シテ然クトセハ本件ノ行為ハ某々ノ犯罪ヲ構成セルモノ、如ク

被察状
例令其レガ一村又ハ一部為ノ利益ノ為メ二スルト否トヲ問ハズ國法ヲ犯シテ尚且ツ不正不純ノ行為二出フルトハ言語二絶々處ニシテ遺憾二不堪候
方今思想問題ハ國難ト迄テ叫バレ政府當局二於テモ百方之レガ改善二苦所研鑽中二アル今日如何二一小村トハ云ヒ村ノ上層二立ツ理事者又ハ有志トシテ此行為ハ吾レ等ノ断シテ黙認スル二忍ビザル所二シテ飽リ迄テ糾弾スルモノ二有之候敢テ監督官庁ノ御勘考ヲ煩ハサント欲スルモノニ有之候
二、近来神奈川縣下二於テモ町村長會二於テ復興低利資金ハ不況ノ現状到底返済不可能二付棒引又延期方運

動中ノ如ク新聞紙上ニモ見受ケラレ候而シテ其連中二伍シテ當村長モ苦言陳述ノ如キコト有之候ハバ虚偽ノ陳述故断乎トシテ御一蹴相領度他町村ハ素ヨリ関知スル所二無之候モ當神奈川縣足柄下郡温泉村特に宮ノ下ハ御了知ノ如ク温泉場二加フル箱根山ノ中央ヲ占メ山紫水明ノ勝地従テ京浜ノ華客四時争テ来遊シ現下ノ大不況モ幸ナル哉左程影響無之小商人勞働者モ各其業二安ンジ随テ比較的物資ニモ恵マレ生活上甚タシキ脅威ヲ感スルモノ鮮少二候是レ懸値ナキ直正直ナル當村ノ実情二有之候不正行為二依ル水道ノ敷設費四萬円(低利資金)ノ返還期ス多分昨年度頃ヨリト被密候ヘ共未タ一回ノ履行無之ノミカ事実ヲ偽ハリ棒引運動ノ拳二出フルトハ真トニ不可

解千万二存候役場側ニテハ一方給水使用者二対シ下層無産階級ノ女世帯ニテ危ク其業ヲ営ムモノ又ハ失業二アルモノヲ筆頭二槍玉的二村條例ヲ楯二執リ滞納使用料一ヶ月分毎二金貳拾銭ノ督促手数料ヲ附加シ三ヶ年乃至

四ヶ年度分ヲトリ纏メ一時二強制手段ヲ以テ高利貸シ以上ノ苛酷ナル徴収方ヲ続々敢行致シ居リ候中産以上ノ滞納ノ回収ハ其タ易々タルヤ論ナキ所候是レヲ以テ是レヲ見レバ事実滞納絶無ト云フヲ得ベク候然シテ斯ク三、四年ノ長期間整理セザリシハ當局職務上怠慢ノ観アルハ勿論ナレドモ或ハ這回ノ棒引泣キ言ノ材料ヲ作ランガ為故意的不整理ナルヤモ知ルメカラズト存候

右ノ次茅二付當村自治ノ革正ヲ期スル為ソ何分宜シク御所理仰キ度此段上申候也
昭和五年七月三十日
神奈川縣足柄下郡温泉村
底倉三一二
猪野　裕 印

内務省地方局長殿

図

図１　箱根町地名〔「みんなの行政地図」（https://minchizu.jp/kanagawa/hakone.html）より転載〕

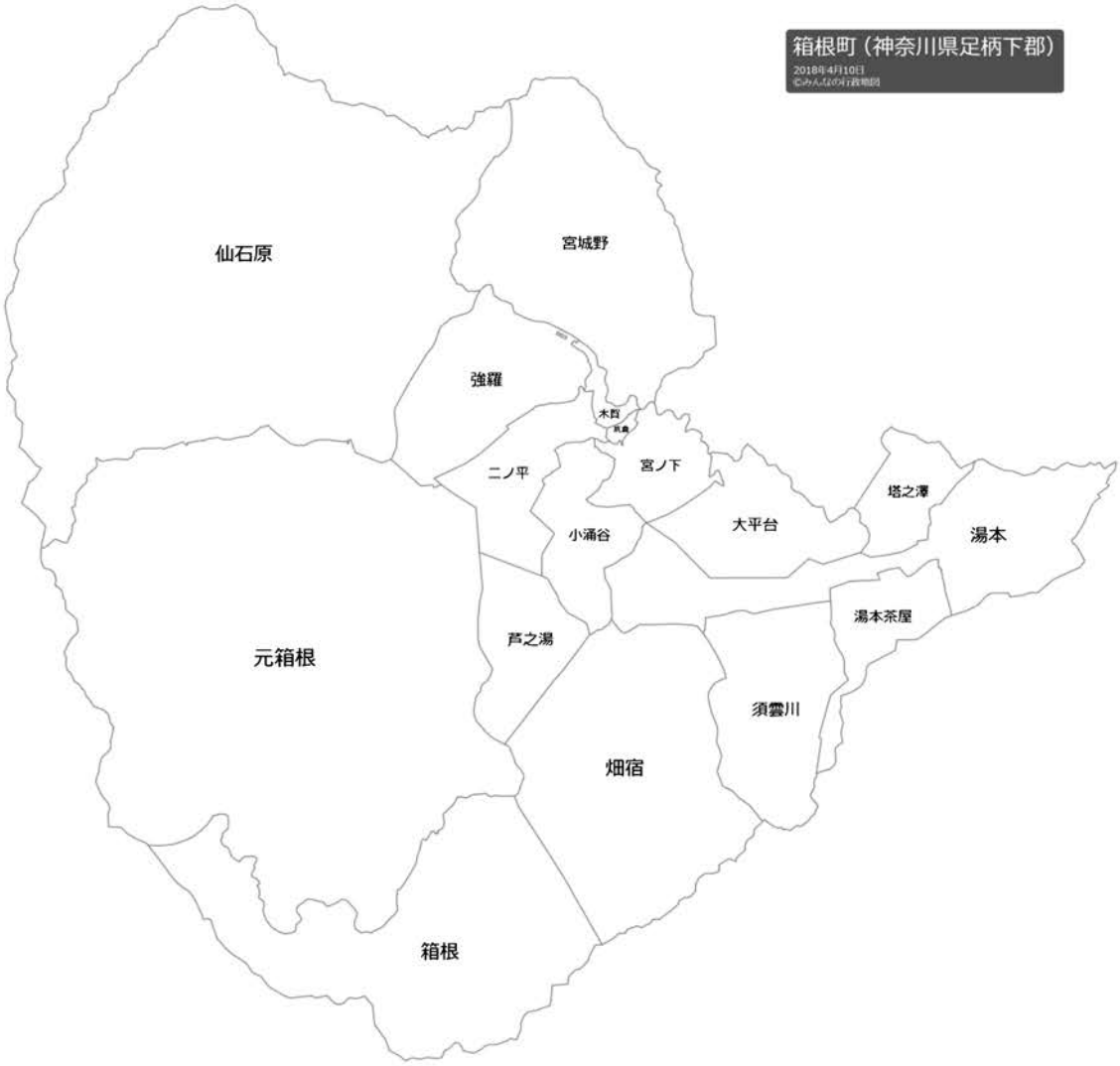


図２　震災地応急測図原図５万分１地形図「小田原０２」（国土地理院所蔵）

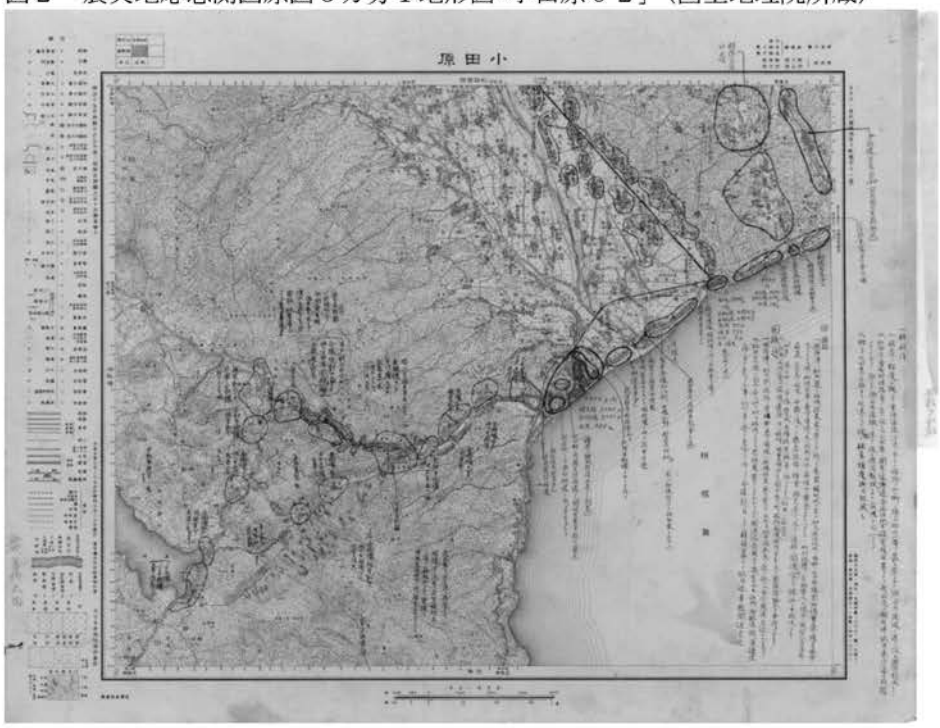


図３　宮ノ下の山崩れの被害（２０２３年７月１０日撮影、箱根登山鉄道株式会社所蔵）

図４　箱根登山鉄道株式会社での聞き取りの様子（２０２３年７月１０日撮影）

図５　富士屋ホテル西洋館の被害（１９２３年撮影、富士屋ホテル株式会社所蔵）

図６道路（塔ノ沢）の被害（２０２３年７月１０日撮影、箱根登山鉄道株式会社所蔵）

図７　宿直日誌表紙　（『箱根温泉史』より転載）

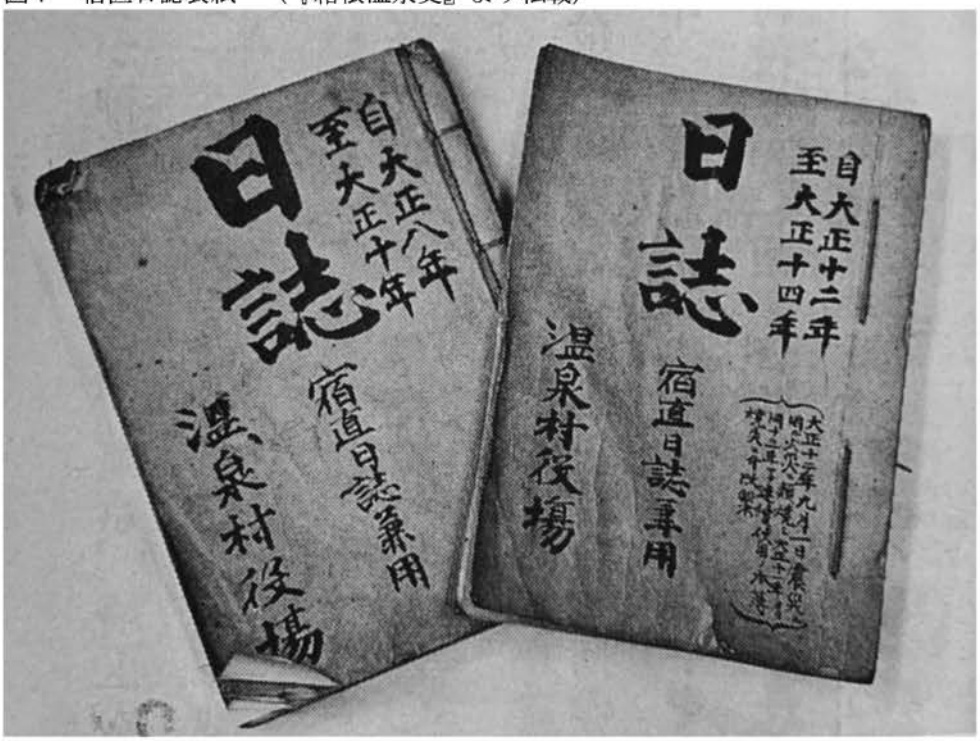


図８　「大正十二年九月一日震火災横死者供養塔」（中央）（２０２３年７月２８日撮影）

図９　供養塔裏にある原田健次の文字（右から２列目）

図１０　原田家の墓碑（健次の部分を拡大）（左から２列目）

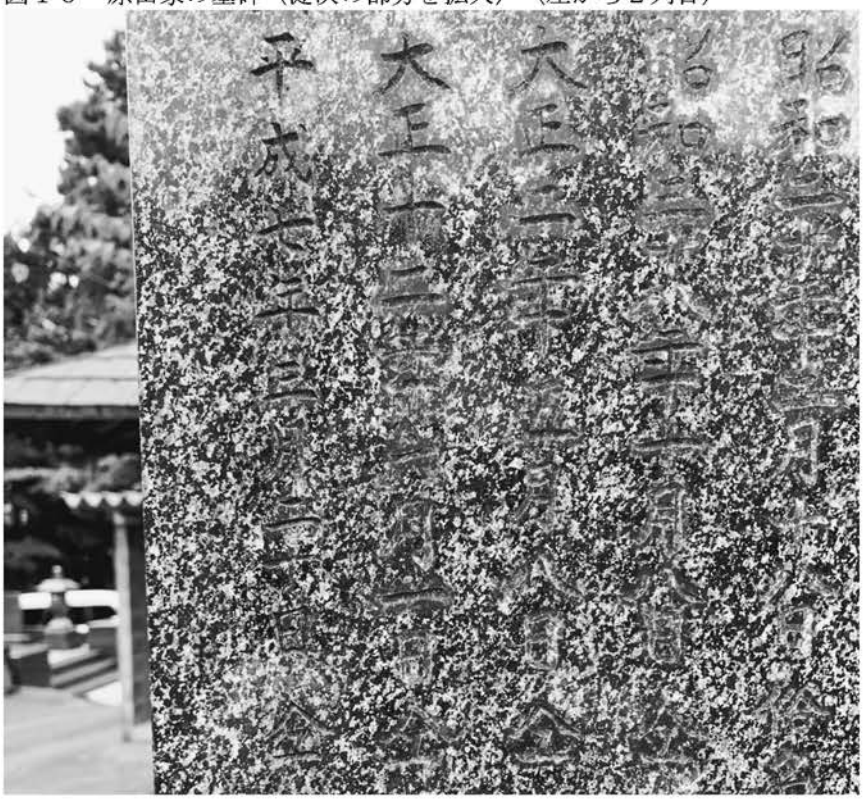


図１１　富士屋ホテルでの聞き取り調査の様子（２０２３年７月２８日撮影）

図１２　倒壊を免れた富士屋ホテル本館（２０２３年７月２８日撮影）

図１３　富士屋ホテル　井戸（２０２３年７月２８日撮影）

図１４　常泉寺での聞き取り調査の様子（２０２３年７月２８日撮影）

図１５　「雑書綴」No2　（２０２３年７月２８日撮影）

優秀賞

現代に伝わった人形芝居

—班目人形芝居の歴史—

（足柄座への聞き取り調査の様子、2022年6月4日撮影）

研究対象地域→神奈川県南足柄市
山北町

神奈川県立足柄高等学校　歴史研究部

3年　秋山七海

はじめに

私がこのテーマを研究しようと思ったきっかけは、祖母の家の仏壇から高祖父である石塚花之助に関する新聞のコピーが出てきたからだ（図１）。その新聞には、花之助が４０年振りに班目（まだらめ）人形芝居を復活させたという記載があった。そして、花之助が復活させた班目人形芝居の歴史や班目人形芝居を受け継ぎ、現在も活動を続ける相模人形芝居足柄座について詳しく知りたいと思い、調べることにした。

そこで私は、班目人形芝居について聞き取り調査を実施した。まず神奈川県南足柄市班目地区に行き、人形芝居について、詳しい人がいないか聞き取りを行った。聞き取りの結果、現在班目人形芝居の伝統を受け継ぐ足柄座の座長を務める武藤瑞乃氏にお話を伺うことができた（図２）。武藤氏からは班目人形芝居に関する資料を貸してもらい、南足柄市郷土資料館で実際に足柄座の活動（人形芝居の実演）を見せてもらうこととなった（表紙、図３）。さらに、班目人形芝居と関わりがあったとされる神奈川県足柄上郡山北町の岸地区でも調査を行った。そして戦後班目人形芝居が衰退し、足柄座へと変化した流れを調べ、まとめることにした（研究対象地の位置については地図を参照）。

第１章は班目人形芝居の歴史、第２章は岸との繋がりについて、第３章は聞き取り調査の結果や足柄座の現在の活動についてそれぞれまとめた。

第１章　班目人形芝居の歴史

（１）江戸時代の班目人形芝居

班目人形芝居は、享保１９年（１７３４）に阿波から来た夫婦が班目村に来たことによって広まったと言われている。夫婦は酒匂川の氾濫にあい、村人九左衛門の父に世話になったと伝えられている。その後、夫婦はお礼として人形芝居を班目村の村民に教えた。その際に人形の首（かしら）を１５、６個残していった。しかし、現在その首の所在については不明となっている。人形芝居は、酒匂川の氾濫により偶然村に伝わったものであった。

また先行研究によれば、文化８年頃（１８１１）に班目村の市川万兵衛が人形芝居に熱心に取り組んだそうだ。班目人形芝居が始まったとされる享保１９年（１７３４）から８０年余りの間で、村人がどのような人形芝居を行ったのかは明らかになっていない。万兵衛は三人遣いの存在を知り、是非三人遣いの指導者が欲しいと考えたという。

班目人形芝居の古い衣裳の肩板に天保２年（１８３１）の銘（資料番号ＡＢＣ―２９）（以下、資料番号は『班目人形芝居調査報告書』の番号に基づいた）が残されている。もしかしたらその時までには三人遣いの指導者が見つかり、班目では三人遣いの人形芝居が行われていたのかもしれない。しかし、証拠となるのは人形の肩板に残された銘だけで確証はない。その後、どのように班目人形芝居が活動を行っていたのかは史料上明らかにできない。

（２）明治時代の班目人形芝居

班目人形芝居の貢献者として、吉田東九郎という指導者の名前が伝えられている。吉田東九郎とは文楽の出身で、明治時代のはじめに八王子にいた人形遣いである。村民の再三にわたるお願いの結果、ついに明治１１年（１８７８）に東九郎が村に来て人形芝居の指導をしたという。指導は厳しいものであったと伝えられ、明治３９年（１９０６）に東九郎が村を去るまでの２８年間続けられたということだ。人形芝居の衣裳の調査では、女形

の衣裳の肩板に「明治三十五年　東九郎」（資料番号ＡＢＣ―１８）と記載があり、明治３５年（１９０４）頃に東九郎が班目人形芝居に深く関わっていたことが分かる。

（３）大正時代以降の班目人形芝居

大正１２年（１９２３）の関東大震災で、それまで班目人形芝居で活動していた公民館は半壊し、土蔵は全壊した。土蔵の中に納めてあった首や衣裳等も損傷してしまった。そのため、班目人形芝居は活動ができなくなったという。昭和８年（１９３３）に福沢村（班目地区を含む）に発電所ができて補助金が出たおかげで、班目人形芝居が復活した。この復活の背景には、石塚花之助をはじめとした村人たちの努力があった。

先程述べた新聞は、調査の過程で『読売新聞読売神奈川』だということが分かった（資料１）。新聞には、「同村に長く伝わる文楽操り人形を４０年振りに復活させ都会に憧れる青年女子に農村芸術の尊さを吹き込み」とあり、花之助が人形芝居を復活させたことが記されている。花之助は当時座長格で、指導の中心人物であり、班目人形芝居の稽古は花之助の家で行っていたようだ。新聞では、花之助のことを「第二の尊徳」と評している。さらに、昭和８年（１９３３）の『東海新報』の記事にも「復活に懸命な修業をつんでいる上郡福澤村班目の中堅三十余名は石塚花之助氏宅に相寄つている」（史料２）と書いてあり、この頃に花之助が復活させたことは大々的に新聞で報じられたようだ。私の祖母（髙橋晴世・花之助の孫）の話によると、祖母が高校生の頃に広い土間のある家から現在の家に建て替えたと語っていた。この広い土間で班目人形芝居の活動が行われていた可能性が高い。その後、先程の『読売新聞読売神奈川』はコピーであり、原本が見つかっていなかったため、祖母の家や仏壇の中などを調査した（図４）。

調査の結果、仏壇の中から花之助の新聞の原本が見つかった。その他に、私の曾祖父である髙橋亀太郎がこの地域の事柄を記事にまとめ発行していた大量の『富士新聞』が見つかった。しかもその中に、花之助に関する記事もあった（図５）。記事には、「関東大震災のため大破したものを当時世話人株にあった故石塚花之助氏らが中心になって大修復したものであった」（史料３）と記されており、人形芝居の衰退は関東大震災の影響が大きかったこのこともこの新聞から裏付けられた。

（４）戦後の班目人形芝居

昭和８年（１９３３）に復活をした班目人形芝居であったが、第二次世界大戦のために中断を強いられてしまった。

戦後に再興が叫ばれたが、人や物が不足する中では思うように行かなかった。それでも、昭和３０年（１９５５）の町村合併の頃には一時、文命座と名付けて細々とした活動を続けていたようだ。この年の４月から工事が行われていた南足柄町中央公民館が１１月に完成し、昭和３１年（１９５６）の中央公民館落成式が行われた。この時こけら落としとして班目人形芝居が行われ、郷土に誇る文化財として喝采を浴びた。上演した人形の首は痛みも酷く、あやつりの糸は切れ衣装もねずみに食われ傷んでいる状況の中で応急処置をし、やっと間に合わせたものだった。そこで町が首の修理を阿波の人形師である大江巳之助氏にお願いし、力を入れようとしたが、既に時期を逸していたのは残念なことであった。

こうして、班目人形芝居は昭和３１年（１９５６）４月１５日に隣町の開成町下島公民館での公演が最後のものになってしまった。演目は「傾城阿波之鳴門」と「壺坂霊験記」の２つで、古老達が、左遣いが欠けたりしながらも立派に演じた。ここで班目人形芝居は

一度中断することとなった。

第２章　班目人形芝居と岸の人形芝居

（１）岸とのつながり

ちょうど花之助が人形芝居を復活させた頃、班目と岸は、人形芝居において切っても切り離せない関係にあった。しかし、先行研究では、岸についてはほとんど触れてはいない。調査を進める中で昭和８年（１９３３）に班目が岸から人形を買い取ったという記録があった。実際に現在残されている班目人形の衣装の中にも、例えば「明治二巳年　岸　三尋木濱印」（資料番号ＡＢ－１６）と所有者の名前がある（図６）。そして、明治元年の書簡が胴（どう）の裏に貼り付けられているものも発見した（資料番号ＡＢ－８）。このことから恐らく江戸時代の頃から岸でも班目と同様に人形芝居が行われていたと考えられる。

（２）山北町岸・向原での聞き取り調査から

足柄座の方から聞き取り調査を行った際に、人形芝居を行っていた元舞台小屋が岸の神社にあり、まだ残っていると聞いた。先行研究にも現在そこには祭礼の時に使う山車をしまっていると書かれていたので、岸の調査を進めることにした。調査を進めるうちに先行研究ではどこの神社に元舞台小屋があるか記載されていなかったが、元舞台小屋は岸の八幡神社にあると分かった。そこで神社の下に住む鈴木収氏に話を伺った（図７）。鈴木氏が小学生の頃までは神社で盛大な芝居が行われていたようだ。全国的に活動をしている役者を八幡神社に呼び、祭りに合わせて芝居を行っていたという。ただし、鈴木氏の覚えていられる限りでは、人形芝居ではなく普通の役者が演じる芝居を行っていたそうだ。現在は山車を元舞台小屋に保管しており、その横には元舞台小屋を象徴する人の出入りが出来る扉があると知った（図８）。

なお、私たちは、岸自治会の自治会長を務める野地泰次氏に自治会に人形芝居に関する資料が残っていないか聞き取りしたが、残念なことに資料は残っていなかった。そこで山北町文化財保護委員長である茂木哲夫氏の紹介で、向原に住む藤原巳鶴氏のお宅には、人形芝居で使ったと思しき古い羽織があると聞いた。しかし、藤原氏へ聞き取り調査をしたが、古い羽織は人形に着せるものではなさそうだと分かった（図９）。羽織には「林子連中」のような文字があるが、人形芝居で使ったものではなく役者が行う地芝居のものだと思われる。このことから人形芝居は向原に広まっていた確証はないと考えた。

（３）岸の人形遣いの子孫

班目人形芝居の衣裳を調査した際、「為次郎」や「相原冨次郎」、「武井松五郎」、「牧田重太郎」、「鈴木庫吉」、「府川尤太郎」など岸の人名が多く残されていることが判明した（表を参照）。そこで、人形芝居に関する調査を岸で２日に分けて行った。１日目は山北町岸の宿（しゅく）地区を中心に調査をしたが、有力な情報は得られなかった。２日目は湯坂（ゆざく）地区を中心に調査をした。こちらも関係ありそうなお宅に戸別訪問をしたが有力な情報は得られなかった。しかし、最後の最後に相原氏のお墓を調査する中で「相原冨次郎」の文字を発見し、さらにお墓の掃除に来ていた冨次郎の子孫の正氏にお話を聞くことができた（図１０）。正氏の話によると冨次郎は明治期前後を生きた人物で８０歳まで生きたという。当時では、かなり長生きだったことが分かった。そして、「自分の先祖が人形芝居をしていたなど知らなくてビックリしました」と語ってくれた。

また、後日、三尋木（みぞろぎ）氏の子孫である福岡初江氏から情報提供を頂いた。その話では、三尋木氏はこの近辺に２～３軒しかなく、明治時代の祖先に「三尋木濱次郎」という人物がいるという。そのため、先述した「三尋木濱印」と記載のあった胴は、おそらく三尋木濱次郎が所持していたものだと考えられる。このように岸では、現在ほとんど人形芝居に関する伝承は残されていなかったが、当時人形芝居を行っていたと思われる人物の子孫が何名かいることが分かった。

第３章　足柄座の歴史

（１）足柄座の発展

一時中断を余儀なくされた班目人形芝居だが、昭和４０年（１９６５）に　桐竹智恵子氏を指導者とし、地元で「ささら踊」を行っていたメンバーで人形の練習を再開し、班目人形芝居を継承する相模人形芝居足柄座の活動が始まった（発足当時は婦人会として活動）。現在、神奈川県内に存在する相模人形芝居は、足柄座を含め５つの座が活動を行っている。南足柄市の足柄座、小田原市の下中座、厚木市の林座・長谷座、平塚市の前鳥座の五座である。

班目人形芝居は男性中心だったが、現在行われている相模人形芝居足柄座は女性中心で活動を行っている。現在活動している足柄座の方から聞いた話では、宇佐見ウメ氏という方がリーダーをしていた。「相模人形芝居「足柄座」　三十年のあゆみ」という資料には、宇佐見氏がささら踊に力を入れていた責任者であったと記されていた。その中で宇佐見氏は幼い頃父親が義太夫をやっていたことを僅かに覚えている程度で人形芝居のことはあまりわからなかったと語っている。そんな宇佐見氏の元に、班目人形芝居に関わる窓口を務める教育委員会の遠藤金治氏から「宇佐見氏が中心となってなんとか人形芝居の復活に取り組んでもらえないだろうか」と強い要請があった。そこで宇佐見氏は「私達が郷土のお役に立つのならば」と受けて立たれた。そしてこの呼びかけを昭和３８年（１９６３）の夏頃に婦人会の有志やささら踊の仲間にした。その時この話に賛同して集まった人達がたくさんいた。

（２）聞き取り調査の概要

ここでは、足柄座の方から聞き取りをした内容を整理していく。２０２２年６月４日に８名の方から話を伺った。以下、座員の方から聞き取った内容をまとめていく（図１１）。

座員の方の話では、資料で読んだ通り、阿波から人形芝居は伝わってきたとのことだ。四国から全国へ人形芝居を伝えていた夫婦が、たまたま班目へとやって来た。その際に夫婦は酒匂川の氾濫にあったが、村の百姓に助けられた。そのお礼として人形芝居を披露した。そして夫婦の奥さんが病気になってしまい、持っていた人形を班目に託したという。班目人形芝居の起源について、先行研究に記してあることよりも詳しい内容が伝わっていることが分かった。

（３）人形芝居の体験

次に実際に人形をどのように動かして芝居を行っているのか聞き取り調査からまとめていく。

人形を使うとき中心になる人を「主遣い（おもづかい）」という。主遣いは人形の背中から左手を差し込み、人形の首の部分につながる「心串（こころぐし）」という棒を握っ

て支える。人形は衣裳等を合わせると幼児くらいの重さがある。それを左腕一つで支え、心串の「チョイ」や「小ザル」を左手の指で引き、首の色々な表情を作る。そして使い手の右手で人形の右手を使う。また主遣いは足遣いの姿勢が楽なように「舞台下駄」という特殊な下駄をはく。「左遣い」は右手で人形の左手を使う。左手は自由になり、その人形の使う小道具を取り出すが、普通は目立たないようにしている。「足遣い」は、後ろから中腰に構え、人形のかかとを持って足の運びを操る。女の人形には足がないので、衣裳の裾の内側にある「ふき」をはさみ、いかにも歩いているかのように見せる。三味線に合わせての足踏みも足遣いの役目となっている。

足柄座の方から人形の使い方について教わった際の私の体験談も記しておく（図１２）。人形はかなり重く、持ち上げるのがとても大変だった。左手一つで支え、指や表情を変えるので難しかった。舞台下駄は厚さが１５センチほどあり、下駄を履いたまま三人で息を合わせるのでとても苦戦した。足柄座の方たちはスラスラと歩いていたので、沢山の稽古を重ねたのだと思った。演目の内容を理解し、語り手の話に動きや顔の表情を合わせるのは、とても難しいと感じた。

（４）足柄座の現状

現在足柄座の座員は１７人で、活動は土曜日に行われている。足柄座のある方が、「今一番の課題は、後継者がいないこと」と語ってくれた。「若い座員がいない」というのが、課題であるが、こうした活動に興味を持ってくれる方もいる。課題もあるが、「昔からある活動なので大事にしている。」と話してくれた。

おわりに

今回の研究では、江戸時代から続く班目人形芝居の歴史を解き明かすことができた。阿波から来た夫婦によって広まり、明治に吉田東九郎の指導により発展を遂げた。そうして地域で伝承されてきた班目人形芝居だったが、関東大震災の発生により活動が困難になってしまった。だが、新たに発見した新聞の記事などによれば、私の高祖父である石塚花之助ら村人の尽力で復活を遂げることとなった。その後は、第二次世界大戦の中で活動が行えない時期もあったが、戦後も地域で活動が続いていたものの、昭和３１年（１９５６）を最後に一時中断することとなった。

資料を読んで行く中で班目の対岸にある岸とも深い繋がりがあったことが分かった。岸についての資料はほとんど無いが、八幡神社に元舞台小屋があることも確認できた。さらに、現在残る班目人形芝居の衣装を分析した結果、その中に岸で使われていた人形が多く伝来していることも分かった。また、人形の衣装に記された名前の方の子孫が現在も岸地区に何名かいられることを明らかにした。しかし、聞き取り調査を行う中で、岸では人形芝居の文化は今では全く伝わっていないということを肌で感じた。いくら地域で長い間伝わってきた文化とはいえ、一旦文化が途絶えてしまうと、その文化は人びとの記憶からは全く消えてしまうということが分かった。

班目人形芝居も歴史上その活動を中断することがしばしばあった。しかし、先人たちはその困難を乗り越え、活動を現在まで伝えてきた。足柄座も後継者不足などの問題はあるが、私はそうした足柄座を始めとする人形芝居の活動をより多くの人に知ってもらえるよう、その歴史を伝え、今後も研究を続けていきたい。

参考文献他

参考文献

・『郷土資料館調査報告書第三集　相模人形芝居　足柄座』（南足柄市郷土資料館、１９９３年）
・『班目人形芝居調査報告書　平成15年度文化庁ふるさと文化再興事業』（相模人形芝居　足柄座、２００４年）
・「足柄座　座員について」（武藤瑞乃氏保管資料）
・市川鉐雄「班目人形芝居」（『史談あしがら』第１集、１９６２年）
・市川鉐雄「県指定　無形民俗文化財　相模人形芝居「足柄座」三十年のあゆみ」（『史談あしがら』第３０集、１９９２年）
・永田衛吉『神奈川県民俗芸能誌』（錦正社、１９８７年）
・神田由築『江戸の浄瑠璃文化』（山川出版社、２００９年）
・『相模人形芝居　足柄座　５０周年記念誌』（足柄座、２０１５年）
・「足柄座公演記録」（平成２７年７月１４日～令和５年３月４日）
・『かながわの民俗芸能』第８２号（神奈川県民俗芸能保存協会、２０１８年）

調査年月日

２０２２年	５月２４日	班目聞き取り調査
	６月　４日	足柄座聞き取り調査
	８月２５日	岸聞き取り調査
２０２３年	３月３０日	髙橋家調査
	６月　３日	向原調査
	７月　５日	足柄座再調査
	７月　７日	岸調査
	７月２７日	岸再調査

調査協力

武藤瑞乃氏、玉野美津子氏、林征子氏、柏木景子氏、井上恵美子氏、鈴木宏江氏、加藤千世子氏、杉田喜代子氏、柏木勤氏（以上足柄座座員）、三上芳範氏、鈴木収氏、野地泰次氏、茂木哲夫氏、藤原泉氏、相原正氏、福岡初江氏

顧問

桐生海正先生
太宰雅翔先生

史料

【史料１】昭和１０年７月２日「村の更生に捧ぐ　石塚翁苦闘の三十年　福澤村に〝第二の尊徳〟」〔『読売新聞神奈川読売』（第20975号Ａ）、髙橋晴世氏所蔵〕。なお、新聞の同定にあたっては、相模人形芝居の研究者である三上芳範氏の協力を得た。

上郡から第二の二宮尊徳翁が現れ村民から近く表彰されると云う麗しの話がある―話の主は上郡福澤村斑目農石塚花之助（五六）さんで花之助さんは廿才の青年時代から遊び一つやらず卅年間、獣々として村の爲めに盡くしてその間村の公共團體事業には何時も第一線に立ち殆ど無報酬で働き村の福利増進には献身

的になつて人々を指導して来たものでその功績の主なるものは震災當時田畑の荒廃地復旧が第一であると他町村に先さんじて復興組なる曾を組織し農村更生に盡し更に現在の足柄平野田畑の命とも頼む同村大口を流れる文命用水は実に翁等が提唱して建設したもので他に同村に永く傳はる文楽操り人形を四十年ぶりで復活させ都曾に憧れる青年女子に農村藝術の尊さを吹き込み農事にいそします等、村の為に盡した功績は枚挙にいとまない程で今回同斑（ママ）村目部落で花之助さんの功績に報いるべく表彰することになつたので更に翁の功績は実に尊徳翁に優るとも劣るものではないからと県當局にも表彰方の運動を起すことになつた【寫眞は石塚翁】

【史料２】昭和８年４月２９日「農村更生に操り人形　福澤村斑目で企図」（『班目人形芝居調査報告書』掲載の『東海新報』の新聞記事を翻刻）

農村更生に操り人形　福澤村班目で企圓　今の世に珍しい大阪派正道　福澤神社祭典に初興行都と云はずに更生の意気と熱に興國日本の面目躍如たるのと時や良しと三百年も前の時代の寵児だつた純粋の傳統を吸む大阪操り人形の復活を企圖し農村更生の第一歩は先づこの人形からだと全村擧げて熱心なる修業をつんでいるという愉快な話がある

この操り人形の踊りと云ふのは一ツの裸形（身長三尺余り）に衣装とかつらに大道具小道具等凡ふ歌舞伎芝居の七ツ道具を飾りつけて浄瑠璃と併せ一ツの人形に三人が一組となつて操り踊るものであつて現在日本にはこの種正道は全くなくこれを操る人形師も殆んど見へずその貴重さは日本歌舞伎と並び併せて國に称賛され今の世に此の道を知れるものは身命を惜まずこれにまつるは文献やことの起りを探究している有様だ

復活に懸命な修業をつんでいる上郡福澤村班目の中堅三十余名は石塚花之助氏宅に相寄つているがそれならば何故に期程までに貴重となるものがこんな山間の地に埋もれてあつたか古老の語るところに依ると只今の大阪道頓堀にある文楽座の生れた當時歌舞伎の大家だつた吉田文三郎、西川伊三郎の兩師が藝道拓開のために新たに編み出したものが即ちこの操り人形で當時は非常に流行つたものだつたが交通不便のその頃江戸までは傳はらなかつたので新藝道普及宣傳に同派のものが東海道の宿場（その頃の東海道は足柄峠越へ）を巡行しつつ相州まで來つたとき大洪水が禍ひしたので酒匂川沿岸に大氾濫を来たしたため數ヶ年交通まつたく杜絶していた、その間人形師は他界してしまひ其のまま此拠に残され展け來る文化に光りを失つておよそ百五十年程前から五十余個の人形のお面はむしはまばれるままになつていたものだと同村では先づるお面その他の整備費、新衣装代等一千余圓醵金にしてさかんに修業の傍ら繕ひを續けていたがこのほど全く寝耳に水の便り、今東都に於いて新道の大家であり又大阪操り人形派では唯一の権威者である渋谷代々木新町八四番地に住む吉田勘十郎師あるを聞き一ヶ月程前から招聘して一切の指導を仰ぎ連日連夜の精進を續けている吉田勘十郎師は今年六十九歳だが壮者をもしのぐ健やかなで再び世に出るこの人形の正道傳授に吾が子の育むを喜び見る如く熱心に手をとつているが師は又水戸志士後裔の名門だ

目下振り付け中のものは手初めとあつて千代萩、太功記、辨慶上使、朝顔日記、播州皿屋敷、安達ケ原、箱根周りイザリの仇討等で最初の公開は來たる五月の五日文命堤上に祀られる福澤神社水神様の祭典に余興として賑やかにデビューなしこれを契機に各地を巡行し純國粋藝道の唱道、遊蕩皮薄、文弱に流れる現今青年の醉心に大鐘乱打する計画であるが五日當日は西湘唯一の農具市だけに大喝采を博するであらを尚上演に際しては吉田勘十郎の斡旋で予ねてよりこの人形に多大の研究と興味を寄せているアメリカ人に數巻のフイルムを撮影させて米本團に宣傳するほか大阪文楽座よりも數師が観覧する筈

【史料３】昭和２８年２月２５日「郷土藝術の息吹き人形文楽　復興氣分あがる福澤村秘蔵人形は天下の名作？」（『富士新聞』、髙橋晴世氏所蔵）

占てんげい術の粋といわれる人形げい術も、今から凡そ九十年前の文久時代が隆盛の絶頂て明治大正と大衆に随分長く楽しまれたもので、草深い山間地に在つても同好者て何々連れといふ様な一座を組しきして相当出興行まてしたものも少なくなく県下著名なものに足柄上郡福沢の文楽、足柄下郡へ行つて下府中、愛甲郡むつ合等が代表的なものとされていた。
下府中文楽は今尚ほ、けん在てこゝ、かしこと招ぜられては古てんげい術の粋を放射し大衆にだうもくされている。関東地方の文楽が段々勢が衰へたのて関西地方ては大阪に新鮮味を、おり込んだ乙女文楽なるものを組しきて全国的に活躍はしているが単にせき日のおもかげを止むる程度のものて、しかも乙女文楽は人形を一人て操作するのてあるが古来の文楽は一つの人形を三人て操つるところに一そうのげい術があるともいわれている。
けんの文化保護委員会ても係る郷土げい術を徒らにうずもらして置くのは勿体ないとして何とか復興のために力をそゝぎ愛甲郡むつ合の文楽を文化財として保護する様文部当局まて、申請している一方上郡福沢村の人形は、関東大震災のため大破したのを当時世話人株に在つた故石塚花之助氏等が中心になつて大修復したのてあつたが其の後あまり振わず時の流れと共に貴重な人形も蝕れ今ては全く完全な物は一個もないまてのみすぼらしい状態にまてちよう落し年一回虫乾のために日の眼を見るといふ有様て当時遣い手の名人形師とうたわれた、石塚か造氏、土屋沢次郎氏、露木泰造氏等が、今尚ほ健在てあるのてぜひ今一度福沢の誇る郷土げい術を世に出したいものだと識者間の関心も漸くわき上りつゝある様て、津田村長としても斯うした文化財を徒らに葬りさつてしまうことなく農村完全娯楽のため復興さしたい意向にもある様て、こゝ、かしこと、うずもれんとする古てんげい術に息吹が感じられるに至つた。
然し福沢に保存されている人形は実に素晴らしいけつ物といわれかつて大阪文楽から譲渡万を再度申込まれた事まてあると云ふが、これを修復するには莫大な入費を要すのて部落としても何んとか財源ねん出の途を講じ出したいものだと話題になつている。

図

図１　高祖父・石塚花之助の新聞のコピー

村の更生に捧ぐ

石塚翁苦闘の三十年

福澤村に"第二の尊德"

畑地一段歩めちやくく

酒匂川の堰水から

津久井織物査定は八王子に

小田原魚市場

動盪斷行？

注目される山田氏の去就

図２　武藤氏からの聞き取り（２０２２年５月２４日　撮影）

図３　表紙・足柄座での体験（２０２２年６月４日　撮影）

図４　髙橋家調査の様子（２０２３年３月３０日　撮影）

図５　富士新聞の石塚花之助の記事（２０２３年３月３０日　撮影）

図６　班目人形芝居の衣装

図７　鈴木氏から聞き取りを行う様子（２０２２年８月２５日　撮影）

図８　元舞台小屋（２０２２年８月２５日　撮影）

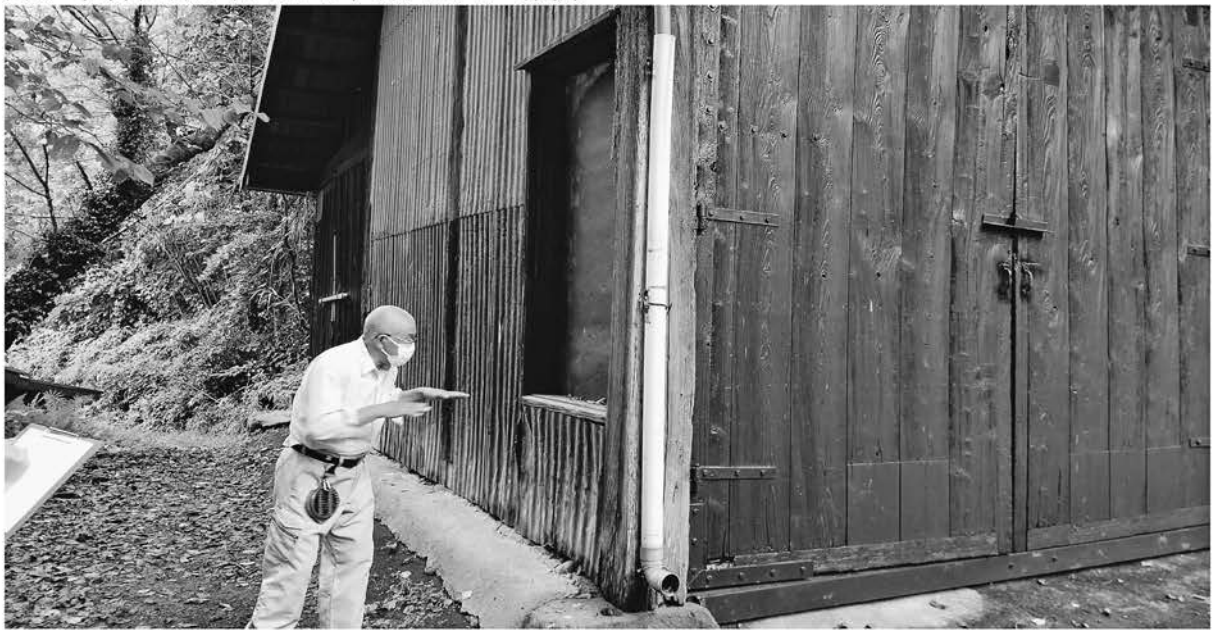


図９藤原氏所蔵の古い羽織　（２０２３年６月３日　撮影）

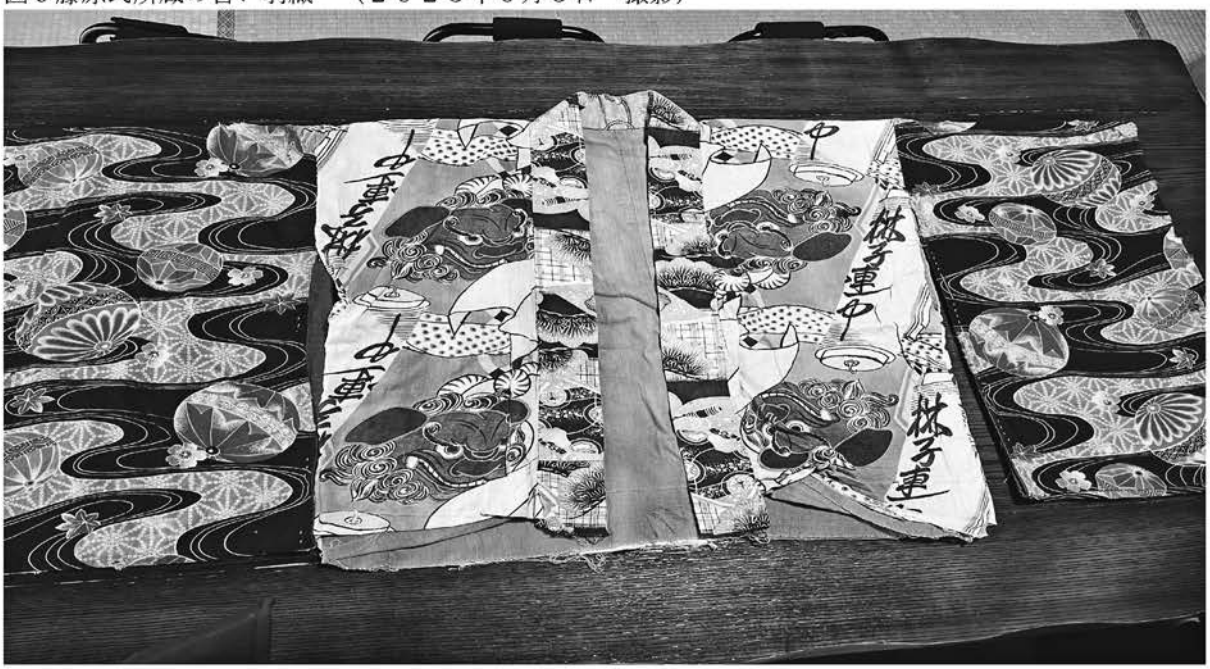


図１０　相原冨次郎の子孫である相原正氏への聞き取りの様子（２０２３年７月２７日　撮影）

図１１　足柄座員への聞き取りの様子（２０２２年６月４日　撮影）

図１２　足柄座での体験の様子

表

表　班目人形芝居に伝わる岸の人名について

AB-10	肩板	岸　湯坂	為次郎	七寸五分
	胴	川村　岸　湯坂	為次郎	
AB-16	胴	岸　三尋木濱印		
AB-19	胴	（前）冨次郎	相原氏	
		（後）湯坂	武井松五郎	
ABC-33	肩板	明治十二年 四月十日	牧田重太郎	
		（表）色男	當年十六年七ヶ月	岸湯坂　芝居
		（裏）鈴木庫吉	岸	
ABC-39	肩板	男物	岸　宿 七寸五分	府川尤太郎

地図

地図　研究対象地（Google マップに加筆）

優秀賞

地下軍需工場建設と本土決戦準備

～東海軍管区の本土決戦構想を探る～

岐阜県立関高等学校地域研究部

杉浦良太朗　鈴木遥斗　梅村颯太朗　酒向達也

川辺地下工場の遠景（2022.12）

目　次

はじめに

1. 飛行場と飛行機生産
2. 川辺地下工場
3. 事業報告書と中国人労働者
4. 地下工場とは何であったか
5. 本土決戦と地下工場

まとめにかえて

はじめに

我々は、２０２１年２月、学校付近に建設された秘匿飛行場に関する研究を開始した。秘匿飛行場とは、第２次大戦末期、本土航空作戦のために建設された施設をさす。資料や遺跡の調査、聞き取りによって、周辺に多数の地下壕が構築され物資が秘匿されていたこと、大勢の兵士や住民が動員されたことを確認できた（注１）。

軍は、特攻機１万機のうち１割を突入させれば、米艦船の３分の１を漸減できると見積もり、１９４５年１０月から特攻作戦を開始する予定であった。作戦には相当数の飛行機が必要となる。自治体史には、寺院や公共施設、地下壕に、飛行機部品が秘匿されていたと記録されているし、聞き取りによって、飛行場付近に、飛行機を格納する掩体があったことも判明した（注２）。飛行機や部品はいったいどこから運ばれたのか。空襲の最中、飛行機はどのように生産されたのか。飛行機生産を次のテーマとすることにした。

１　飛行場と飛行機生産

飛行場と飛行機生産を考える上で、新たに得た情報を紹介する。

インパール作戦の最高指揮官、河辺正三は、１９４５年４月７日、特攻作戦を指揮する航空総軍司令官に就任した。着任まもない５月４日、河辺が関飛行場を訪れたことを、本人自身が日記に書き記している（注３）。日記には、所沢から関まで飛行機で向かったこと、滑走路整備や工場の分散・疎開が不十分であることが記されている。

視察目的が、秘匿飛行場の建設・運用、及び工場の分散・疎開の進捗の確認にあったことは明らかであり、文面からは工事の遅れに対する危機感が伝わってくる。１９４４年７月のサイパン島陥落後、空襲に備え工場の分散・疎開が本格化した。関飛行場近辺でも、教室が作業場に、紡績工場が分工場に転用された。我々の母校、関高校の前身、武儀高等女学校の生徒も、川崎分工場に動員されている（注４）。

２　川辺地下工場

地図（図版１）を見ると、国鉄中川辺駅からほど近い丘陵に築かれた三菱第五製作所の疎開工場が、関飛行場からもっとも近い地下工場であることがわかる。川辺・坂祝工場ともに、鉄道利用が可能な利便性を備えた場所を選んで建設したのであろう。

１９４４年１２月、三菱第五製作所の疎開工場として川辺地下工場が、同じく第四製作所の疎開工場として可児久々利の地下工場建設が始まった。久々利工場は総延長７キロで、国内最大級の規模であった（注５）。

地図（図版２）は川辺地下工場と関連施設の位置関係図である。駅からは約２キロ。ゆくゆくは国鉄引き込み線を敷設する予定であった。建設現場は幕引山と呼ばれる南北に延びる丘陵の山腹で計１１本掘削された地下壕のうち３本が今も開口する。当初は、川辺から美濃加茂に広がる丘陵一帯に地下工場が建設される予定であったが、工事難航のため規模を縮小したという（注６）。

北側４本の地下壕に関しては、地下壕研究会による測量が行われている。北から全長２５９ｍ、１９５ｍ（写真１）、２２２ｍ、２３０ｍほどの規模を有する。掘削で掘り出された土砂の山が現在も残されており、土手のようにそのまま山すそに積み置かれ総延長３００ｍに達する（写真２）。地下壕内は崩落が激しく立ち入り危険なので、ドローン撮影

を試みた。飛島組によれば、奥行２７０ｍの地下壕を掘削する予定だったという。入口近くには横に連結するトンネルを掘りかけた形跡がみられる。地下壕を横につなげて格子状にすれば、総延長４キロ規模の工場が完成した可能性がある。掘削には、発破や削岩機もつかわれたが大半は人力掘削で、北側５本は中国人、南側６本は朝鮮人が掘ったと伝わる。三菱側責任者、河村三千三は、戦後、次のように回想している（注７）。

・正式名称は護国第６１２工場。建設本部は川辺町役場。工事は飛島組が請け負った。
・工事が進むと内部の整備が行われ名古屋から機械が持ち込まれた。突貫工事であった。
・坑道からの赤黒い土砂が目立ったせいか、１９４５年７月１４日、米軍機６機の機銃掃射を受けた。以後、土砂を隠すため、伐採した樹木でおおうようにした。
・工事には、多くの朝鮮人・中国人が使役され、ゆくゆくは総員１５００名程度で、飛行機部品を増産する予定だったが、工事完成前に終戦を迎えた。

３　事業所報告書と中国人労働者

この現場では、朝鮮人のほか、１９４５年５月、飛島組が御岳発電所工事現場から連行した中国人２７０名が作業に従事した。我々は、終戦直後に飛島組が作成した事業所報告書のコピーを入手し検討した（注８）。報告書には中国人２７０名の全氏名・出身地が記録されている。うち４名が病気や事故により死亡し診断書も掲載されている。

なぜこのような報告書が作成されたのか。その謎ときは、すでにＮＨＫによって行われていた。戦犯裁判を恐れた外務省は、中国人を使役した全国１３５カ所の事業所に報告書提出を義務付けた。我々が入手した報告書はそのうちのひとつのコピーであった。さらに外務省は、調査員を派遣し現地報告をまとめ、全体の総括報告書も作成している。労働者虐待がなかったことを証拠づけるための報告書であったが、冷戦の最中、戦争裁判が打ち切られたため、報告書の存在はいつしか忘れ去られていった（注９）。ＮＨＫはこの顛末を探り１９９３年にテレビで報道、さらに出版物として刊行した（注１０）。

１９４２年、国内の労働力不足を補うため、日本政府は「華人労務者内地移送に関する件」を閣議決定し、結果、４万人近い中国人が日本に動員された。中国人は、表向き、自主的に募集に応じたことになっているが、実態はかなり異なる。外務省報告書や現地調査報告にも、捕虜や囚人、病人のほか、半強制的に供出されたケースもあったと記録されている（注１１）。飛島組による川辺事業所報告書には「宿舎に入浴施設を設けた」「栄養に配慮した」「慰安施設はなかった」との記載があるが、実態はどうだったのだろうか。終戦から７８年。それを明らかにすることは容易ではないが、自治体史や聞き取りにより探ってみた。以下はその記録である。

・後ろ手を縛られ数珠つなぎになった中国人が川に水浴に向かう姿を見かけた（注１２）。
・中国人は、現場近くのバラック小屋で寝起きしていた。食糧事情は悪く代用食が主食だった。野草や木の皮も食べていた。就業時間は１２時間であった（注１３）。
・当時、ここが慰安所だと言われる施設があり「日本人や朝鮮人が利用していた、中国人は利用していない」という話を聞いた（注１４）。

いずれも自治体史の記載や当時を知る高齢者からの聞き取りである。事業報告書の記載と実態はかなり異なる。訴追逃れのためのデータ捏造に関しては、外務省嘱託調査員の証言もある（注１５）。

中国人は終戦後も１２月まで川辺に滞在し、佐世保経由で帰国した。その間に彼らのうち４名が死亡した。事業所報告書には３名が病死、１名がトラックから転落して頭を強打して亡くなったと記載されている。生きて祖国に帰れなかった４名の殉難碑が、工事現場近くにあると聞き、現地を訪ねた。遺骸は火葬にされ町内に安置されていたが、１２月、他の中国人が帰国する際、持ち帰ったと聞く（注１６）。１９５６年、木柱慰霊碑が建立され、町内の禅原寺の住職が供養を続けてきた。１９７４年、慰霊碑は石碑に作り直され現在にいたっている（写真３）。

終戦から５３年目の１９９８年、かつて工事現場で働いていた中国人２名が、川辺の地を訪れた。これはその時撮影された写真である（写真４）。右が蒼欣晝さん、訪問当時７２歳。左が張福財さん、同じく当時７４歳。当時川辺の国民学校６年生だった鈴木佳子さんが殉難碑を案内し、３名が病死、１名が事故死であった記録されていると通訳を通じて説明すると、蒼さんは「事故死ではない」ときっぱりと断言したという（注１７）。鈴木さんによれば、詳しい事情を聞く時間がなかったとのことである。事故でなければ何が起きたのか。真相は不明である（注１８）。

中国人にとって川辺での生活はずいぶん苦しいものだったと想像されるが、心温まる話もある。当時、女子児童は、宿舎近くに行ってはいけないと言われていたが、わんぱく盛りの男子たちは、中国人に遊んでもらったそうである。

当時、国民学校６年生であった加藤栄樹さんもそのひとりである。終戦後、加藤さんは友人とともに、労働から解放された中国人を訪ね、マージャンを囲む若者の膝にだっこしてもらい、コッペパンをもらって食べた。家族に話すと、もらいっぱなしは良くないということで、後日、干し柿とサツマイモを持参した。中国人の平均年齢は２５歳。故郷の家族を思い出し、日本の子どもと遊んだのだろうか。加藤さんは、「無理やり動員され、苦労した人たちなのに、憎い敵であるはずの日本人の子どもと遊んでくれた。今でもコッペパンをみると思い出す」と語ってくださった（注１９）。

地下工場建設は終戦後放棄され、運び込まれた機械は、山川橋から飛騨川に捨てられたという（注２０）。三菱社員の回想録には、終戦前夜、宿舎や現場を抜け出した朝鮮人・中国人が神社の境内に集まり、大声で話し合っていたとの記載がある。不思議なことに彼らは日本の敗戦をすでに知っていて、善後策を相談していたと伝えられる（注２１）。

４　地下工場とは何であったか

海外の人々を動員してまで作ろうとした地下工場とは、いったい何であったか。考えてみたい。名古屋周辺は日本有数の工業地帯であり、航空関連施設の一大集積地であった。戦局悪化の中、三菱・川崎ともに、生産拠点を分散・疎開させた。中でも、岐阜県東濃地域から愛知県犬山にかけては、日本屈指の地下工場密集地帯である。岐阜県の地下工場のほとんどが、この地域に集中する（図版３）。

山間地であり空襲から逃れやすいこと、駅に近く輸送に適していること、名古屋や飛行場（関・各務原）に近いことなどが、主な理由であったと考えられる。地下工場や作業場で生産された部品は体育館や講堂で組み立てられ、飛行場へと運ばれる手筈だった（注２２）。部品生産から組立まで、各地の飛行場付近で一貫生産を行い、日本各地から特攻機を縦横無尽に出撃させ執拗に攻撃する。そのような作戦を陸軍は構想し、実際に、秘匿飛

行場や地下工場を次々と建設した（注２３）。東濃・犬山の地下工場は、東海軍管区にとって、特攻作戦の要と言える存在であった。

５　本土決戦と地下工場

本土決戦に備えた特攻作戦は、１９４５年１０月から始まる予定であったが、空襲が続く中、どの程度の実効性があったか疑問が残る。東濃・犬山の地下工場群は終戦まで未完成だった。海外の労働力に依存しなければ工事が進まない中、一方で数千人の特攻機パイロットを育成するなど、果たして可能だったのだろうか。岐阜県内では、大垣や各務原の飛行場も空襲で壊滅した（注２４）。７月には、関飛行場近くの民家に焼夷弾が落とされているし（注２５）、川辺工場も機銃掃射を受けた（注２６）。戦争が続けば飛行場や工場も次々破壊されたと考えられる。以上を総合的に考え、特攻作戦が実効性を発揮する可能性は低かったと推測する。

軍の一部には、原爆投下後も戦争を続行する構想があった。上陸した敵軍を殲滅し、条件付き講和をめざす戦略である。敗れた場合でも、長野県の松代大本営建設が物語っているように、山岳陣地を拠点に徹底抗戦する計画だった。一方の米国は、九州と関東の２カ所で上陸作戦を行う準備を進めていた。それでも日本が降伏しない場合に備え、伊勢湾を含む５カ所での上陸作戦を予定していた（注２７）。

当然、日本陸軍も陣地戦の準備を進めていた。『名古屋陸軍造兵廠史』や『各務原市資料報告書第４０号』によれば、多治見と美濃加茂を結ぶラインを、東海軍管区の最終防衛線とする構想があったとのことである（注２８）。この防衛線は、東濃・犬山の地下工場群のほぼ真ん中を貫いている。地下工場の陣地への転用が計画されていたのであり、東海軍管区司令官の岡田資中将の命を受けた名古屋陸軍造兵廠長田村宣武中将は、小銃・機関銃・銃弾等の製造のため、多治見以北の中央線沿線に、造兵廠工場をすみやかに疎開させるよう指示を出している（注２９）。造兵廠工場の疎開先は、土岐、大井、岩村、長島、山岡、明智、阿木など、いずれも木曽川、中央線からさかのぼった山間地である。下流方面では、八百津、御嵩、川辺、上麻生、廿屋において、疎開の準備が始まっている。一方、飛行機地下工場は、川辺、八百津、久々利、平牧、帷子、善師野、楽田、瑞浪に設営されたのであり、東濃西部から犬山にかけて分布域を形成している。試しに、飛行機地下工場群と造兵廠疎開工場群をそれぞれマッピングしてみると（地図４）、後者は前者の後衛に位置し、前掲の通り、前者の真ん中あたりを最終防衛線が貫いていることがよくわかる。

以上、『名古屋陸軍造兵廠史』の記載や決号作戦の示達内容を勘案すると、次のような作戦計画が浮かび上がってくる。

①地下工場や秘匿飛行場の建設。飛行機増産とパイロット育成。

②米輸送船団への全面特攻。

③上陸軍との一大決戦。山岳陣地戦。

前述の通り、米国側は、関東上陸戦で日本が降伏しない場合には、さらに５カ所での上陸戦を展開する予定であった（注３０）。そのうちひとつが伊勢湾沿岸であった。伊勢湾に上陸した米軍が濃尾平野主要地を次々と占領した場合、美濃太田・多治見間のラインを最終防衛線とする構想があったことは、すでに述べているが、なぜこの地に最終防衛線が設定されたのか。ここで考えてみたい。

それはやはり、堅固な地下陣地への転用が可能な地下工場群があったからではないか。防衛線の東南端（多治見）の背後には釜戸地下工場が、同じく中央部（可児）の背後には久々利地下工場が、そして西北端（美濃加茂）の背後には川辺地下工場が立地する。その中でも、ほぼ完成した久々利地下壕の総延長は７キロに達し、全国的に見ても最大規模を有する。未完成に終わった川辺地下壕の総延長は４キロ程度であったと推測し得る。このふたつの地下壕を足すとその総延長は１１キロであり、松代大本営の総延長（１０キロ）に匹敵する。これらの飛行機工場群はいずれも三菱に所属するものである。当初から、地下陣地群への転用を考慮に入れた構想の下、建設された可能性はないだろうか。

中央線沿いに位置する東濃地域は、濃尾平野から長野方面に向かうルート上に位置する。東海地域を占領した米軍が、長野の松代大本営をめざして陸路を進軍する場合、このルートを進むことは想像に難くない。決定的な証拠となる資料には恵まれていないが、松代大本営設置の閣議決定（１９４４年７月）と同時に、東濃の地下工場群の地下陣地群への転用が構想された可能性は十分あると考える。さらにいえば、地下陣地群・兵器工場群の連なりの背後にあたる長野県宮田村に、１９４５年３月、秘密兵器開発で知られる陸軍登戸研究所が疎開してきたことも、一連の作戦の一環であったかもしれない（注３１）。防衛省戦史室のデータベースその他の資料の中に、このあたりの経緯を示唆する資料がないか、もう一度精査してみようと思う。

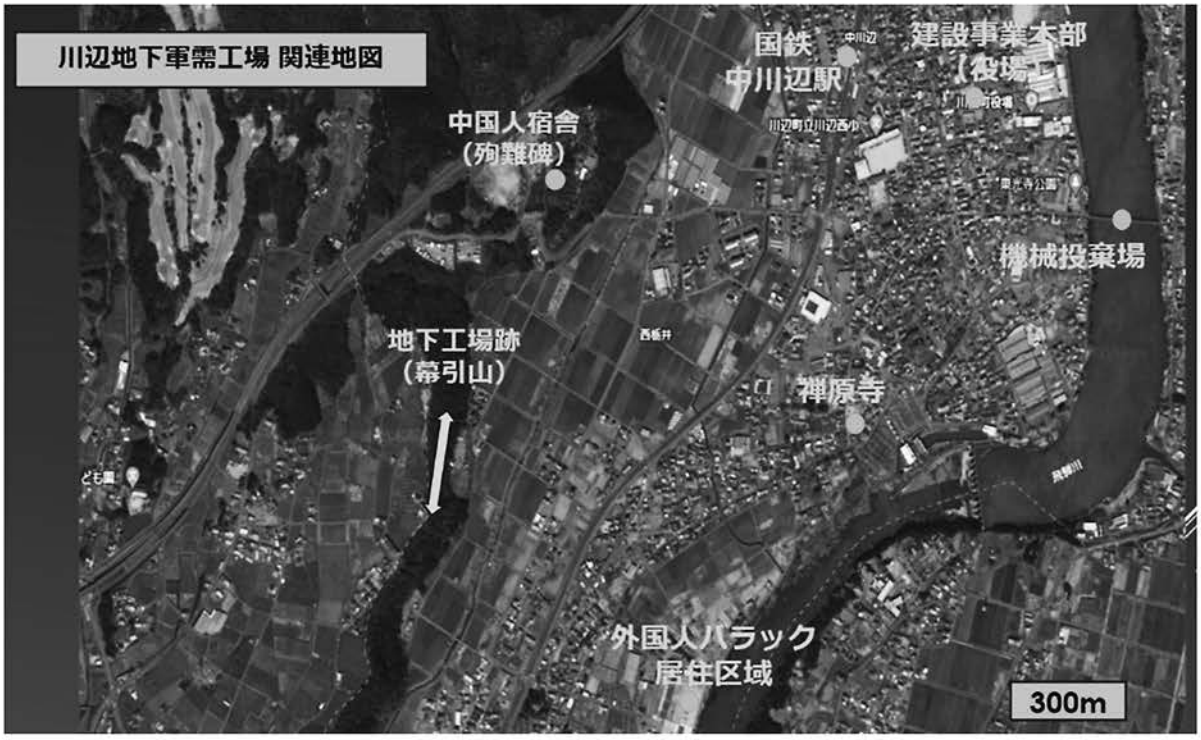
いずれにしても、大都市から離れた内陸でも、住民を巻き込む凄惨な地上戦を行う計画があったことを知り、我々は言葉を失った。

まとめにかえて

前回、関飛行場の実態解明に努めた我々は、今回、特攻機生産の拠点のひとつ、川辺地下工場の調査を行った。聞き取りや資料調査で、中国・朝鮮出身者が厳しい管理下に置かれていたこと、東濃地域の地下工場群を本土決戦の陣地に転用する構想があったことを資料で確認した。特攻作戦や本土決戦、植民地・占領地からの動員・連行は、いずれの出版社の教科書にも掲載されている重要事項だが、郷土史とは縁遠く、身近に感じる出来事とは思えなかった。ところが調べてみると、実は、郷土史と無縁どころか、直結していたのである。今まさに土砂に埋もれようとしている川辺地下工場は「歴史の証人」ともいえる重要な遺跡であると、我々は考える。

今年の５月、我々は、関飛行場跡で現地セミナーを行った。当日、１００人もの方々が参観された。地元の高齢者をのぞけば、ほとんどの方々が、飛行場のことをご存じなかった。地下工場や本土決戦についても同様であろう。我々の研究は、高齢者や当時の様子を伝える資料によって支えられており、学んだ事実を、地域の皆さんや後世の人々に正確に伝えられるよう、これからも活動を続けていきたい。

図版１　関連地図（Google Earth より）



図版２　関連地図（Google Earth より）

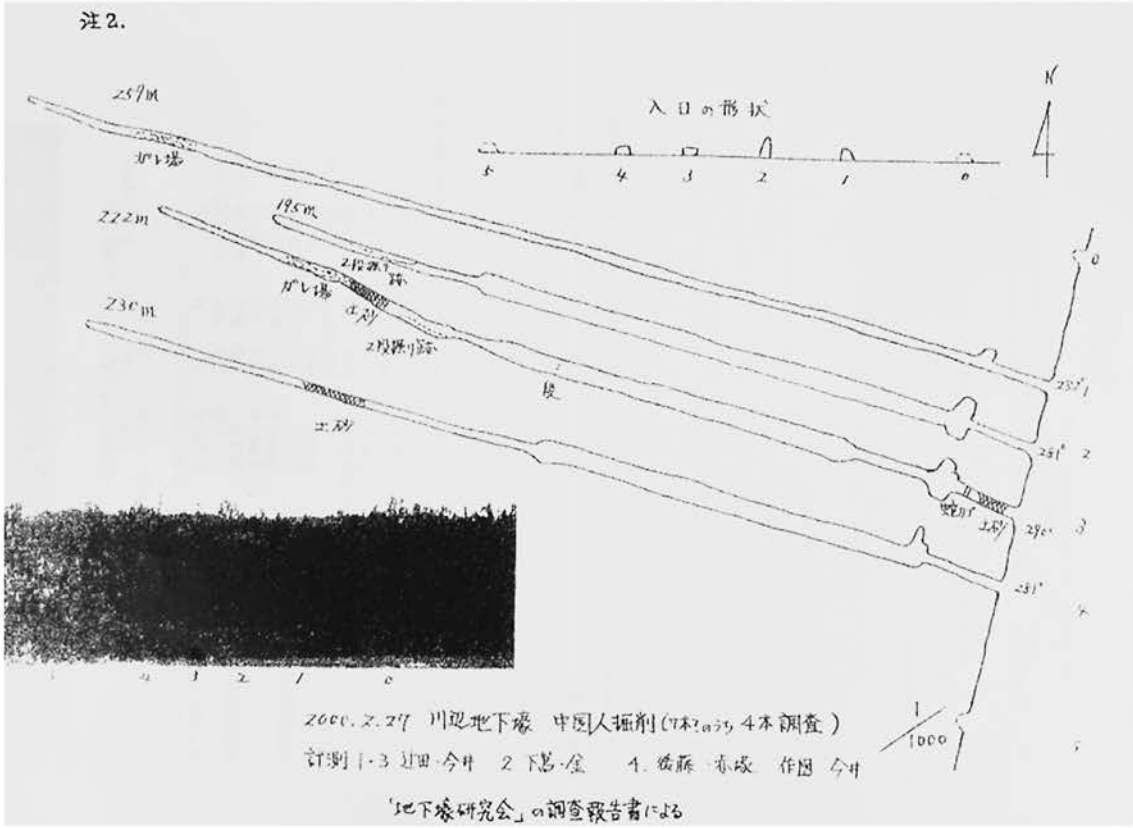


写真１　川辺地下壕測量図（地下壕研究会が制作、原図は遺失）

写真２　地下壕掘削土の堆積状況

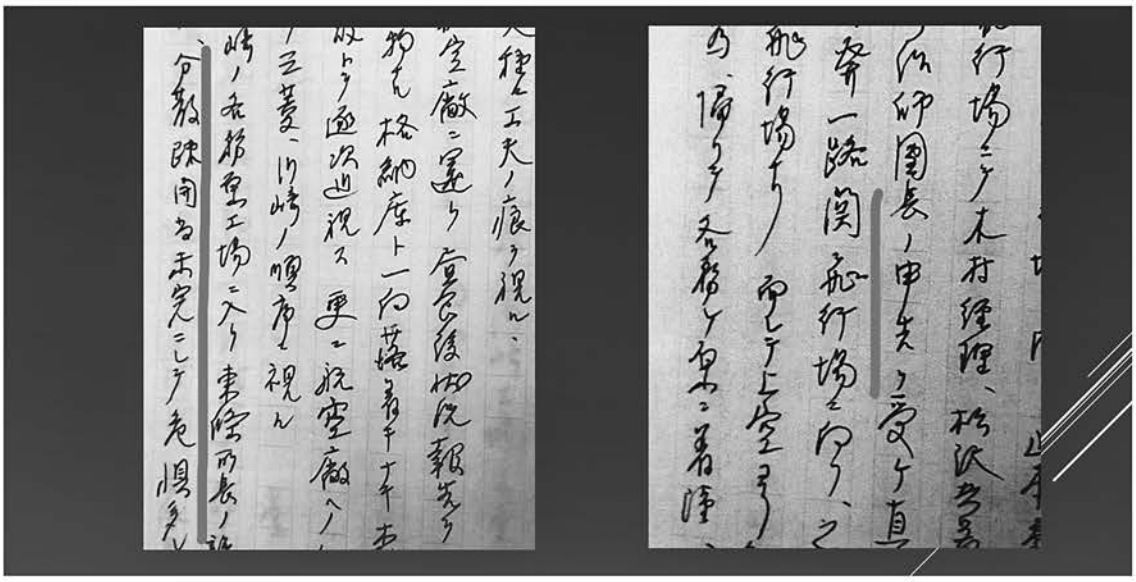
写真３　中国人慰霊碑（川辺町）

写真４　蒼欣晝氏（右）張福材氏（左）

図版３　地下軍需工場●の分布

図版４　地下軍需工場●と造兵廠工場○の分布

【その他 参考資料】



『河辺日記抄』の原文（防衛省保管）　傍線部は加筆

聞き取り調査（三品弘子さん 90歳）

聞き取り調査（鈴木佳子さん 90歳）

聞き取り調査（加藤栄樹さん 90歳）

川辺地下壕の現状

坂祝町黒岩地区での聞き取り

床板に転用された掩体の屋根材（坂祝町）

【注釈・引用文献】

（注 1）「岐阜県立関高等学校地域研究部報告 第 6 号」2022.3
特集： 戦争の記憶と郷土史

（注 2）坂祝町黒岩地区での聞き取り調査（2023 年 7 月 9 日）。

・滑走路の東方には、掩体の跡が 3 ヶ所、戦後しばらくまで残されていた。半地下式が 2 ヶ所（のち茶畑に）、山あいにコンクリートの側壁のある掩体が 1 ヶ所。側壁の上には屋根も取り付けられていた。未完成。のち施設建設のため破壊された。

・掩体の屋根材は、付近の民家の納屋の床材に転用され現存する。

（注 3）『航空総軍時代の回想及び日記抄』
防衛省防衛研究所戦史研究センター 登録番号 - 文庫委託 - 267

（注 4）『高等学校沿革史・記録誌目稿（その一）」（1975）
『各務原市資料調査報告書第 40 集』（2016）

（注 5）『可児市史 近現代編』（2010）

（注 6）『川辺町史』（1996）

（注 7）『往時茫茫 三菱重工名古屋五十年の回顧』菱光会（1970）

（注 8）『華人労務者関係調書』岐阜県加茂郡川辺町株式会社飛鳥組作業所（1946）

（注 9）『幻の外務省報告書　中国人強制連行の記録』ＮＨＫ取材班（1994）

（注 10）「クローズアップ現代」「NHK スペシャル」で放映（1993）

（注 11）『幻の外務省報告書　中国人強制連行の記録』NHK 取材班（1994）

（注 12）鈴木佳子さん（川辺町在住）の証言。

（注 13）『川辺町史』（1996）

（注 14）鈴木佳子さん（川辺町在住）の証言。

（注 15）『幻の外務省報告書　中国人強制連行の記録』NHK 取材班（1994）
『中国人強制連行資料』田中宏・松沢哲成編（1995）

（注 16）（注 6）『川辺町史』（1996）

（注 17）鈴木佳子さん（川辺町在住）の証言。写真は鈴木さんの提供による。

（注 18）報告書には「トラックから転落し頭部を強打して亡くなった」とある。

（注 19）加藤栄樹さん（川辺町在住）の証言。
加藤栄樹「コッペパンの想い出」（岐阜県退職校長会『彩雲』2022）
（注 20）川辺町内で複数の方から聞き取った話である。
（注 21）『往時茫茫 三菱重工名古屋五十年の回顧』菱光会（1970）
（注 22）防衛庁防衛研修所戦史室『本土防空作戦』朝雲新聞社（1968）
防衛庁防衛研修所戦史室『陸軍航空作戦基盤の建設運用』朝雲新聞社（1979）
（注 23）『本土航空作戦記録』第一復員局（1946）
（注 24）『大垣市史通史編　近現代』（2014）
『各務原市史通史編　近世・近代・現代』（1985）
（注 25）坂祝町黒岩地区での聞き取り調査（2023 年 7 月 9 日）。
（注 26）『往時茫茫 三菱重工名古屋五十年の回顧』菱光会（1970）
（注 27）柴山太「大日本帝国陸軍はアメリカ軍の本土上陸作戦を阻止し得た！：1945 年 5～8 月の両軍軍事算定によれば」『総合政策研究』57 関西学院大学（2018）
（注 28）『名古屋陸軍造兵廠史・陸軍航空工廠史』（1986）
『各務原市資料調査報告書 第 40 集』（2016）
（注 29）『名古屋陸軍造兵廠史・陸軍航空工廠史』（1986）
（注 30）前掲（注２７）柴山論文
（注 31）『伊那路 終戦特集号』上伊那郷土研究会（2014.8）
NHK 長野 web 報道ほかの新聞・テレビ報道（2023.8）
旧陸軍　秘密戦の拠点「登戸研究所」長野移転の隠された狙いは（nhk.or.jp）

【他の参考文献】

・『坂祝村誌』（1955）
・『関市史』（1967）
・『関市立田原小学校百周年記念誌』（1972）
・『美濃加茂市史通史編』（1980）
・『市民のための美濃加茂の歴史』（1995）
・『川辺町史』（1996）
・『新修関市史通史編』（1999）
・『坂祝町史通史編』（2005）
・『写真集 証言する風景』「証言する風景」刊行委員会（1991）
・『川辺地下壕の概要 中国人殉難者の碑と川辺地下壕の跡』地下壕研究会
・『本土決戦』土門周平ほか（2015）
・『戦争体験集 平和を願って』平和を願う坂祝町民の会（2018）

【ご協力をいただいた皆様】（順不同・敬称略）

鈴木佳子　加藤栄樹　三品弘子　兼松修　纐纈征幸　（聞き取り調査協力、写真提供）
地下壕研究会のみなさん（情報提供）　梅溪得道（ドローン撮影）　舘弘士（情報提供）
坂祝町黒岩財産区のみなさん（情報提供）　垣下智洋（情報提供）　高橋邦幸（情報提供）

佳 作 ポ ス タ ー

（高等学校等コード順に掲載）

※ポスター発表は任意のため、ポスターを掲載していない研究レポートがあります。

なぜ巨大古墳の造営地は河内に移るのか？
―墳丘築造規格論から考える―

横内清嵩
奈良女子大学附属中等教育学校

1はじめに

（1）本研究の背景

古墳時代中期にあたる5世紀初め頃に、全長200mを超える巨大前方後円墳の造営地が奈良盆地から河内平野に移動する。戦後の日本古代史では、この現象はヤマト王権の政権交代を想定する政権交代論と結びつけて議論され、一大論争になっている。今回の研究では、近年盛んに論じられている墳丘築造企画論を踏まえ、近畿地方の巨大前方後円墳の墳丘構造に着目して、この現象を理解してみようと思う。

（2）政権交代論に関する先行研究

現在は河内の勢力が連合政権内で新たに盟主となったとする河内新勢力盟主説と奈良盆地にあった前代の王権が河内に移動してきたとする大和盟主連続説の二つに収斂されている（下垣2018）。

（3）墳丘築造企画論に関する先行研究

最初に墳丘築造企画に関する研究を展開したのは上田宏範氏である。近年は新納泉氏・柴原聡一郎氏などによってコンピューターによる比較検討が主流になってきている。

2研究対象と分析方法

（1）対象とする古墳

『全国古墳編年集成』に基づき4世紀後半から5世紀前半に築造された全長200mを超える前方後円墳である宝来山古墳・佐紀陵山古墳・佐紀石塚山古墳・五社神古墳・コナベ古墳（奈良県奈良市）と、大仲津山古墳・誉田御廟山古墳（大阪府藤井寺市）、上石津ミサンザイ古墳（大阪府堺市）を対象とする。

（2）検討方法と目的

現時点で筆者が持ち合わせる研究環境に合わせて、古墳の墳丘復元図を直接重ねて比較する。墳丘復元図は古墳の実測図をもとに築造当時の墳丘を復元したものである。比較するのは、斜面長・テラスの幅・平坦面の大きさ・形などである。また、上田氏の研究で示されたP点が一致するかにも注目したい。P点は前方部の長さ・幅を規定する時に定められる点で（上田1969）、この点が同じ位置にあれば前方部の築造規格が似通っていると言える。比較する際の縮尺は、一定の基準として後円部二段目半径が同じになるように調節する。

本研究の目的は次の3点である。

①：奈良盆地と大阪平野の地域間での巨大前方後円墳の墳丘構造の比較を通して、河内新勢力盟主説が成り立つのか検証する。

②：この時期は同時期・同地域に巨大前方後円墳が複数造られることがあり、これらの墳丘構造の比較から、当時の王権の内部構造を考察する。

③：①・②の結果を通して、巨大古墳の造営地が河内に移る理由を考察する。

3墳丘構造の比較による検討

（1）奈良盆地と大阪平野の地域間での比較

①宝来山古墳（左）と仲津山古墳（右）（図1）
②五社神古墳（左）と上石津ミサンザイ古墳（右）（図2）
③コナベ古墳（左）と誉田御廟山古墳（右）（図3）

奈良盆地と河内平野という地域の違いがありながらも、4世紀後半から5世紀前半にかけての多くの古墳で墳丘構造に共通点があることが分かった。

（2）同時期または同地域の古墳の比較

①宝来山古墳（左）と佐紀陵山古墳（右）（図4）
②五社神古墳（左）と佐紀石塚山古墳（右）（図5）
③上石津ミサンザイ古墳（左）と誉田御廟山古墳（右）（図6）
④佐紀石塚山古墳（左）と佐紀陵山古墳（右）（図7）
⑤仲津山古墳（左）と誉田御廟山古墳（右）（図8）

①の事例から、4世紀後半の奈良盆地の王墓には系統差が認められる。さらに②・③・④・⑤から、4世紀末から5世紀の間に系統差は解消されていると考えられる。

図1

図2

図3

図4

図5

図6

図7

図8

出典：誉田御廟山古墳『古市古墳群を歩く』
上石津ミサンザイ古墳および仲津山古墳『陵墓地形図集成』
それ以外の古墳『佐紀古墳群航空レーザー測量調査速報成果資料集』

4まとめ

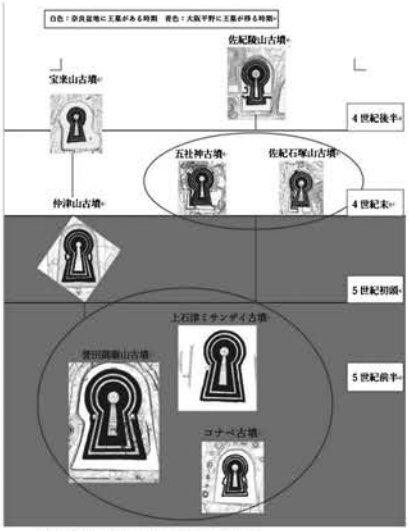


図9 本研究で判明した古墳の関係性と時間軸
出典：誉田御廟山古墳『古市古墳群を歩く』
上石津ミサンザイ古墳および仲津山古墳『陵墓地形図集成』
それ以外の古墳『佐紀古墳群航空レーザー測量調査速報成果資料集』

①に対する考察

3―（1）より、奈良盆地と大阪平野の王墓の墳丘構造には共通点が多く存在し、それらの造墓主体である王権は同一のものであると考えられる。したがって、河内新勢力盟主説は成り立たない。

②に対する考察

3―（2）より、5世紀前半までに、複数存在していた王系が一つにまとめられたと考えられる。ここで、岸本直文氏の説を取り上げたい。岸本氏は主系列の築造順は仲津山古墳→大山古墳、副系列は上石津ミサンザイ古墳→誉田御廟山古墳となり、5世紀前半以降も複数の王系が存在する状況は続くとする（岸本2018）。しかし、仲津山→大山の間が約半世紀開き、上石津→誉田御廟山古墳はほとんど同時期の築造であり、王位継承の間隔が不自然である。よって、仲津山→上石津→誉田御廟山→大山と一つの王系で考えた方が、整合性があると思われる。また、仲津山古墳と誉田御廟山古墳はP点の位置から系統差が認められるものの、後円部のテラス幅が一致する（図8）。新納泉氏の研究では、後円部テラス幅が後円部の段築を決める基準とされている（新納2018）。よって、5世紀前半に墳丘構造は五社神古墳を、墳丘構造を規定する基準は仲津山古墳を引き継いだ折衷型の誉田御廟山古墳・上石津ミサンザイ古墳が築造され、ここに王系の統一があったとみたい。

③に対する考察

①・②より、巨大古墳の造営地が河内に移る理由は、王系の統一により意見集約が容易になり対外交流に重点を置いた政治ができるようになり、奈良盆地より海へのアクセスが良い大阪平野に拠点を移したためではないだろうか。実際に『晋書』本紀には413年に倭国が晋に遣使したとあり（坂2021）、その後倭の五王による朝貢が始まる。墓域を大阪平野に移したことと、倭国が対外交流を進めていくことが連動しているといえる。

5今後の展望

本研究では築造当時の古墳の墳丘構造を復元し比較したが、詳細な設計図を作成することはできなかった。今後は古墳を築造する際のさらに細かい決まり事に関する先行研究を調べ、古墳の設計図を復元してより正確な比較をしたい。

また全国には大王墓と似通った墳丘構造を持つ複製墳が存在する。それらの分布などを検討し、対象地域を日本全国に広げ、巨大古墳の造営地が河内に移る理由をさらに深く考察したい。

＜主要参考文献＞
上田宏範『前方後円墳』（学生社、1969年）
岸本直文「倭王権と倭国史をめぐる論点」『国立歴史民俗博物館研究報告』第211集（国立歴史民俗博物館、2018年）
宮内庁書陵部陵墓課編『陵墓地形図集成』（学生社、1999年）
下垣仁志『古墳時代の国家形成』（吉川弘文館、2018年）
新納泉「前方後円墳の設計原理と墳丘大型化のプロセス」『国立歴史民俗博物館研究報告』第211集（国立歴史民俗博物館、2018年）
坂靖『倭国の古代学』（新泉社、2021年）
古市古墳群世界文化遺産登録推進連絡会議『古市古墳群を歩く』（古市古墳群世界文化遺産登録推進連絡会議、2015年）
村瀬陸『佐紀古墳群航空レーザ測量調査速報成果資料集』（奈良市、2023年）

青谷上寺地遺跡水田復元の試み（Ⅰ）

－　弥生時代の水田から学ぶ持続可能な水田へのアプローチ　－

東地美咲　桐本愛夏　山田唯加　濵本叶愛　林原叶将　伊井大希

鳥取県立青谷高等学校

Ⅰ　研究の目的と方法

青谷上寺地遺跡水田を中心として弥生時代の県内外の水田や中国、朝鮮半島の水田を調べ理解する。実験水田で栽培密度の違いによる影響、バケツ栽培で２番穂（ひこばえ）の収穫量を調べる。弥生時代の水田（以下、弥生水田）が、なぜ小区画水田なのかを探り、弥生水田から持続可能な水田について考える。

研究方法は、弥生水田と大陸の水田については報告書等の文献によって調べる。実験水田は２ｍ×２.５ｍ四方の４つの小区画を作り、２種類の古代米（緑米・黒米）を密度を変えて植える。密度の違いより収穫量を調査する。バケツ栽培は、１３ℓ容器のバケツを８つ用意し、４種類の古代米（豆酸・宝満・あきたこまち・緑米）の苗を３株ずつ植えた。根刈りと穂首刈りによる２番穂の収穫量を調べる。

Ⅱ　青谷上寺地遺跡水田跡と全国の弥生水田跡

図１　日本地図

図２　鳥取県内の弥生時代水田遺跡（表１の遺跡番号対応）

図３　青谷上寺地遺跡調査区と実験水田場所　出典：「青谷上寺地遺跡８」第７図一部加筆

ⅰ）青谷上寺地遺跡の概要

青谷上寺地遺跡は鳥取市青谷町青谷・吉川に所在する弥生時代前期～古墳時代前期初頭を中心に営まれた集落遺跡である。これまでの調査により、周辺には干潟や湿地が広がっていると想定され、それらの一部を利用して水田開発を行っていたことが明らかになっている。

ⅱ）青谷上寺地遺跡の水田跡（「青谷上寺地遺跡１」参照）

二区で検出した遺構。弥生時代後期の遺構面を堀り下げると畦畔状の高まりが検出され水田面と認識された。畦畔と畦畔の間が約20ｍある。この面は灰褐色粘土をベースとしており、稲のプラントオパールが高密度で検出された。灰褐色粘土中から、端部にキザミを施す甕の口縁部が出土しており、水田がつくられた時代は、弥生時代前期末から中期前葉の時期が考えられている。

出典：「青谷上寺地遺跡１」

ⅲ）鳥取県内の弥生水田遺構

右の表にまとめた。青谷上寺地遺跡以外は、小区画水田であり、米子市の遺跡では、水田の１区画の平均面積は20～40㎡におさまる。

表１　鳥取県内出土の弥生時代の水田

番号	遺跡名	市町村（地区）		小区画面積(㎡)	一区画面積(㎡)	区画形状	弥生時代（時代）	備考	出典
1	青谷上寺地遺跡	鳥取	鳥取市	約40(1区)	約1	方形（長）	古墳前期～中期前葉		「青谷上寺地遺跡」
2	百石高遺跡	西部	米子市	約25	※約1	不明（長）	中期後半		鳥取県埋蔵文化財センター
3	名ノ内遺跡	西部	米子市	約25	※約1	不明（長）	前期	畦畔状の高まりあり	鳥取県埋蔵文化財センター
	名ノ内遺跡	西部	米子市	約25	※約1	不明（長）	前期	畦畔状の高まりあり（1区下層）	鳥取県埋蔵文化財センター
	名ノ内遺跡	西部	米子市	約25	※約1	不明（長）	前期	畦畔状の高まりあり（2区下層）	鳥取県埋蔵文化財センター
4	長砂第2遺跡	西部	米子市	約24	※約1	不明（長）	前期	畦畔状の高まりあり（2区）	鳥取県埋蔵文化財センター
5	妻木晩田	東部	鳥取市	約5	約0.5（長）～約1.5（長）	不明（長）	前期	畦畔状の高まりあり（1区）（2区）	妻木晩田遺跡発掘調査報告書（1997）（2017）

※表の番号２・３・４の遺跡について、一辺の長さ（ｍ）は当時の間隔から計測した数値である。

ⅳ）全国の代表的な弥生水田遺構

右の表にまとめた。九州・四国・中国・近畿・東海・関東・東北地方の10の遺跡を調べた。水田の１区画の面積で100㎡以上の大区画水田は福岡県板付遺跡と群馬県日高遺跡の一部を除いて全て小区画水田であった。静岡県登呂遺跡は再調査により小区画水田であることが判明している。

表２　全国出土の代表的な弥生時代の水田

番号	遺跡名	県名	市	小区画面積(㎡)	区画形状(長辺/短辺)	一区画(㎡)	弥生時代(時代)	備考(出典)	その他
1	板付遺跡	福岡県	福岡市			約60以上	前期～中期(1期)以上	『日本の考古学』『福岡市史』	
2	菜畑遺跡	佐賀県	唐津市			約0.8～約1.2	前期～中期(1期)	『日本の考古学』	
3	吉野ヶ里遺跡	佐賀県	神埼郡	約40	約50	約1	中期後半(2期)	『日本の考古学』『吉野ヶ里』	
4	朝倉総合庁舎遺跡	福岡県	朝倉郡			約1	中期	『朝倉郡史』	出土状態は不明
5	石丸第2中学校遺跡	鳥取県	米子市	約25	約1～約2		前期～中期	『米子市史』『鳥取県埋蔵文化財センター』	石丸遺跡(1区)と同じ
6	登呂遺跡	静岡県	静岡市	約25	約1	約1～約2	中期(2期)	『静岡市史』『日本の考古学』	静岡市登呂博物館(1991)(2017)
7	日高遺跡	群馬県	高崎市	約70	約1	約1～約2	中期(2期)	『高崎市史』	市内遺跡(1991)(2017)(2020)(2021)
8	青谷上寺地遺跡	鳥取県	鳥取市	約25	約1	約1～約2	前期～中期(1期～2期)	『青谷上寺地遺跡』『鳥取県史』	鳥取県埋蔵文化財センター
9	妻木晩田遺跡	鳥取県	米子市(旧淀江町)	約24(1区)	約1	約24(1区)、約5(2区)	前期～中期(1期～2期)	『妻木晩田』	鳥取県埋蔵文化財センター
10	板付遺跡	福岡県	福岡市	約60	約1～2	約60、約120	前期	『日本の考古学』『福岡市史』	板付遺跡(1991)(2017)(2020)(2021)

ⅴ）中国大陸・朝鮮半島の水田跡（森岡2005参照）

中国最初の発見例となった水田跡は、江蘇省蘇州市にある草鞋山遺跡である。約6000年前の水田で１つの区画が10㎡未満のものばかりで水源は湧水や天水であったとみられる。朝鮮半島の水田跡では紀元前7～6世紀の蔚山市無去洞玉峴遺跡があり、１～３坪程度の小面積の水田跡で住居・溝・水田からは孔列文土器が出土している。

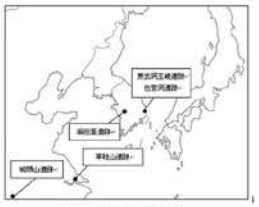


図１　中国大陸・朝鮮半島の水田跡

Ⅲ　実験水田とバケツ栽培

田起こし５月２日

田起こし５月２３日

代掻き６月６日

田植え６月８日

草取り７月２７日

稲刈り１０月１０日

腐葉土を入れる６月１３日

３株ずつ植える６月１３日

水を入れる６月１３日

成長の記録６月２９日

稲の成長７月２２日

稲の成長９月１０日

Ⅳ　持続可能な水田へのアプローチ

ⅰ）弥生水田の特徴

弥生水田の特徴として小区画水田があげられる（1区画が100㎡以内）。なぜ小区画にするのかについて、工楽善通氏（工楽1991）は、「水田は区画した田に一定の水を張って稲の生育を促す場」であり、「１筆内の水深は均一でなければならず、10㎝以上の差があっては稲が育たないと言われている。」「一度に広い面積を均平化するのは大変な土木量をともなうこと」から、小区画水田にしたと考えている。水田区画の規模がどのような要因で決まるのかについて①その土地の傾斜度合いに左右される場合②耕作土及びその直下の土壌状態に左右される場合がある。

登呂遺跡の調査をした岡村渉氏（岡村2014）によると、「温帯ジャポニカ(水稲)種だけでなく、熱帯ジャポニカ(陸稲)種が含まれていたりして両者が雑種化していた」性質の異なる稲を同時に栽培する理由について、佐藤洋一郎氏の言葉を引用し、「多種多様な稲を栽培することで、環境変化での収穫リスクを減らす安定化の工夫であろう」と小区画水田の意味を考えている。一方、群馬県の水田跡を研究した斎藤英敏氏（斎藤2003）によると、水田跡の時代的変遷として「不定形小区画水田→極小区画水田→大区画水田」があげられ、これらの現象が長野県や静岡県でも見られることから、日本に伝来した水田稲作技術の一要素に、小区画水田造成技術が含まれていた可能性が高いと考えている。

ⅱ）現代の稲作農業の問題点

現代の稲作農業は、利益追求型で大規模水田であり、化学肥料や農薬が環境破壊をもたらしている。

ⅲ）弥生水田から学ぶ持続可能な水田

私たちが考える持続可能な水田は、①環境によく、生物多様性が守れる水田②高齢者でもできる水田③小規模農業で自給自足的であり、耕作放棄地を減らすもの④重労働を軽減するため、田植えや草取りの労働を極力なくすものである。小川誠氏（小川2022）によると、稲は本来、野生種であり現在の栽培種も野生種の遺伝子を持っており、多年草化することにより、田植えは毎年する必要がない。１年中湛水状態にして不耕起・湛水の水田をつくれば、私たちが考える理想の持続可能な水田に近づく。

Ⅴ　研究の経過と展望

実験水田で栽培密度の違いによる影響、バケツ栽培で２番穂（ひこばえ）の収穫量については、現在分析中である。稲の多年草化栽培は、水田に１年中湛水にするのは周辺の水田との関わりから非常に難しい問題がある。稲の多年草化栽培は、水温との関係もあり冬に雪の多い山陰地方でできるかについては分からない。バケツ栽培で、春に芽が出るのか期待したい。木製農具工具を使った実験や実験水田を活用した栽培を行い、研究データを蓄積することが弥生水田を理解する方法かもしれない。

（引用・参考文献）

石川日出志2010『第二章　弥生時代へ　―稲作のはじまり』『農耕社会の成立　シリーズ日本古代史①』岩波新書1271　株式会社岩波書店

岡村渉2014『シリーズ「遺跡を学ぶ」088　弥生集落跡の探点を見直す　登呂遺跡』　新泉社

誉江康史2020『ＳＤＧｓ（持続可能な開発目標）』中公新書2604　中央公論新社

小川誠2022『稲の多年草化栽培　小麦粉自給農への新たな道』　地湧の社

小原貴樹2017『日久見遺跡』『池ノ内遺跡』『長砂第1遺跡・長砂第2遺跡』『新鳥取県史　考古1　形石器・縄文・弥生時代』710-727頁　鳥取公文書館　県史編さん室

北浦弘人2017『青谷上寺地遺跡』『新鳥取県史　考古1　形石器・縄文・弥生時代』444-462頁　鳥取公文書館　県史編さん室

工楽善通1991『UP考古学選書13　水田の考古学』　東京大学出版会

斎藤英敏2003『赤川扇状地の新視点―群馬県における水田跡発掘の現状―』『考古学研究　第50巻第2号(通巻198号)』　考古学研究会

谷口恭子他1991『鳥取市文化財報告書30　岩吉遺跡Ⅱ』鳥取市教育委員会　鳥取市遺跡調査団

鳥取県埋蔵文化センター2000『鳥取県教育文化財調査報告書67　青谷上寺地遺跡Ⅰ』　財団法人鳥取県文化財団

鳥取県埋蔵文化センター2006『鳥取県埋蔵文化センター調査報告10　青谷上寺地遺跡8』　鳥取県埋蔵文化財センター

鳥取県埋蔵文化センター2008『鳥取県埋蔵文化センター調査報告21　青谷上寺地遺跡9』　鳥取県埋蔵文化財センター

出原恵三2009『シリーズ「遺跡を学ぶ」080　南国土器から問う弥生時代像　田村遺跡』　新泉社

森岡秀人2005『「トプジア細作の政経から日本列島へ」『失史日本を復元する4　稲作伝来』1-36頁　稲垣孝司・林謙作編集　株式会社岩波書店

八峰興2006『6稲作のはじまり　水田』『鳥取県の考古学　第1巻　弥生時代Ⅰ　稲作とくらし』10-11頁　鳥取県埋蔵文化センター　日ノ丸印刷株式会社

都鄙昭彦2007『古墳考古ライブラリー16　古墳の弥生集成』　古墳人出版

山崎純男2008『シリーズ「遺跡を学ぶ」048　路古の農村　板付遺跡』　新泉社

農林水産省 2023　https://www.maff.go.jp/j/syokyu/zisyu_zisu/shasai03/01-03.html

ウィキペディア　https://ja.wikipedia.org/wiki/縄文土器時代

※研究をする上で青谷かみじち史跡公園準備室の方をはじめ、多くの方々にお世話になりました。ありがとうございました。

壱岐勝本城跡の本丸虎口に関する研究

武井　慎之介
壱岐高等学校

1. はじめに

日本列島と朝鮮半島の間に位置する壱岐島は、対馬島とともに日本列島と中国大陸・朝鮮半島を結ぶ中継地として古くから重要視されてきた(図1)。そのため壱岐島には、様々な時代の様々な遺跡が存在する。

私は以前から、戦国時代及び直江兼続に興味を持っており、壱岐にその時代の遺跡があるのか気になり調べていると、勝本城を見つけ見学に行った。すると、いままで見てきた北関東の城に比べ虎口が小さいように感じた。その後勝本城の虎口が大きいという話を聞いたり、現地を見学した城郭談話会の西尾孝昌氏が、勝本城の虎口を「大型の内枡形虎口」と表記しているのを読んだが、何と比較して何が大きいのかまでは書いていなかった。このため、勝本城の本丸大手虎口の大きさを測りほかの城館と比較していくことにした。

図1　壱岐島周辺地図

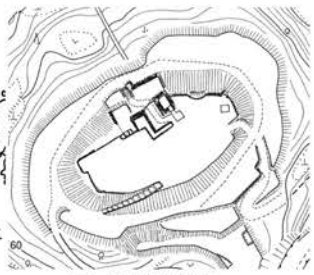


図2　勝本城縄張り図

2　勝本城の概要と研究方法

(1)勝本城の概要

勝本城跡は壱岐市勝本町に所在し、壱岐島の北端部に位置する(図2)。勝本浦を見下ろす標高約80mの山の頂上を中心に築かれ、武末城とも呼ばれる。文禄の役が始まる前年の天正19(1591)年に豊臣秀吉の命により、松浦鎮信が同じ肥前の大名である大村喜前、有馬晴信、五島純玄の協力を受けて築城した朝鮮出兵のための城であるが、朝鮮出兵が終わりを迎えると勝本城も役目を終え廃城となり、本丸虎口等の石垣隅部が破却された。

図3　勝本城虎口

(2)研究方法

①比較対象

勝本城は築城の時期や経緯が記録に残っており、織豊期に築城された「織豊系城郭」である。織豊系城郭の築城技術、特に石垣築造技術は朝鮮出兵を機に広がったとされ、長崎県内でも大村市の玖島城や南島原市の原城は、大村氏、有馬氏が朝鮮出兵後にその技術を取り入れて築城されたとされる。そのため、石垣によって構築された枡形虎口を持つ、朝鮮出兵に関わる城館及び織豊期から近世初頭の城郭を比較の対象とし、地域は長崎県及び佐賀県とした。比較した城館については表1に計測結果とともにまとめた。

②計測箇所と方法

本丸の広さと虎口(枡形)の広さの比率(A)・虎口幅と本丸の幅の比率(B)・虎口面積あるいは幅の値(C)の3点を測定することとした(図4)。

面積については、虎口の面積は石垣で囲まれた枡形空間を計測し、本丸の面積は石垣、土塁、切岸などの防御施設で囲まれた曲輪の平坦面を範囲とした。幅については、虎口の幅は、外部から本丸に入る際に正面となる部分について、石垣間の空隙部分を計測した。

本丸の幅は、虎口から本丸に入った際に一番最初に本丸の大きさを印象づけるものとして、虎口から見た本丸の横幅を計測することとした。計測は各県の中近世城館跡分布調査の報告書に掲載されている縄張図または測量図を使用し、計算や変換のミスを防ぐため、縄張図または測量図の縮尺を2000分の1に統一した上でPDFデータとし、Adobe社AcrobatReaderのものさしツール(距離ツール及び面積ツール)を利用して行った。

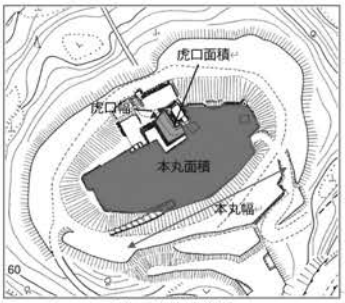


図4　計測位置図

3. 計測結果

勝本城跡を含む16カ所の城館跡の本丸と虎口を計測した結果は表1のとおりである。

表1　計測対象及び計測結果

	城館名	虎口幅(m)	本丸幅(m)	幅比率	虎口面積(㎡)	本丸面積(㎡)	面積比
1	勝本城	7.44	89.34	8.33	12.47	275.37	4.53
2	清水山城二の丸	3.44	22.92	15.01	4.74	119.78	3.97
3	清水山城本丸	2	37.36	5.36	9.76	170.66	5.72
4	亀岡城	2.4	57.94	4.15	3.68	96.97	3.8
5	玖島城	2.54	55.16	4.61	4.64	435.39	1.07
6	森岳城	7.28	88.28	8.25	6.19	1298.08	0.48
7	原城	5.2	125.56	4.15	20.04	751.94	2.67
8	名護屋城	14	209.6	6.68	70.12	3792.34	1.85
9	堀秀治陣跡	2.7	94.38	2.87	17.50	375.21	4.67
10	豊臣秀保陣跡	5.28	52.38	10.09	25.22	244.59	10.32
11	前野長康陣跡	4.22	39.58	10.67	7.81	158.27	4.94
12	佐竹義宣陣跡	1.88	45.64	4.12	4.62	161.41	2.87
13	徳川家康別陣跡	4.96	53.16	9.34	20.12	400.40	5.03
14	木下延俊陣跡	5.4	46.66	11.58	3.80	177.96	2.14
15	唐津城	4.76	67.9	7.02	9.15	468.45	1.96
16	佐賀城	9.46	145.78	6.49	74.00	2107.44	3.52

計測結果はそれぞれこのようになった。

A・Bの計測はそれぞれ、勝本城は16城館中5番目・7番目に大きいという結果となり、虎口と本丸の比率の比較からは、虎口が突出して大きいということは分からなかった。

C(虎口面積)の計測は16城館中7番目であったが、C(虎口幅)を計測すると、16城館中名護屋城・佐賀城に次いで3番目に虎口幅が広いということが分かった。

4．考察

(1)勝本城の虎口幅について

勝本城跡の縄張図を見ると、虎口を構成する石垣の正面部分が櫓台状になっており、「壱岐名勝図誌」の「武末城趾本丸全図」を見ると虎口正面の石垣間に礎石が描かれていることから、大手虎口に櫓門が作られていたと考えられる(図5)。

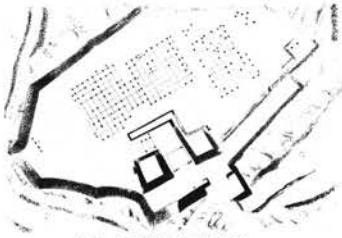


図5　武末城趾本丸全図

図6　海上から見た勝本城

勝本城本丸跡の発掘調査を担当された壱岐市教育委員会の松見裕二氏によると、勝本城の本丸に入ることができるのは秀吉とその重臣や側近のみだったという。

以上のことから、勝本城本丸大手の虎口は、普段の出入り口としては使われておらず、飾りのような役割を果たしていたと考えられる。文禄の役講和交渉で朝鮮の副使であった朴弘長の使行録からは海上から見える規模の三層の櫓が勝本城内にあったことがわかる(図6)。このことから、見栄えを良くした上に豊臣家の威厳を示すために、門、ひいては虎口を大きくしているのではないかと考えた。

5. まとめと今後の課題

勝本城跡と、名護屋城跡をはじめとする長崎県、佐賀県の朝鮮出兵関係及び織豊期から近世初頭の城館跡16カ所の本丸大手虎口の大きさを計測し比較した結果、勝本城跡の本丸大手虎口は虎口幅3番目の大きさと、実際の値で見たときに大型の虎口であることが分かった。また、秀吉しか使用できない門であり、見栄えを重視して豊臣家の威厳を示す「見せる城」であったことから、勝本城も秀吉の威厳を目に見える形にするために大型の大手虎口となったと考えられる。

当初の疑問であった、勝本城の門は何が大きいのかということは今回分かったが、計測した結果をみて疑問に思ったことがある。それは、本丸と虎口の面積比率を見た際に、朝鮮出兵の際に築かれた陣跡は本丸(主郭)に対して虎口が大きいということである。陣跡はすべて同じ時期に築かれているため、時期的な傾向である可能性がある。これは、陣跡以外の同じ時期の城館跡をより多く調べることで検証することができると思われる。また、宮武正登氏によれば、今回計測した陣跡の多くは発掘調査がなされており、その結果、陣跡内部に茶室や庭園を持つ、大名屋敷的な様相があるという。そのため、秀吉が威厳を示したかったのと同様に、全国各地から大名が集まっている中で、自陣の外観を少しでも美しく大きく見せようとした可能性も考えられる。

現在私は壱岐高校に通い、今回の研究で長崎県・佐賀県の中近世城館を調べたり北部九州の中近世城館を見学してまわったが、出身は関東地方で、これまでは北関東の城跡を見学することが多かった。この研究の中で名護屋城跡周辺の陣跡を見ていくと、陣跡により作りが違い、地域差があることを感じた。自分の身近にあった東日本の城と九州や西日本の城の比較など、織豊期の城館を中心に今後も研究を行っていきたい。

6. 主要参考文献

名著出版1975「巻之二十三　壱岐郡可須村之部　併勝本浦」『壱岐名勝図誌』下巻
壱岐市教育委員会2021『山中遺跡 亀丘城三ノ丸跡 国史跡勝本城本丸跡1次 正村遺跡隣接地』－市内遺跡発掘調査事業に伴う発掘調査－壱岐市文化財調査報告書第32集
佐賀県教育委員会2013『佐賀県の中近世城館』第2集各説編1（三養基・神埼・佐賀地区）佐賀県中近世城館跡緊急分布調査報告書Ⅱ 佐賀県文化財調査報告書第201集 佐賀県教育委員会
佐賀県教育委員会2016『佐賀県の中近世城館』第5集各説編4（名護屋城跡並びに陣跡）佐賀県中近世城館跡緊急分布調査報告書Ⅴ 佐賀県文化財調査報告書第213集 佐賀県教育委員会
佐賀県教育委員会2017『佐賀県の中近世城館』第4集各説編3（東松浦・西松浦地区）佐賀県中近世城館跡緊急分布調査報告書Ⅳ 佐賀県文化財調査報告書第216集 佐賀県教育委員会
長崎県教育委員会2011『長崎県中近世城館跡分布調査報告書Ⅱ』詳説編 長崎県文化財調査報告書第207集
久野哲矢2019「東壁録－文禄五年朝鮮通信使副使・朴弘長の使行録－」『研究紀要』第25集 佐賀県立名護屋城博物館
林雅広2017a「勝本城」『織豊系城郭とは何か－その成果と課題－』城郭談話会30周年記念 城郭談話会

壱岐島における神棚文化

東アジア・中国語コース　加藤紅葉

長崎県立壱岐高等学校

１．はじめに

神棚とは、家庭の清浄な所に設けて神を祀る棚である。また、一般的な神棚とは家屋の天井付近の壁に掛かっている箱型、瓶型、家具型のものだ。しかし壱岐の神棚はそれら全く異なる。家屋内に２つから３つ、床の間と床脇に造られる神棚と、台所または玄関に置かれる同じ名称で呼ばれるが、２種類の形態がある。本研究では壱岐の神棚の形態とそれに伴う壱岐の文化を調査し、壱岐の神棚のルーツについても検討を行う。

２．壱岐の神棚の形態と文化

２．１調査の概要と結果

壱岐の神棚に関する文献が見当たらなかったため、聞き取り調査とフィールドワークを行った。

聞き取り調査

①調査の概要　壱岐の神棚の形態と文化、ルーツについて、風土記の丘の壱岐市教育委員会社会教育課の河合氏、松永建設の松永ご夫妻、里親の中田ご夫妻、聖母宮の宮司、かねや旅館を対象に調査を行った。質問内容はカミドコ・シモドコ、荒神様の形態、壱岐の神棚のルーツ、壱岐の神棚に関する文化について調査を行った。

フィールドワーク

①調査の概要　壱岐の家屋内の神棚の位置と形態について把握するために、壱岐風土記の丘（旧冨岩家）、松永家、中田家の家屋と、壱岐風土記の丘（旧冨岩家）、松永家、中田家、土肥家、かねや旅館、聖母宮、吉田酒屋の神棚を対象に行った。

②結果

②、１家屋内での神棚の位置

・壱岐風土記の丘の母屋（旧冨岩家）・勝本町・江戸時代中期頃（18 世紀）の武家屋敷。座敷に南側西向きにカミドコ、その北側にシモドコ、カミドコの南側にランマ、それらと向かい合うように台所に荒神様がある。また、仏間にはいずれの神棚とも向き合わないように仏壇がある。神棚があるのは母屋のみ。

・松永家の母屋・勝本町・平成25～30年頃に建設・建設業・座敷に南側東向きでカミドコ・シモドコ、カミドコの南側にランマ、それらと向かい合うように台所に荒神様が造られている。また、台所にいずれの神棚とも向かい合わないように仏壇がある。神棚があるのは母屋のみ。

・中田家の母屋・勝本町・平成12～13年頃に建設・米農家・座敷に南側東向きにカミドコがあり、シモドコは省略されている。カミドコと向き合うように台所に荒神様、そして、居間兼客間にいずれの神棚とも向き合わないように仏壇がある。神棚があるのは母屋のみ。

②、２神棚の形態

・壱岐風土記の丘（旧冨岩家）・勝本町・18世紀　カミドコに飾られる掛け軸は来客によって飾られるものが厳密に決められており、この場所に神棚を造ることが出来なかったためシモドコの高い場所に神棚を造った。そのため、壱岐の一般的なカミドコ・シモドコとは形態が異なる。荒神様は洞型。また、どちらの神棚のお社も一社型である。

・松永家・勝本町・平成 25～30年頃　カミドコ 縦約 200 ㎝・横約 180 ㎝・奥行き約90㎝　シモドコ 縦約 220 ㎝・横約 170 ㎝・奥行き約90㎝　ランマ　縦約 150 ㎝・横約190 ㎝・荒神様　縦約70㎝・横約 100 ㎝屋久杉を使用した豪華なカミドコ・シモドコで、床柱が直径約40㎝で左巻きにねじれている立派なものであった。

・中田家　・勝本町　・平成12～13年 カミドコ・縦214 ㎝・横183㎝・奥行き96㎝　ランマ・縦 158 ㎝・横 192 ㎝　荒神様・縦51㎝・横84㎝シモドコは省略され、カミドコとランマのみ。荒神様は瓶型。

・土肥家（宮大工）・勝本町・お社は18世紀前半、台は10年前 荒神様・縦（台を含め）約２m（社のみ）約１m、横約1.5m、奥行き約１m玄関に設置。お社は土肥家三代目当主により18世紀前半に設置。台は１０年ほど前のリフォーム時に設置。家具型。

・かねや旅館 戸辺町・昭和初期 荒神様 縦（ 台含め ）約2m（ お社のみ ）約1.2m・横約1.5m・奥行き約１m 戸辺町の宮大工・辻本松三郎に依頼して設置。奈良市の春日大社を模写して造られ、制作年月は１年程。

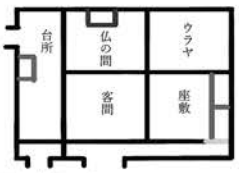
・聖母宮 勝本町・17世紀 カミドコの荒神様 縦（ 台含め ）約2m（お社のみ）約1.3m・横約１m・奥行き約１m 17世紀に宮大工・土肥家が作成。確認した壱岐の荒神様の中で一番豪華なものである。現在は神棚としてではなく、慰霊碑として祀られている。

・石橋酒造 勝本町・17世紀後半 荒神様 縦約1.5m・横約1.2m・奥行き約0.6m 台はなくお社のみ。酒蔵近くの壁に設置。家具型。

２．２考察

以上の調査を踏まえて家屋内での位置と、壱岐の神棚の形態を検討した。

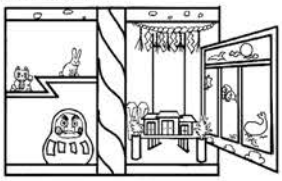
(1) 家屋内での位置



壱岐の神棚の形態

調査を踏まえて、壱岐の家屋の間取りのイメージ図４を作成した。神棚を赤、ランマを黄、仏壇を青で表している。壱岐の家の基本形は一階建てで、戸口は三つで客用、家族用、炊事・風呂用である。家屋は図を左右反転にして造られることもあるが、カミドコが右、シモドコは左であり、上手・下手を語源に造られていると思われることから図７のような家屋が壱岐の基本的な家屋だと考えられる。座敷にカミドコが南側西向き、シモドコが北側西向きに置かれる。内部は典型的な田の字型建築である。このような家屋内にカミドコと縁側の間にはランマが置かれる。そのカミドコ・シモドコと向かい合うように台所に荒神様が置かれる。また、家屋によっては玄関に置かれる。仏壇はいずれの神棚とも向き合わないように北側南向きに置かれる。

壱岐の神棚は一家屋にカミドコ・シモドコ、荒神さまの三つがありそれぞれの神様を信仰し役割を持っている。以下はカミドコ・シモドコ、荒神様それぞれの役割と造りについてである。以下は調査を基に作成したそれぞれの神棚のイメージとその造りと作法についてである。



カミドコ・シモドコ、ランマ家全体を守る役割を持つ神棚で天照皇大神宮が祀られる。天照皇大神宮のほかに氏神様と好きな神様を祀る。家屋の座敷にカミドコが南側・シモドコが北側に造られる。また、カミドコの右側に縁側と奥座敷を遮るようにランマが造られる。カミドコ・シモドコはカミドコが右、シモドコが左であることから、語源は上手・下手ではないかと考えられる。「カミドコ」は縦 210 ～ 240 ㎝（七尺～八尺）横約 182 ㎝（一間） 奥行き約90㎝（三尺）床の間を基に造られ、主に、お社、掛け軸、しめ縄、お守り、榊、お供え物が置かれる。「お社」は三社型のお社で八つ足を付けた台の上に置かれている。「しめ縄」は五つの房と四つの紙垂が交互に付けられる。一般的なしめ縄とは逆に綯いはじめを右側に、綯い終わりを左側に飾っている。これは、壱岐のヒマワリ信仰が影響しているものだと考えられる。「掛け軸」は天照皇大神宮と書かれた掛け軸をカミドコの中央に掛ける。「お守り」は お守り大70㎝写真10 お守り小24㎝写真 11 年に一度元日に氏神神社や伊勢神宮から頂いたお札を写真10のような大きいサイズのお札は図７のようにお社の隣に立てかけ、写真11のような小さいサイズのお札はお社の中にしまわれるか、外側に立てかけられる「榊」はカミドコのお社の左右に対でお供えされる。使われる榊の種類が地域によって違い、壱岐島の南側ではハマヒサカ、北側ではゴゼンシバが使われている。毎月一日に交換される。「お神酒」はカミドコのお社に対でお供えされる。毎月一日に交換される。「蠟燭たて又は線香立て」はカミドコのお社に対で置かれる。お供え物などをお供えする際に神様にお知らせをするため火を灯す。「シモドコ」は縦約 220 ㎝（七尺から八尺）・横約 170 ㎝（五から七尺）・奥行き約90㎝（三尺）違い棚や袋棚が設けられることが多い。カミドコの飾り棚で干支やだるまなどの縁起物や農作物、水産物が置かれ、お歳暮やお中元もお供えされる。床脇を基に造られている。「ランマ」は縦約 150 ㎝（五尺）横約 210 ㎝（七尺）ガラス入りの主に縁起物や家紋が彫刻された障子である。書院造りを基に造られたと思われるが、書院造りのように書院甲板や地袋は造られていない。「床柱」は家屋内で最も大きい柱でいわば大黒柱であるためカミドコ・シモドコを造るうえで最も重要視される。まきの木を使用し素材の木の皮を竹ぺらを使ってはがし、米ぬかや藁で艶出しをする。また、壱岐は「ヒマワリ」（ 右回り ）は幸運を呼ぶため大事にしている。そのため、カミドコ方面（ 右側 ）にねじれているものが好ましい。特に勝本町ではヒマワリは幸運を呼び込むと強く信仰されているため、祭りの神輿の回り方や回覧板の回り方まですべてヒマワリである。また、「ヒマワリ」と対照的に左回りである。「サカマワリ」があるこれは不吉なものとされ、葬儀や法事などで移動の際に使われる。「落とし掛け」には屋久杉が好まれて使われ、そこに「オコシ」という自然発生（虫食いではない）した穴が開いていると縁起がいいとされている。「床框」は約５～10㎝の高さで造られる。家庭によっては二段造られることもある。お供え物は、基本的に大根・人参・お米・鮮魚がお供えされ、適宜、交換される。季節によって旬の野菜や魚が供える。お参りの作法、お正月や家業の節目、お供えの交換時に二礼二拍手一礼で感謝やご報告をする。

・壱岐の荒神様　火の神である荒神様を信仰する壱岐の荒神様は大きく分けて二種類ある。壱岐で一般的な様式のもと、商店や名家などが趣向を凝らして造る豪勢なもので荒神様だけでなく商売繁盛の神様が祀られているものがある。

・壱岐の一般的な荒神様

台所の壁に立った時の目線より高い場所に板を張りカミドコ・シモドコと向き合うよう西向きに造られる。その上にお社、しめ縄、お守り、榊、お神酒が置かれている。また、板には新生児の命名札が一生ご飯を食べられるようにと米粒で貼られる。「お社」は一社型のお社である。「しめ縄」は三つの房と二つの紙垂が交互に付けられる。カミドコ・シモドコのしめ縄と同様に一般的なしめ縄とは逆で綯いはじめを右側に、綯い終わりを左側に飾っている。これは、壱岐のヒマワリ信仰が影響しているものだと考えられる。「お守り」は縦約25㎝・横７㎝の氏神様や天照大御神宮のお守りがお社の中及び、外側に立てかけられている。「榊」はカミドコ・シモドコと同様に、お社の左右に対でお供えされる。使われる榊の種類が地域によって違い、壱岐島の南側ではハマヒサカ、北側ではゴゼンシバが使われている。毎月一日に交換される。「お神酒」はお社に対でお供えされ、毎月一日に交換される。お参りの作法はカミドコ・シモドコと同様である。

・壱岐の特徴的な荒神様

壱岐の酒屋や旅館などの商店や名家の家の玄関に置かれる。荒神様をお祀りすると同時に、商売繁盛の神様なども祀られる。戸棚付きの台の上にお社が置かれて、その中や周辺にしめ縄、お守り、榊、お神酒が置かれている。大きさは定められていないが、今回の調査で計測した神棚から大きさは、縦（台含め）約 2 m・（お社のみ）約1m～ 1.3 m・横1.5 m・奥行き1mであると想定できる。壱岐の一般的な荒神様のように新生児の命名札は貼られない。この荒神様の大きさや豪華さでライバルとけん制しあっていた。「お社」は三社型のお社で縦１m・横 1.5 m・奥行き１mである。釘は一切使われないはめ込み式で造られる。「台」は縦２m・横 1.5 m・奥行き１mである。人の目線より上にお社を設置する役割と、収納スペースの役割を持っている。「しめ縄」は壱岐の一般的な荒神様とどうようである。「お守り」はカミドコ・シモドコと同様である。「榊」「お神酒」、お参りの作法はカミドコ・シモドコ、壱岐の一般的な荒神様と同様である。このことから、壱岐の神棚は日本における一般的な神棚と比べて独特な信仰形態であると言えるだろう。

３．壱岐の捕鯨からみる壱岐の神棚のルーツ

壱岐の神棚のルーツがあるのだとすればどこにあるのか。壱岐では17世紀前半から19世紀後半まで捕鯨をしており、壱岐島内には当時の日本の三大富豪とまで言われた土肥組が存在した。その土肥組は前研究でも言及したように壱岐の神社・寺院に大きな影響を与えていた。このことから、壱岐の神棚に他地域からの影響が受ける可能性があったと考えられる事象は捕鯨漁であると考え、壱岐の捕鯨から壱岐の神棚のルーツを検討する。

３．１研究方法

文献調査

①調査の概要　壱岐の鯨組と交流のあった地域、壱岐と同じ時期に捕鯨をしていた周辺地域、壱岐の神棚と似た特徴を持つ地域を郷土史と捕鯨に関する本、神棚に関する本から調査を行った。

②結果　壱岐の鯨組と交流があった地域として京都、平戸、和歌山がある。（勝本町史）壱岐と同じ時期に捕鯨をしていた周辺地域として佐賀県唐津市、福岡県がある。（唐津市史、福岡市史）壱岐の神棚と似た特徴を持つ地域として高知、香川県瀬戸内海付近がある。（日本民俗文化大系）

聞き取り調査

①調査の概要　松永ご夫妻、中田ご夫妻、聖母宮の宮司を対象に壱岐の鯨組と交流のあった地域を調査した結果、表１にあるように長崎県平戸市、京都府、香川県瀬戸内海付近があることが分かった。これらの調査から京都府丹後資料館、長崎県平戸市松浦資料館、島の館資料館、長崎県五島市五島資料館、和歌山県大地村資料館、高知県室戸資料館、香川県瀬戸内海歴史民俗資料館、佐賀県唐津資料館、福岡大学を対象に壱岐の鯨組と交流があったか、それぞれの地域に壱岐のカミドコ・シモドコ、荒神様と似た特徴を持つ神棚があるかを質問した。

結果　聞き取り結果のまとめは表のとおりである。

都道府県	資料館・大学	壱岐の鯨組と交流と交流があったか	カミドコ・シモドコと似た特徴の神棚があるか	壱岐の特徴的な荒神様と似た特徴の神棚があるか
京都府	丹後資料館	わからない	ある	ない
長崎県	松浦資料館	あった	ない	ない
長崎県	島の館資料館	あった	ない	ない
長崎県	五島資料館	わからない	ない	ない
和歌山県	大地村資料館	あった	ない	ない
高知県	室戸資料館	わからない	ある	ない
香川県	瀬戸内海歴史民俗資料館	わからない	ない	ある
佐賀県	唐津市資料館	あった	ない	ない
福岡県	福岡大学	わからない	ない	ない

３．２考察

壱岐の鯨組との交流がある地域やその可能性のある地域が多いものの、壱岐の神棚と似た特徴の神棚のある地域はあまり見られなかった。壱岐の神棚と似た特徴を持っていると思われる地域として、京都府丹後、香川の瀬戸内海近くの地域の神棚は比較的大きな神棚であったが横長に作られていたため、壱岐の荒神様の特徴である縦長な作りと当てはまらなかった。高知県室戸市の神棚は床の間に作られていたが、壱岐とは違い床脇の天袋に作られているのみであったため壱岐の神棚の特徴と当てはまらなかった。このことから、今回の検討では壱岐の捕鯨から壱岐の神棚のルーツは見られなかった。

４．まとめ

本研究では壱岐の神棚の形態と文化、及びルーツを検討した。壱岐の神棚の形態は聞き取り調査とフィールドワークを用いて、カミドコ・シモドコという床の間に造られる神棚とカミドコの一部である書院造がもととなったランマ、壱岐の一般的な家庭の台所に造られ壁にかけられるものと、玄関口に造る縦長で豪華なものの主に二種類ある荒神様、これらの３つの神棚が家屋にあることが分かった。また、壱岐の神棚には勝本町の沿岸部で信仰されている「ヒマワリ信仰」からの影響があり、カミドコ・シモドコの名前の由来は上手、下手にあるのではないかと考察した。ルーツについては壱岐の捕鯨から見られるのではないかと仮説を立て、文献調査と聞き取り調査を用いて、文献調査で読み取れた壱岐の捕鯨で交流のあった周辺地域と壱岐の神棚と似た特徴のある神棚のある地域で捕鯨を行っている周辺地域の資料館、大学に聞き取り調査を行った。その結果、似た特徴のある神棚は見られたもののどれも壱岐の神棚とは形態が異なっていたため、今回のアプローチからは壱岐の捕鯨と壱岐の神棚には関係性は見ることが出来なかった。

５．今後の課題

今回の検討から、壱岐のおける神棚の形態について明らかにし、独特な信仰形態であると証明ができたが、ルーツを明らかにするにはまだ検討が必要であるため、今後は壱岐の鯨組である土肥家の来歴から壱岐の神棚のルーツについて検討していきたい。

第17回全国高校生歴史フォーラム　研究タイトル一覧

（高等学校等コード順に掲載）

研究タイトル	高等学校名
北黄金貝塚から読み解く縄文の人々の生活	旭川明成高等学校
関ヶ原合戦屏風を読み解く	青森県立弘前高等学校
昭和初期の「八戸えんぶり」と恐慌・戦争　―近代地方新聞の研究を通して―	八戸工業大学第二高等学校
「りんこうの館」と日和山城の関係性　～軍事学的視点から読み解く葛西氏の城郭～	宮城県石巻西高等学校
宗教及び防衛から見る多賀城の立地	宮城県宮城野高等学校
秋田の戊辰戦争の後始末　―今の秋田へとつながる道とは何だったのか―	秋田県立秋田北高等学校
薩摩藩の強さの秘密	山形県立谷地高等学校
佐竹氏の知られざる経済力	茨城高等学校
日本人はなぜラーメンを好むようになったのか？　～ラーメン文化と歴史の関わり～	常盤大学高等学校
綴る法度は愚痴と苦労　～結城氏新法度と結城政勝～	土浦日本大学高等学校
『吾妻鏡』から読み取る 武神「鹿島神宮」の起こりと源頼朝	清真学園高等学校
妖怪と見る日本の歴史	常総学院高等学校
長野業政はなぜ三つ巴の地で生き抜くことができたのか　～3つの視点から考える、箕輪城と長野氏一族～	群馬県立前橋女子高等学校
渋川市とハワイの関係　～歴史的事象、施設から調べる～	群馬県立渋川高等学校
川口市の縄文人は泥炭から土器を作ったのか	埼玉県立川口北高等学校
河越夜戦は本当に奇襲による勝利だったのか？	さいたま市立大宮国際中等教育学校
「鴻巣勝願寺」の研究　―人々が勝願寺を愛した跡を探る―	伊奈学園総合高等学校
岩槻城の兵糧問題	大宮開成高等学校
「高野の施餓鬼」信仰の広がりとその起源　～近隣都県の市区町村史から探る～	昌平中学・高等学校
家守・地守少作の考察　～北葛飾郡深輪村関口家の経営実態について～	〃
館林城の惣構について　～館林城の惣構の行方とその保護と観光利用～	開智高等学校
立地傾向から外れた城は存在したのか　～GISを用いて解明した城の立地傾向を参考に～	筑波大学付属高等学校
一式戦闘機の歴史	保谷高等学校
備前国における日本刀生産　―なぜ備前国が日本刀生産の中心地となりえたか―	大妻高等学校
もしも、関ヶ原の戦いで石田三成が勝利していたら	三輪田学園高等学校
琵琶湖に浮かぶ集落・沖島の歴史と文化的固有性　～湖に生きる人々の足跡を追って～	広尾学園高等学校
中華における旧日本陸軍の阿片専売政策と帝国主義	〃
明治天皇と乃木希典の関係から見る明治神宮の文化継承への意義	青山学院高等学校
戦乱の世の見えない恐怖　―病と戦った戦国武将達―	東洋大学京北高等学校
源頼朝の征夷大将軍任官をめぐる一考察　～源頼朝はなぜ「大将軍」を望んだのか～	玉川学園高等学校
相模梶原氏の末流	明治大学中野高等学校
なぜナイフ形石器に磨製はないのか　～石器作製の実証実験より～	杉並学院高等学校
参謀本部は阿武隈川での対米戦を予想していた　～防衛課吉田中佐による想定記録～	杉並学院高等学校
手這合戦考　―手這合戦は２回あったのか？―	立志舎高等学校
現代に伝わった人形芝居　―班目人形芝居の歴史―	神奈川県立足柄高等学校
関東大震災下の箱根地域の被害と復旧　―残された史料・石碑から読み解く―	〃
コレラ流行と牛頭天王社	〃
横浜外国人居留地と競馬　―競馬による国際交流―	〃
杉山城問題　―山内上杉氏築城説は正しいか―	横浜サイエンスフロンティア高等学校
「蜜柑」の時代背景について　～文学的な解説と大正８年の歴史的な分析～	三浦学苑高等学校
唐衣・裳型式の成立過程に関する３説比較	洗足学園高等学校
戦争とは	〃
熊本城が一度も落城せず、小田原城、大阪城が落城した理由とは	〃
化粧の目的について	〃
新資料から読み解く鎌倉食用蛙養殖場	逗子開成高等学校

研究タイトル	高等学校名
北条氏康と仕える家臣　～神奈川県を代表する北条氏の家臣～	立花学園高等学校
神長官守矢頼真の収入について　～地方の神官がいかにして正三位に昇ったのか～	富士見高等学校
「松本藩における廃仏毀釈」	長野県大町岳陽高等学校
吉田松陰の「教育」の再考	岐阜県立岐阜高等学校
岐阜町を支えた二つの材木商家、丹羽與三右衛門と桑原善善家の比較考察	岐阜県立加納高等学校
地下軍需工場建設と本土決戦準備　～東海軍管区の本土決戦構想を探る～	岐阜県立関高等学校
「東美濃三カ所城」をめぐって　～山城と古文書から考える中濃の戦国史～	〃
ミッドウェー海戦大敗の原因	岐阜県立多治見高等学校
三島駅の軌跡～三島の発展を願った人々の夢～	三島学園知徳高等学校
shippo	愛知県立一宮高等学校
飯盛城にみる三好長慶の家臣統制　―大阪府立四條畷高等学校所蔵の発掘調査資料から―	大阪府立四條畷高等学校
律令体制における国の等級について	大阪府立岸和田高等学校
尼崎城天守の構造	大阪明星学園高等学校
戦国の人々の遺言　～辞世の句～	桃山学院高等学校
諸幕府から考える幕府の新定義	同志社香里高等学校
丹波篠山をＰＲ　―デカンショが愛される理由―	兵庫県立篠山産業高等学校
上月城で援軍があれば　～尼子氏の行方～	兵庫県立姫路東高等学校
福原京の盛衰	灘中学校・高等学校
なぜ巨大古墳の造営地は大阪に移るのか？　―墳丘築造企画論から考える―	奈良女子大学附属中等教育学校
親近的な観点と日本の歴史から見る奈良の伝統的工芸品	奈良県立高田高等学校
『鳥取県智頭町周辺における花籠祭りの期限とその類例の分布』	鳥取県立智頭農林高等学校
青谷上寺地遺跡水田復元の試み（Ⅰ）　―弥生時代の水田から学ぶ持続可能な水田へのアプローチ―	鳥取県立青谷高等学校
米子平野の日野川西岸砂州地域における名字と地域コミュニティーの結束	鳥取県立米子東高等学校
戦死者からの手紙	〃
備中高松城と他の城との水攻めされた籠城期間の違い	明誠学院高等学校
井上家住宅から見る倉敷の歴史	金光学園中学・高等学校
福山の踊りについて	近大付属広島高等学校福山校
明王院と周辺建築について	〃
吉備律神社	〃
沼名前神社	〃
日本最古級の櫓　伏見櫓について	〃
太田家住宅　～住宅が重要文化財に？～	〃
名勝・鞆公園　～今も残る江戸時代風景～	〃
大洲の町並み	愛媛県立大洲高等学校
let me introduce "Hizikawa"	〃
豫章館の歴史を調べる	〃
先人から学ぶ　～愛媛～	〃
輝国陣地を探す　～記録なき高射砲陣地～	上智福岡高等学校
壱岐における神棚文化について	長崎県立壱岐高等学校
壱岐勝本城跡の本丸虎口に関する研究	〃
中世長崎史から見る地方豪族	長崎南山高等学校
長与町の戦国時代の城跡と当時の富についての考察	〃
隼人	鹿児島純心女子高等学校
大阪朝日新聞から見た四カ国条約	関西外語専門学校国際高等課程

※個人情報に配慮して、研究タイトルと高等学校名のみを記載しています。

〈審査委員〉

今津　節生（審査委員長・奈良大学 学長）

大西　英人（奈良大学 文学部国文学科 教授）

宮本　亮一（奈良大学 文学部史学科 准教授）

土平　　博（奈良大学 文学部地理学科 教授）

大河内智之（奈良大学 文学部文化財学科 准教授）

片　　雪蘭（奈良大学 社会学部総合社会学科 講師）

木下　光生（実行委員長・奈良大学 文学部史学科 教授）

光石亜由美（奈良大学 文学部国文学科 教授）

岩崎　敬二（奈良大学 文学部地理学科 教授）

比佐陽一郎（奈良大学 文学部文化財学科 教授）

岡部　純子（奈良大学 社会学部心理学科 准教授）

北　奈緒美（奈良県教育委員会 指導主事）

第17回（2023年）
全国高校生歴史フォーラム
発　表　集

編集・発行　第17回全国高校生歴史フォーラム実行委員会
〒631-8502 奈良市山陵町1500 奈良大学 広報室内
TEL 0742－41－9588
印　　刷　共同精版印刷株式会社
〒630-8013 奈良市三条大路2丁目2-6

奈良で学ぶ贅沢

主催

奈良大学・奈良県